

英 語 英 米 文 学 論 集

Journal of English Language and Literature

安田女子大学英語英米文学会

English Language and Literature Society,

Yasuda Women's University

目 次

Dickens の身体表現に関する一考察

——“his hands in his pockets”に注目して——……………	高 口 圭 轉	1
--	---------	---

Martin and White (2005) の Appraisal モデル

の再構築……………	三 宅 英 文	13
-----------	---------	----

文頭重心の原則と wh 移動

——焦点度重量の相対化——……………	杉 山 正 二	31
--------------------	---------	----

複線径路等至性モデリングを用いた

留学についての語りの分析……………	山 川 健 一	51
-------------------	---------	----

「虚構世界」と「現実世界」：小説を読む行為と 異文化コミュニケーションを学ぶ行為を繋ぐ (14)

——あらたに加えられた物語, <i>Carved in Bone</i> の意味すること——……………	青 木 順 子	71
--	---------	----

認知意味論と「新しい実在論」……………	青 木 克 仁	95
---------------------	---------	----

著者紹介

活動報告, 投稿規定

学会会則

Dickens の身体表現に関する一考察 —“his hands in his pockets”に注目して—

高 口 圭 轉

要 旨

本論では、Korte (1997) が提唱する身体表現の分析の枠組みと Mahlberg (2013) の 5 語からなる cluster (5-word clusters) に注目した分析結果を援用し、Charles Dickens の作品に見られる身体表現の機能や身体表現と人物描写との関係などに注目する。特に、“his hands in his pockets” という hand を含む身体表現に注目し、Dickens の人物描写における身体表現の重要性およびその言語特質を探る手掛かりとしたい。分析に際しては、自作の 3 つのコーパス、すなわち、Dickens の 23 作品を含む *Dickens Corpus*、Dickens 以外の 19 世紀の作家の 74 作品を収録しているコーパス (*19th Works Corpus*) および 18 世紀の作家の 31 作品を収録するコーパス (*18th Works Corpus*) の 3 つのコーパスを利用する。本論の分析を通して、Dickens の表現技法のメカニズムの一端を示したい¹⁾。

1. は じ め に

Korte (1997:190) は、その著 *Body Language in Literature* において、文学における身体表現の分析の枠組みを示すとともに、“By the nineteenth century, such non-verbal accompaniment to speech is an established fictional device, Of which Charles Dickens has been deemed the master.” と述べ、Dickens の作品における身体表現の重要性および特質を指摘している。

また、Mahlberg (2013) は、その著 *Corpus Stylistics and Dickens's Fiction* において、Charles Dickens (1812-1870) の 23 作品と、ほぼ同数の語彙数を含む 19 世紀の作家 18 人の 29 作品を分析対象として、複数の語句からなる繰り返し使用される語句のか

¹⁾ 本研究は、JSPS 科研費 基盤研究 (C) 19K00674 「英米文学作品における歴史的文体研究としての英語表現史研究：身体表現の機能の解明」の助成を受けている。

たまり、すなわち、繰り返される固定表現を cluster と呼び、この cluster と Dickens の文体や言語特性との関係を探っている²⁾。特に、5語からなる cluster (5-word clusters) に注目し、その第6章では、Korte(1997) の身体表現の分析の枠組みを援用して、Corpus Stylistics の視点から、body language の機能や body language と人物描写との関係などを分析している。

本論では、Mahlberg (2013: 100-27) の body language に関する考察を参照し、Charles Dickens の人物描写に見られる身体表現の重要性および特質を考察してみた。具体的には、“his hands in his pockets” という5語からなる cluster、換言すれば、Dickens が好んで使用した身体表現およびこの表現と関連する表現に注目し、Dickens が人物描写においてどのような表現技巧を用いているのかについての考察を試みる。

まず、“his hands in his pockets” という5語からなる cluster の使用を分析する前に、この身体表現に使用されている hand(s) という語を Dickens がいかに好んで使用しているのかを見てみたい。

2. Dickens における “hand” の使用頻度

次に示す Table 1 は、拙論 (Koguchi, 2019: 87) から引用したものであり、Dickens の作品と Dickens 以外の 19 世紀の作家の作品で使用される内容語の使用頻度を比較している。Dickens Corpus とした自作のコーパスには、Dickens の 23 作品が含まれている。また、Dickens 以外の 19 世紀の作家のコーパス (19th Works Corpus) には、Austin, Elliot, Hardy, Scott, Thackeray など 11 名の作家の 74 作品を収録している。トークン数で比較すると、19 世紀の作家のコーパスは、Dickens Corpus の約 3 倍のトークン数となる³⁾。トークン数が異なる 2 つのコーパスを比較するため、実際の使

²⁾ Mahlberg (2013: 3) は、“repeated sequences of words such as *in the middle of the, as if he had been, or his hands in his pockets*” という表現で clusters を定義示している。

³⁾ この 2 つのコーパス及び後述する 18 世紀の作家のコーパス (18th Works Corpus) は、現在、広島大学と熊本大学出身の研究者が共同で作成している *Dickens Lexicon Digital* に実装予定の電子テキストを利用して作成したものである。各コーパスの収録作品は、Koguchi (2018: 130-31) に掲載している。

用頻度とともに、100 万語での使用頻度に換算した数字も掲載している。

この表を作成する際には、代名詞や冠詞などの機能語は対象語とせず、内容語のみを分析対象としている。また、単語を見出し語化するプロセス、すなわち lemmatization を実行している。具体的には、1 位にランクされている say には, say, says, said そして saying という異なる語形式を say という見出し語に集めている。この頻度表は 50 位までの高頻度語を示しているだけであり、完全なものとは言えないかもしれないが、19 世紀の他の作家 Dickens がよく使用する語の傾向は示しているように思える。

Table 1. The 50 highest-frequency content words in *Dickens Corpus* and *19th Works Corpus*

<i>Dickens Corpus</i>			<i>19th Works Corpus</i>		<i>Dickens Corpus</i>			<i>19th Works Corpus</i>	
App.449000 words			App.13534000 words		<i>Dickens Corpus</i>			App.13534000 words	
Rank	Word	Freq.	Word	Freq.	Rank	Word	Freq.	Word	Freq.
1	say	39,657	say	92,503	26	again	6,919	other	21,639
2	no	16,235	no	51,410	27	other	6,884	give	20,890
3	go	14,521	go	42,352	28	much	6,736	day	20,539
4	know	13,810	know	39,508	29	great	6,704	much	20,042
5	look	13,492	think	39,307	30	such	6,665	tell	19,730
6	very	12,770	man	36,301	31	well	6,384	only	19,651
7	good	12,197	good	35,497	32	head	6,367	never	19,119
8	man	11,982	see	35,411	33	eye	6,263	old	18,088
9	see	11,685	come	32,938	34	dear	6,260	get	17,710
10	come	11,527	make	32,516	35	day	6,137	hand	17,391
11	little	11,296	very	32,146	36	get	6,099	house	16,491
12	take	10,790	more	29,440	37	way	5,794	way	15,610
13	time	9,926	now	28,971	38	gentleman	5,786	again	15,362
14	think	9,861	take	27,624	39	face	5,682	great	15,337
15	make	9,751	look	26,650	40	young	5,628	two	14,982
16	old	9,275	any	24,122	41	house	5,278	young	14,759
17	hand	9,196	time	24,036	42	give	5,240	word	14,549
18	more	9,110	like	23,784	43	two	5,225	thing	14,435
19	now	8,917	then	23,639	44	return	5,190	too	14,102
20	some	8,235	little	23,608	45	night	5,158	woman	13,801
21	then	7,622	some	23,331	46	lady	5,013	find	13,778
22	any	7,559	such	22,914	47	tell	5,002	friend	13,585
23	like	7,290	lady	22,195	48	door	4,965	here	13,524
24	here	7,254	own	21,869	49	own	4,953	hear	13,388
25	never	6,926	well	21,867	50	long	4,893	room	13,196

Table 1 を見てわかるように、また Hori (2004: 118-20) も指摘しているように、Dickens の作品には肉体や身体を表す語彙がよく使われている。身体の一部を表す語のなかでも、網掛けにした hand (17 位), head (32 位), eye (33 位), face (39

位) という語は, Dickens が好んで使用している語彙である。特に, hand という語は, 19 世紀の作家のコーパスでも 35 位に位置し, 様々な作家が高頻度で使用していることを示しているが, *Dickens Corpus* においては, 16 位という高頻度で使用されており, Dickens がこの語を非常に好んで使用したことがわかる。

また, Table 2 では, *Dickens Corpus* と 19 世紀の作家のコーパスに加えて, 18 世紀の作家のコーパス (*18th Works Corpus*) と Austen の 6 作品のコーパス (*Austen Corpus*) において, hand, head, eye, face という 4 つの語が, この 4 つのコーパスにおいてどのような頻度で使用されているのかを示している。Table 1 の場合と同様に, トークン数が異なる 4 つのコーパスを比較するため, 実際の使用頻度とともに, 100 万語での使用頻度に換算した数字も掲載している。18 世紀の作家のコーパスには, Defoe, Fielding, Richardson, Smollett, Swift など 10 名の作家の 31 作品を収録している。そのトークン数は, *Dickens Corpus* の約 1.14 倍となっている。また, *Austen Corpus* には Austen の 6 作品を収録している。そのトークン数は 100 万語に届かない, 約 72 万 9 千語しかないが, Dickens や 19 世紀の作家とのとの比較を示すために掲載している⁴⁾。

Table 2. Frequencies of ‘hand,’ ‘head,’ ‘eye,’ and ‘face’ in the four corpora

<i>Dickens Corpus</i>			<i>19th Works Corpus</i>		<i>Austen Corpus</i>		<i>18th Works Corpus</i>	
Approx. 4,499,000 words			Approx. 13,534,000 words		Approx. 729,000 words		Approx. 5,111,000 words	
Word	Freq.	/1M	Freq.	/1M	Freq.	/1M	Freq.	/1M
hand	9,196	2,044	17,391	1,285	360	494	5,189	1,015
head	6,367	1,415	9,011	666	244	335	2,738	536
eye	6,263	1,392	12,736	941	456	626	2,996	586
face	5,682	1,263	10,282	760	165	226	1,600	313

身体表現を用いた表現技法の使用に関しては, Korte (1997: 182-83) は, 次の引用 (1) に示しているように, 身体表現を用いた表現技法の使用は, 18 世紀半ばより増

⁴⁾ *Austen Corpus* には *Sense and Sensibility* (1811), *Pride and Prejudice* (1813), *Mansfield Park* (1814), *Emma* (1815), *Northanger Abbey* (1817), *Persuasion* (1817) の 6 作品を収録している。

加し、19 世紀にはさらにその使用が増加したことを指摘している。

- (1) The extent to which novelists' awareness of body language and its expressive quality has increased since the mid-eighteenth century is obvious

Increased attention to body language in the nineteenth century also becomes obvious in that it is often strongly emphasized — through detailed description, a glossing or comments, or conspicuously poetic presentation.

Table2 は、限られた作品の中で、4つの身体の部位を表す語の使用頻度を示しているだけであるが、Korte (1997: 182-83) の指摘通り、少なくとも、18 世紀から 19 世紀の作品にかけて、これらの 4つの語彙の使用が増えていること、また、19 世紀の作家の中でも、Dickens がこれらの語をより高頻度で使用していることを示しているように思える。

一方、*Austen Corpus* においては、100 万語での使用頻度に換算した数字に関して、他のコーパスと比べて、4つの語の使用頻度において大きな違いが見られる。Dickens 以外の 19 世紀の作家の平均的な使用頻度と比較しても、身体の部位を表す語の使用は低頻度である。特に、**hand** の使用頻度は著しく低いという結果となった。19 世紀の作家の作品において、身体を表す語句の使用は、18 世紀の作品と比べて増加していると言うことが可能だろうが、もちろん作家による違いもあることも言及しておきたい。

3. 身体表現 “his hands in his pockets” の分析

本章では、Dickens の作品の登場人物の描写において、身体表現 “his hands in his pockets” がどのように使用されているのかに注目していく。

Mahlberg (2013: 106) は、Dickens の 23 作品 (DCorp と表記) と、ほぼ同数の語彙数を含む 19 世紀の作家 18 人の 29 作品 (19C と表記) (どちらも約 4.5 百万語) において、5 語からなる **Body Part cluster** としてどのようなものが見られるのか、その使用頻度、加えて、その表現が Dickens のいくつかの作品で使用されているのかと

めている。次の Table 3 は、その分析結果から、使用頻度が高い cluster や key clusters として掲載されているものの一部を抜き出したものである。

Table 3. Body Part clusters (freq. ≥ 5 and key clusters)

Cluster	DCorp Hits.	DCorp Texts	19C Hits	19C Texts
at the head of the	30	14	29	14
his hands in his pockets	90	20	13	8
his head on one side	30	11	0	0
with his back to the	43	14	22	11

この表が示すように、“his hands in his pockets” という表現は、Dickens の 23 の作品中 20 作品で、90 回使用されている。一方、19 世紀の他の作家の作品では、8 作品において、13 回しか使用されていない。圧倒的に Dickens の作品での使用が多い表現である。言い換えれば、Dickens が好んで使用した身体表現と見なすことができるであろう⁵⁾。

この“his hands in his pockets” という身体表現は、Dickens の 20 作品の中でも、*The Old Curiosity Shop* (1840-41) で 9 回、*Hart Times* (1854) と *Little Dorrit* (1855-57) で 8 回、*Dombey and Son* (1846-48) で 7 回使用されている。さらに、この表現が使用されている登場人物に注目すると、*Hart Times* において、Mr. Bounderby に対して 8 回の使用中 7 回の使用を見ることができる⁶⁾。

Korte (1997: 135) もこの表現について言及し、次の引用 (2) に見られるように、“his hands in his pockets” という表現が、*Hard Times* の Mr. Bounderby の描写で繰り返し使用され彼の描き分け、characterization に役立っていることを指摘している。

⁵⁾ 19 世紀の作家の作品を集めた自作のコーパス (*19th Works Corpus*) においては、“his hands in his pockets” という表現は、45 例見ることができる。

⁶⁾ *Hard Times* の主要登場人物である Gradgrind にも、1 回だけであるが、この“his hands in his pockets” という身体表現の使用を見ることができる。

- (2) “Dickens’s preference for this device [the function of body language to identify characters] is notorious, especially since his non-verbal leitmotifs are often absurd or grotesque and thus particularly conspicuous. In *Hard Times* (1854), Mr Bounderby is constantly putting his hands into his pockets; ...

次の引用 (3) に、貧窮から自力で成り上がったことを公言し、それを繰り返して自慢する Mr. Bounderby を描く具体例を取り挙げる。

- (3) So, Mr Bounderby threw on his hat — he always threw it on, as expressing a man who had been far too busily employed in making himself, to acquire any fashion of wearing his hat — and *with his hands in his pockets*, sauntered out into the hall. “I never wear gloves,” it was his custom to say. “I didn’t climb up the ladder in them. — Shouldn’t be so high up, if I had.” (*HT*.I.4)

Mr. Bounderby のいつもの自慢話、すなわち “I never wear gloves,” ... “I didn’t climb up the ladder in them. — Shouldn’t be so high up, if I had.” を述べる時の身体表現として、彼が最初に登場する場面から繰り返し、“(with) his hands in his pockets” という身体表現が使用されている。この身体表現の繰り返しは、Korte (1997: 41) によれば、粗野な個人主義を体現する彼の特性を表すのに役立つ “externalisers” として機能しているように思える⁷⁾。

すでに言及したように、“(with) his hands in his pockets” という表現は、Mr. Bounderby の描写だけでなく、Dickens の作品の様々な人物の描写に用いられ、その人物の様々な態度や感情を表すのに使用されている。

たとえば、*Hard Times* においても、次の引用 (4) に見られるように、サーカスを見に行った自分の子供たちのことを思い悩む Gradgrind の身体表現として、whether

⁷⁾ Korte (1997: 41) は、“externalisers” を “externalisers, ..., those forms of NVC which convey information about a character apart from his or her temporary emotions: relatively stable mental conditions (such as [...] opinions, values, personality traits), but also mental and intellectual activities and conditions.” と定義している。

節の繰り返しとともに、“(with) his hands in his pockets” が使用されている。この場面では、“(with) his hands in his pockets” という身体表現は、*Gradgrind* の人物描写に役立っているというより、彼の心理描写と結びついているように思える。

- (4) “Whether,” said Gradgrind, pondering *with his hands in his pockets*, and his cavernous eyes on the fire, “whether any instructor or servant can have suggested anything? Whether Louisa or Thomas can have been reading anything? Whether, in spite of all precautions, any idle story-book can have got into the house?” (*HT.I.4*)

次に、*Hard Times* 以外の作品にみられる“(with) his hands in his pockets” という表現の例を見てみよう。引用 (5) では、教師 Mell に対して反抗的な態度をとる *David Copperfield* (1849-50) の登場人物 Steerforth の姿が、“with his back against the wall” や “with his mouth shut up as if he were whistling” という身体表現とともに、“(with) his hands in his pockets” という身体表現を用いて表されている。

- (5) Steerforth’s place was at the bottom of the school, at the opposite end of the long room. He was lounging *with his back against the wall*, and *his hands in his pockets*, and looked at Mr Mell with his mouth shut up as if he were whistling, when Mr Mell looked at him. (*DC.7*)

身体表現“(with) his hands in his pockets” は、*Hard Times* の Mr. Bounderby の場合のように、同じ身体表現が個々の作品で繰り返され、人物描写に役立つ場合や、異なる作品において、登場人物のその場面での態度や心理描写と深く結びつく場合が見られる⁸⁾。

最後に、*A Tale of Two Cities* (1859) での使用を考察する。この作品には、“his hands

⁸⁾ さらに、“his hand in his pocket” という単数形を用いた表現に関して、自作の *Dickens Corpus* でその使用頻度を調べてみると、14 例が見つかった。そのすべてではないが、お金をポケットから取り出すという表現との共起が多く見受けられた。

in his pockets”という表現を4例見ることができる。そのすべての例が、引用 (6) で見られるように、主人公 Carton の描写で使用されている。

- (6) Mr Carton, who had so long sat looking at the ceiling of the court, changed neither his place nor his attitude, even in this excitement. While his teamed friend, Mr Stryver, massing his papers before him, ... this one man sat leaning back, *with his torn gown half off him, his untidy wig put on just as it had happened to fall on his head after its removal, his hands in his pockets*, and his eyes on the ceiling as they had been all day. ...

Yet, this Mr Carton took in more of the details of the scene than he appeared to take in; for now, when Miss Manette's head dropped upon her father's breast, he was the first to see it, and to say audibly: "Officer! look to that young lady. Help the gentleman to take her out. Don't you see she will fall!" (TTC.II.3)

この引用では、裁判の最中、だらしない恰好でじっと天井を見つめている Carton の身体表現の一つとして、この“(with) his hands in his pockets”という身体表現が使用されている。他の3つの例が使用されている場面でも、この表現は、彼の表面的なだらしなさを象徴するかのように使用され、彼の描き分けに役立っている。ただし、*Hard Times* の Mr. Bounderby の描写においては、この表現が作品を通して5つの章 (I.6, I.11, I.16, III.4, III.5) で7回も使用されているのに対して、Carton の場合は、イギリスを舞台とした3つの章 (II.2, II.3, II.5) で使用されるのみで、作品の後半、特にフランスを舞台とする章ではこの表現をまったく見ることはできない。換言すれば、ロンドンとパリという2つの都市において、身体表現を含む Carton の人物描写がまったく異なっているのである。

また、興味深いことに、次の引用 (7) で見られるように、“his hands in his waistband”という表現が、3回 (II.5, II.5, II.11), Carton の仕事仲間である Stryver の描写で用いられている。二人は *selfish* という点で対照的な人物であるが、このように構造は類似していながら、手を入れる場所がまったく異なる表現が、対照的な二人の人物に与えられていることは単なる偶然ではないように思える。そこには作家 Dickens の

意図があるように思える⁹⁾。

(7) When the repast was fully discussed, the lion [Stryver] put *his hands in his waistband* again, and lay down to mediate. (TTC.II.5)

さらに付け加えるべきは、“(with) his hands in his pockets” という表現が Carton の外面的だらしなさを表しているように思えると述べたが、その一方で、引用 (6) の下線を施した箇所に見られるように、裁判の最中、ヒロイン Lucie が気を失いかけ卒倒しそうになるのを最初に指摘するのが Carton である。だらしない態度とは裏腹に、周囲への気配りおこたらない Carton の appearance と reality の違いが示唆されているように思える。このことは、彼の characterization, すなわち、作品の最後に描かれる彼の英雄的行為と何がしかの関係があるように思える。

4. お わ り に

以上のように、本論では、Dickens の作品において、高頻度で使用される hand(s) という身体の一部を表す語を含む“his hands in his pockets”という表現およびその繰り返し、さらにこの表現に関連する身体表現に注目してきた。身体の一部を表す語を修飾する語彙の選択のみならず、身体表現の配置の仕方、そして繰り返しの技法に、Dickens の人物描写、心理描写、物語の展開、そして作品の主題を読者に伝える技法の一端を見ることができると思える。本論では、Dickens の作品の登場人物の描写において、身体表現“his hands in his pockets”の使用に注目しただけであったが、今後は他の身体表現にも注目し、Dickens の作品に見られる身体表現の機能や作家の表現技法のメカニズムについて考察を深めていきたい。

⁹⁾ この“his hands in his waistband”という表現に関しては、自作の *Dickens Corpus* および 19 世紀のコーパスでも使用例が見つからなかった。この 2 つコーパスで調べた限りでは、Stryver のみに使用されている表現である。

参 考 文 献

- Brook, G. Leslie. 1970. *The Language of Dickens*. London: André Deutsch.
- Carter, Ronald. 1998. *Vocabulary: Applied Linguistic Perspectives* 2nd edition. London: Routledge.
- Glancy, Ruth. 1991. *A Tale of Two Cities: Dickens's Revolutionary Novel*. Boston: Twayne Publishers.
- Gliserman, Martin. 1996. *Psychoanalysis, Language and the Body of the Text*. Florida: University Press of Florida.
- Hori, Masahiro. 2004. *Investigating Dickens' Style: A Collocational Analysis*. New York: Palgrave Macmillan.
- 堀正広. 2009. 『英語コロケーション研究入門』 東京: 研究社.
- 小林祐子. 1991. 『しぐさの英語表現辞典』 東京: 研究社.
- Koguchi, Keisuke. 2009. *Repetition in Dickens's A Tale of Two Cities: An Exploration into His Linguistic Artistry*. Hiroshima: Keisuishu.
- Koguchi, Keisuke. 2018. "Body Language in Dickens: With Special Reference to 'Hand'" in Hori, M., Ikeda, Y. and Koguchi, K. (eds) *A Chronological and Comparative Study of Body Language in English and American Literature*. Tokyo: Kaitakusha.
- Korte, Barbara. 1997. *Body Language in Literature*. Tronto: University of Toronto Press.
- Leech, Geoffrey and Mick Short. 2007. *Style in Fiction: A Linguistic Introduction to English Fictional Prose* 2nd edition. London: Longman.
- Mahlberg, Michaela. 2013. *Corpus Stylistics and Dickens's Fiction*. New York: Routledge.
- Mahlberg, Michaela. 2014. "Corpus stylistics" in Burke, M. (ed.) *The Routledge Handbook of Stylistics*. London: Routledge.
- McMaster, Juliet. 1987. *Dickens the Designer*. New Jersey: Barnes & Noble Books.
- Monod, Sylvere. 1968. *Dickens the Novelist*. Norman: University of Oklahoma Press.
- Page, Norman. 1988. *Speech in the English Novel* 2nd edition. London: Macmillan.
- Quirk, Randolph. 1974. *The Linguist and the English Language*. London: Edward Arnold.
- Sørensen, Knud. 1985. *Charles Dickens: Linguistic Innovator*. Aarhus: Arkona.
- Yamamoto, Tadao. 2003. *Growth and System of the Language of Dickens: An Introduction to*

A Dickens Lexicon 3rd edition. Hiroshima: Keisuisha.

Martin and White (2005) の Appraisal モデルの再構築

三 宅 英 文

Abstract

Appraisal Systems consist of various types of evaluations. The systems, which are placed in discourse-semantics strata in SFL (Systemic Functional Linguistics) theory, play important roles in construing interpersonal meanings. With Negotiation and Involvement, Appraisals function to establish and maintain solidarity and power relationships among people.

The basic framework of Appraisal Systems has been advocated by Martin and White (2005). By using their framework, many analyses have been performed to clarify features of evaluative expressions in various types of texts. However, the framework has not been refined enough. Hommerberg and Don (2015) report that the same evaluative expression can be classified into different categories, depending on researchers. As a result, they insist on setting a new genre-specific subcategory in the framework. Some of the weaknesses of this framework appear to lie in the definitions of subcategories: what is evaluated and how far evaluative expressions extend in a clause. This study tries to modify a subcategory of the appraisal framework, i.e. Appreciation, by introducing the concept of ‘iconicity’ to the definition of each subcategory so that researchers can employ more rigid framework in their studies.

1. 研究目的

人々は、さまざまな人やモノを描写する過程で、それらに対する自分の態度や評価を表している。このような人やモノに対する話者の態度を表す表現を、選択体系機能文法では Appraisal と呼んでいる。これらの表現は、主に形容詞を中心とする語彙の選択によって表される。そのため、Appraisal Systems の研究では語彙の範疇分けが中心的な課題となっている。

Appraisal の範疇分けに関して、基準的な枠組みとなっているのが Martin and White (2005) のモデルである。しかし、この枠組みを用いて分析を行うと、研究者によって範疇分けに大きな個人差が生じてしまうことがある。たとえば、Hommerberg and Don (2015) は、分析対象の違いに合わせて Martin and White (2005) のモデルの中に新たな下位区分を設置することを提唱している。このような分析結果の多様性を生み出してしまうのは、Appraisal の枠組みの定義に曖昧な部分があるからではないかと考えられる。そこで本論文では、Martin and White (2005) のモデルの問題点を検証し直し、分析の際に研究者による範疇分けの差が少なくなるような修正を試みる。

2. Martin and White (2005) モデル

2.1 Systemic Functional Grammar における Appraisal の位置づけ

選択体系機能文法における Appraisal の位置づけを知るためには、この理論の階層構造を理解しておく必要がある。選択体系機能文法は、言語使用を図1のような階層として捉えている。一番外側にある層は context of culture である。これは、言語が使用される場面状況を示しており、この層の中には言語使用に反映される3つの要素が含まれている。それは、言葉にして伝える内容となる Field、コミュニケーションに関わる人同士の関係性を表す Tenor、そしてコミュニケーションの伝達様式である Mode である。これら3つの context の要素は、言語層である discourse-semantic 層、lexico-grammar 層において言葉の選択に反映されることになる。

Context of culture の下にある層が言語層である。この層は大きく2つのレベルに分離される。図1の一番小さな枠組みは lexico-grammar 層で、これは節レベルの言語の構成に関与している。具体的には、節の叙法の選択や entity 間の役割関係、節の出発点などの具現化に関わる層である。音声化や文字化など、言語の表出に関わる phonology や graphology の層はこの lexico-grammar 層の中に含まれている。

一方、lexico-grammar 層を覆う discourse- semantic 層は、節の集合によって生み出される text の具現化に関わっている。言語の意味は、節だけでなく、節の配列によっても生み出される。Discourse-semantic 層は、節間の entity 関係や談話全体の組織化など、節とは異なったレベルで意味の生成に関わっているのである。

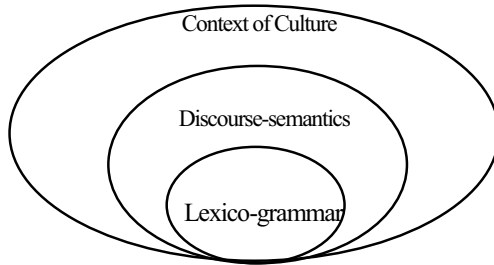


図 1. Strata

これらの階層の中で, Appraisal は discourse-semantic 層に位置づけられる。それは, 同じ語であっても使用される文脈によって話者の異なる態度が反映されることがあるからである。Egins and Slade (1997: 126) は, “... it is often not possible to state whether a lexical item has attitudinal colouring until it is used in context.” と述べ, child という語彙も I have just one child. と言う場合と You’re such a child! と言う場合では意味が異なると説明している。Lexico-grammar 層で選択された語彙そのものが話者の価値判断を含む場合もあれば, 中立的な語彙が discourse-semantic 層においてある種の価値観を伴うような場合もあるのである。更に, 評価表現の中には直接的に話者の評価を表すものもあれば, 間接的にほのめかすようなものも存在する。

以上のような理由に加え, Martin and White (2005: 10) は, (1) 話者の態度・評価は談話全体に点在する傾向があること, (2) 話者の態度は an interesting contrast in style, the contrast in styles interested me, interestingly, there’s a contrast in styles のように 1 つの節の中でもさまざまな部位によって具現化されること, (3) grammatical metaphor によって同様の内容が an interesting contrast in styles という名詞句として一つの節内に組み込まれることもあれば, His overall appearance, his stage presence, even his playing style are quite different in the two shows. のように独立した節として表現されることもあるということを指摘している。これらの理由により, Appraisal の判断には discourse-semantics 層からの視点が不可欠となるのである。

次に, Appraisal と 3 つのメタ機能との関係であるが, Martin and White (2005: 33) は “... it (Appraisal) co-articulates interpersonal meaning with two other systems—negotiation

and involvement.”と説明している。Negotiation とは話者間における information や goods-and-services のやり取り, involvement とは呼称や感嘆詞, 方言の使用などを通して表される話者の態度である。Negotiation や involvement に属する種々の表現に Appraisal 表現を組み込むことによって, 人々は言語を通して solidarity や power といった人間関係を構築しているのである。

2.2 Appraisal System の概要

Martin and White (2005) によって示される Appraisal の大まかなシステムは以下の通りである。

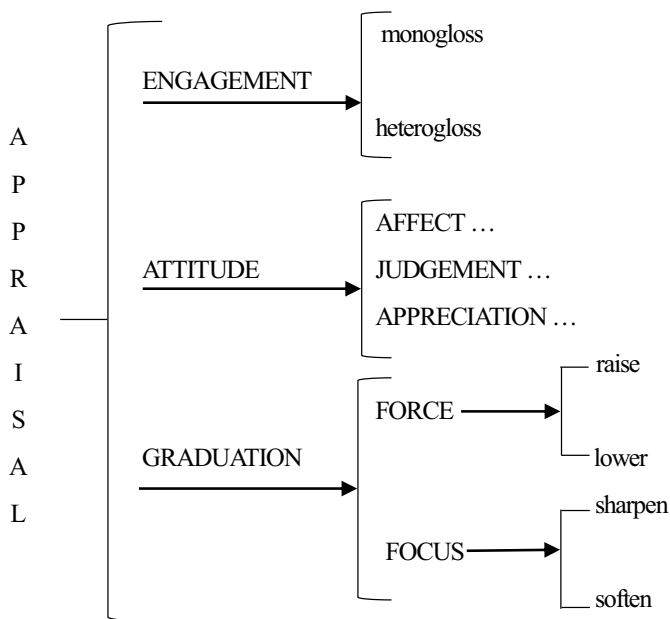


図2 An Overview of Appraisal Resources

(Martin and White, 2005: 38)

図2に示されているように, Appraisal のシステムは3つの要素で構成されている。

Engagement とは、話者が評価表現に対して他者の意見を取り入れる姿勢を見せるか、見せないかに関わるシステムである。話者が他者の意見を介入させる余地を持たせず断定的に話をする場合は monogloss, modality や伝聞、他者の意見の引用など、自分以外の意見を取り込む余地を見せる場合は heterogloss に分類される。

Attitude とは、話者が人やコトに対して自分の感情を表す評価システムである。このシステムには 3 つの下位範疇が存在する。Affect は, sad, happy, like などのように話者の気持ちを表すことで人やモノに対する評価を行うものである。Judgement は、「人」に対して kind, mean, hero, genius など、性格や行動、才能に関する表現を用いて評価を行うものである。Appreciation は, beautiful, antique, bitter などのように、「モノ」の美醜や社会的評価に関わる表現を用いて評価を行うものである。Affect が話者の気持ちを基調とした視点であるのに対し、Judgement と Appreciation は、あくまでも評価対象である「人」や「モノ」を中心とした評価表現である点で両者は区別される。

Graduation は、評価の強さに関わるシステムである。Force と focus の 2 種類が存在し、force は程度や数量の増減、focus は範疇の明確さ、明瞭さに関わっている。Force の下位範疇である raise は、very などの強意の副詞、比較級や最上級の使用、繰り返し表現、swear word の使用、a lot や totally などの数量や程度の増加を表す副詞、大げさな語彙の使用による評価の強調である。逆に、lower は just や only のように評価を弱める表現の選択である。一方、focus の下位範疇である sharpen は a real friend のように曖昧さを無くす表現、soften は a sort of friend のように明確さを下げる表現で構成される。

3. Hommerberg and Don (2015) による修正モデル

Hommerberg and Don (2015) は、Martin and White (2005) の枠組みを用いてワイン批評に用いられている表現の分析を行っている。特にモノに対する評価や態度を表す Appreciation の範疇に注目し、Martin and White (2005) のモデルの中にワイン批評に特有の評価範疇を設定することを提唱している。

Martin and White (2005) の枠組みでは、Appreciation の下位範疇には Reaction,

Composition, Valuation が存在する。

In general terms appreciations can be divided into our ‘reactions’ to things (do they catch our attention; do they please us?), their ‘composition’ (balance and complexity), and their ‘value’ (how innovative, authentic, timely, etc.)

(Martin and White, 2005: 56)

Eggin and Slade (1997) は、この下位範疇の基準を以下のようにまとめている。

The three categories of Appreciation—reaction, composition and valuation—are concerned to encode different kinds of evaluations of a thing or a happening. The direction between each of the categories can be looked at metafunctionally, i.e. in terms of the three types of meanings recognized in a systemic approach. Thus, reaction codes responses which are to do with the speaker’s interpersonal response (whether it was liked), composition is concerned with the textual response (to the overall texture), and valuation with the ideational (the content).

(Eggin and Slade, 1997: 128)

Reaction には更に下位範疇が存在する。一つは、‘did I like it?’ という基準に基づく Quality, もう一つは ‘did it grab me?’ という基準に基づく Impact である。Hommerberg and Don は、それら二つの基準を “While Quality focuses on the evaluated entity, Impact highlights the evaluator’s response. (2015: 167)” と捉えている。また、Composition に関しては、‘did it hang together?’ という基準に基づく balance と “was it hard to follow?” という基準に基づく complexity が設定されている。

この枠組みに対し、Hommerberg and Don (2015) は Reaction の下位範疇としてワインを他のモノに例える Association を加え、Composition の下位範疇に Intensity と Persistence を加えることを提案している。Hommerberg and Don (2015) の Composition に対する批判は以下のようなものである。

These two subcategories arose from the original work on Appreciation, which focused on texts dealing with visual objects of evaluation. The sense perceptions of taste, smell and feel and the notion of composition of particular aromas and flavours are therefore lacking in the framework.

(Hommerberg and Don, 2015: 169)

彼女たちは、Intensity の例として explosive, superficial, stunning concentration, great intensity, inky/blue/purple hue, extraordinary projected nose of など、Persistence の例として long finish や fades quickly in the finishなどを挙げている。

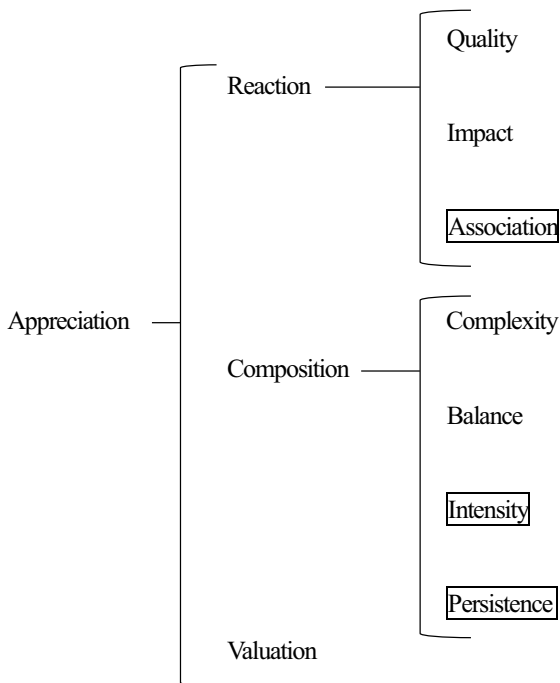


図 3. Hommerberg and Don (2015) における Appreciation の下位範疇

Hommerberg and Don (2015) の研究が興味深いのは、評者二人の範疇分けの違いを論じている点である。二人の評者が異なった範疇分けをしているのは *Reaction* と *Composition* の区分、および *Unspecified Appreciation* の設置である。

Reaction と *Composition* で評者の意見が分かれているのは、以下の例における斜字体部分の表現である。これらの表現に関して、評者 1 は *Composition* に、評者 2 は *Reaction* に区分している。

- (1) The impression is one of extraordinary *richness and purity*.
 - (2) This *broad, sweet* 2003's *supple attack* is followed by a tannic mid-section.
 - (3) It is a *plump, corpulent, fleshy, expansive* wine to enjoy during its first 10-12 years of life.
- (Hommerberg and Don, 2015: 180, 181)

この区分の理由に関して、評者 1 は対象部分に話者の感情的に関わる表現が含まれていないことを挙げている。それに対し評者 2 は、節の他の部分にある *the impression* や *supple attack* という表現が話者との関係を示しているために同じ表現を *Reaction: Impact* に区分したと説明している。

次に *Unspecified Appreciation* であるが、問題となっているのは以下のような表現である。

- (4) Batailley's 2005 may be *their finest effort* in the last forty years
 - (5) *Magnificently* concentrated, displaying a seamless integration of acidity, wood, tannin, and alcohol, a soaring mid-palate, and a finish that lasts over 60 seconds ...
- (Hommerberg and Don, 2015: 185)

評者 1 は、(4) の例の斜字体部分の表現を *Underspecified Appreciation* に分類している。その理由は、節内の *may be* という表現によって社会的な価値づけが確定しおらず、同時に評者個人の感情でもないために *Reaction* にも分類できないからとしている。それに対し、(5) の例の斜字体部分の表現は、ワインの味の強さに対する個

人的かつ肯定的な感情を表す表現であるとし、Reaction: Quality に区分している。

3. Hommerberg and Don (2015) モデルの問題の同定

Hommerberg and Don (2015) の研究にあるような Appreciation に関する評価表現の分類の差異はどこから生じるのであろうか。評者による意見の相違の中心となる問題は、評価する対象と節内の評価表現の範囲と考えられる。先の (1) や (2) の例をもう一度見てみよう。

- (1) The impression is one of extraordinary *richness and purity*.
- (2) This *broad, sweet* 2003's *supple* attack is followed by a *tannic* mid-section.

節の中に the impression や attack などの表現が用いられていると、そこに評者の存在を読み取ることができる。そのため、その節にある評価表現は評者の存在を前提とした Reaction に区分するべきであるように考えられる。しかし、評価表現の範囲を richness and purity, broad, sweet 2003 に絞ると、評者の存在は言語表現上から消えてしまうため、評者への言及を含まない Composition への区分と判断されるようになる。どこまでの範囲を評価表現と捉えるかが重要な問題となるのである。

また、以下に示す例 (3) では、評価対象をワイン全体と捉えるか、個別の評価表現をワインの構成要素として捉えるかで評価が分かれている。斜字体部分の評価表現をワインの構成要素として捉えている評者 1 は、この表現を Composition に、ワイン全体の評価として捉えている評者 2 は、これを Reaction に範疇分けしているのである。

- (3) It is a *plump, corpulent, fleshy, expansive* wine to enjoy during its first 10-12 years of life.

このような不安定な枠組みを修正するにはどのようにすれば良いのであろうか。次節では、コンテキスト層と言語層の関係から、Appraisal: Attitude: Reaction のフレームワークの再構築を試みる。

4. 修正モデル

評価が行われる場合、コンテキスト層における entity 関係は図4のように示すことができる。

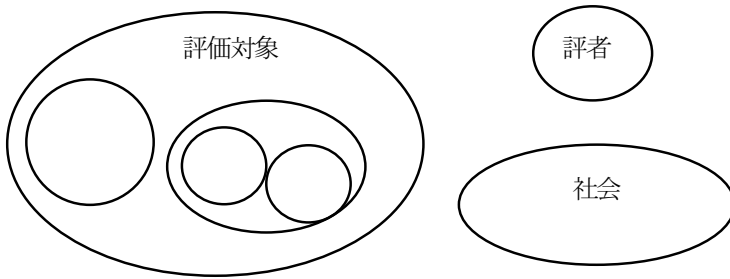


図4. コンテキスト層における entity 関係

言語層に取り込まれるコンテキスト内の要素は、評者と評価対象、社会の3つである。評者は自分の感覚器（視覚、聴覚、嗅覚、味覚、触覚、共感覚）や他のモノとの比較などを通して対象を知覚し、自分や社会における価値観と照らし合わせて対象の評価を行う。しかし、評者は常に対象全体の評価をしている訳ではない。対象を構成する部分に対して評価を行うこともある。これらのコンテキスト層内の entity を言語層に取り込む際、その関係性が言語にどのように反映されているかが Appraisal の下位範疇設定に重要な視点を与えてくれるのではないかと考えられる。

評価表現は、どのような表現であれ、それを用いる話者の主観的な意見である。Appraisal で問題としなければならないのは、評価対象と評価の関係が言語表現の中にどのように反映されているかである。このようなコンテキストと言語の関係は iconicity と呼ばれている。Martin and Matruglio は、iconicity を “to what extent are semantic relations realised as congruent configurations of process, participant and circumstance which unfold in discourse in the sequence in which they occur in the field. (2013: 89)” と定義している。評価表現の範疇を特定するには、コンテキストから言語表現に取り込まれた entity 関係がどのような組み合わせになっているのかを基準とすることで、その分類の精度が上がるのではないかと考えられる。

Appreciation はモノに焦点を当てる評価表現である。典型となるのは、下位区分の一つである Reaction: Quality である。Martin and White (2005) は、Reaction: Quality への分類の基準を “did I like it?” としている。しかし、これではコンテキスト内に存在する評者としての ‘I’ と、言語表現内における「評者」の存在が混同されてしまう。このような混同を防ぐためには、Reaction: Quality に分類される表現の評価対象を「評価対象そのもの」、つまり評価対象全体に対する言及と定義すれば良いのではないかと考えられる。この場合、この範疇の表現は、言語表現上、「評者」や「社会」といった他の entity を含まない。この再定義に基づくと、Hommerberg and Don (2015) が Intensity や Persistence に範疇分けしている explosive や long finish などの表現は、評価対象全体への言及であり、その表現の中に評者の存在や社会的な価値観が含意されていないため、全て Reaction: Quality に分類されることになる。

この定義に基づけば、彼女たちの提唱するような Reaction の下位範疇としての Intensity や Persistence は必要なくなる。そもそも、Hommerberg and Don (2015) の指摘する Intensity や Persistence に属する表現は、五感や共感覚を通した対象物の知覚であり、これらの知覚表現は Appreciation だけでなく「人」の評価である Judgment にも使用可能である。つまり、分類上のデリカシーのレベルが Quality や Impact とは異なっており、Judgment および Appreciation に共通の評価基準として検討されるべき要素なのである。

また、Hommerberg and Don (2015) の研究において評者の範疇分けが異なる例であるが、(1) では the impression という表現が用いられているものの、言語表現上、これは評価対象物が評者に与える感覚ではない。これは in my opinion などと同様の Modality 表現で、Engagement に関わる問題である。従って、この表現は分析対象外となる。一方、分析の対象である richness や purity は対象物全体に対する評価であることから、いずれも Reaction: Quality に範疇分けされることになる。また、例(3)の場合も、言語表現に participant として取り込まれているのは a plump, corpulent, fleshy, expansive wine である。この表現も、評者の感覚や社会に対する言及は含んでおらず、対象物全体への評価であることから、Reaction: Quality に分類されることになる。同様に、例(4)の their finest effort, (5)の magnificently concentrated も評価対象全

体への言及であることから Reaction: Quality に分類されることになるのである。

このように再定義された Reaction: Quality は, Martin and White (2005: 56) の Types of Appreciation の表に示されている okay, fine, good, lovely, beautiful, splendid といった肯定的評価や bad, yuk, nasty, plain, ugly, grotesque などの否定的表現の例とも一致することになる。ただし, 彼らが Reaction: Quality に範疇分けしている appealing, enchanting, welcome, repulsive, revolting, off-putting などの表現は, モノが評者の感覚に与える影響に言及する表現であることから, 別の範疇である Reaction: Impact の範疇に区分されることになる。

次に, Composition であるが, Martin and White (2005) の枠組みにおいても, これらは評価表現の中に「評者」や「社会」の存在を含まない表現となっている。Martin and White (2005: 56) は Composition を評価対象物の美醜あるいは認知的評価に関する表現と捉えており, 肯定的な例として, balanced, harmonious, unified, symmetrical, proportioned, consistent, considered, logical, shapely, curvaceous, willowy など, 否定的な表現として unbalanced, discordant, irregular, uneven, flawed, contradictory, disorganized, shapeless, amorphous, distorted などを挙げている。

しかし, ‘did it hang together?’ という基準だけで curvaceous や willowy などの表現を Composition にひとまとめにするのには無理があり, 評者の判断にばらつきを生じさせる原因になりそうである。Martin and White (2005: 56) が例示する balanced や harmonious などは, もともと内部構成要素の存在を含意する表現であり, それらの関係に言及する表現である。それに対し, curvaceous や willowy などは評価対象全体に対する評価である。そのため, Composition の範疇は, 評価対象として「対象物全体とその構成要素の関係, あるいは構成要素間の関係を取り込む表現」と定義する方がより一貫性のある範疇分けが可能であると考えられる。Composition の評価対象を「部分」とすることで, balanced や harmonious は Composition に, curvaceous や willowy は Reaction: Quality に区分する基準が明確となるのである。

このような視点で Hommerberg and Don (2015) の示す例(5)を見てみると, displaying a seamless integration of acidity, wood, tannin, and alcohol, a soaring mid-palate, and a finish that lasts over 60 seconds ... は評価対象であるワインとその部分の

meronymy 関係を取り込んだ表現となっていることが分かる。

次に Reaction: Impact の範疇であるが、これは Martin and White (2005) の定義では ‘did it grab me?’ という基準による区分となっている。しかし、この基準では ‘did I like it?’ という基準で区分される Reaction: Quality との差異が明確にならない。この問題を解決するためには、Reaction: Impact を「言語表現として評価対象が評者に与える影響を表すもの」と定義することで、Reaction: Quality とのより明確な範疇分けが可能になるのではないかと考えられる。言い換えると、‘did I like it?’ の ‘I’ はコンテキスト層内に存在する評者であり、‘did it grab me?’ の me は言語表現内に存在するか、あるいは言語内で含意される存在という区分である。

この定義に基づくと、Martin and White (2005: 56) が Reaction: Impact に肯定的評価として分類している arresting, captivating, engaging, fascinating, exciting, moving, sensational など、また、否定的評価として分類している dull, boring, tedious, ascetic, uninviting, predictable などはその中に明らかに評者の存在を取り込んだ表現となっている。そのため、これらの表現は Reaction: Impact に分類されることになる。しかしながら、lively, dramatic, intense, remarkable, notable, dry, flat, monotonous, unremarkable などの表現は、確かに強さを含む表現ではあるものの、言語表現の中に評者の存在を反映していない。そのため、これらの表現が評価対象全体に対する評価である場合には、Graduation の Force を伴った Reaction: Quality に分類されることになるのである。

本稿の定義に基づいて Hommerberg and Don (2015) の示す例(2)を見てみると、This broad, sweet 2003’s supple attack は、attack という表現がその対象として言語表現内に評者の存在を含意している。そのため、この名詞句は全体として Reaction: Impact に区分されることになるのである。

最後の下位区分である valuation は、言語表現の中に評価対象物に対する社会的な評価を取り入れたものである。Hommerberg and Don (2015: 184) は、以下の例(6)において、may の使用によって二人の評者の merit a score in the mid-nineties の範疇分けに差があることを指摘している。

- (6) This should turn out to be a profound St-Emilion and may merit a score in the mid-nineties if everything goes as well as I suspect it should.

本稿の定義に従えば、これは評価対象と社会的な価値観を結びつける表現であるため、valuation に範疇分けされることになる。May などの modal verbal operator の使用による probability の低下は、Graduation の選択に関わる問題である。Graduation の要素が評価表現に彩を添えている場合、valuation の中に raised/lowered valuation という区分を設定することによって、より正確な分析が可能になるのではないかと考えられる。

5. ま と め

本論文では、Appraisal Systems の中で「モノ」の評価に関わる Appreciation に的を絞り、その定義を再考することによってより一貫性のある研究の枠組み作りを試みた。Martin and White (2005) の提唱する枠組みをそのまま用いると、研究者によって分析結果に大きな差が生じることがある。その主な原因は、曖昧な意味を中心とした範疇分けがなされているためである。そこで本稿では、従来の ‘Do I like it?’ ‘Does it grab me?’ ‘did it hang together?’ ‘was it hard to follow?’ という問いかけに基づく分類ではなく、分類の際に iconicity の差による区分を導入することを提唱した。

Iconicity に基づく定義では、「評者」や「社会」といった entity を含まない「評価対象全体」に対する評価は Reaction: Quality に分類する。これは、評者の視覚、聴覚、嗅覚、味覚、触覚、共感覚、認識に基づく全ての評価表現を含む。従来、Martin and White (2005) の枠組みでは beautiful は Composition に分類されていたが、この形容詞が評価する対象がモノ全体である場合、Reaction: Quality に分類されるようになる。一方、評価表現が「部分」への言及である場合、Composition に分類する。Balanced などは、評価対象内にある部分関係を示す語である。そのため、このような表現は Composition に範疇に分類されることになる。Reaction: Impact は、boring などのように、「評価対象」が「評者」に与える感覚を中心とした表現で構成される。言語表現上において、「評者」の存在への言及がある、あるいは含意されることが分類の

基準となる。また、Valuation は、評価対象が世の中でどのように評価されているかに関わる表現で構成される。このようにして iconicity を判断基準に取り込むことにより、従来の枠組みよりもより精度が高い形で研究が行えるようになるのではないかと考えられる。

Reaction: Quality 評価対象全体に対する言及	Reaction: Impact 評価対象が評者に与える感覚、影響の言語上での言及
Composition 評価対象の全体、部分の関係に対する言及	Valuation 評価対象の社会に対する影響、役割への言及

図 5. Iconicity による Appreciation の分類

今後の課題は、重層化した評価表現の扱いである。下記の the Getty Museum のパンフレットにおける紹介文において、sweeping, subtle, playful, dramatic は評価対象全体である Meier's use of squares and circles に対するコメントである。これらの表現は全て評者の感覚を刺激するものではないため、Reaction: Quality に分類される。しかしながら、この節の展開を見てみると、Meier's use of squares and circles は one-of-a-kind buildings の一部であることが分かる。つまり、Meier's use of squares and circles 自体が Composition に組み込まれる要素なのである。そのため、この節の complement や unite という動詞は、Composition に範疇分けされる評価表現となる。

Architectural grid

Meier's use of squares and circles—sweeping, subtle, playful, and dramatic— complements and unites the assembly of one-of-a-kind buildings.

評価表現は、このような重層構造の中に組み込まれることもあるため、semantic density も考慮に入れた多角的な分析方法の確立が必要になると思われる。今後はこ

のような多元的な評価表現を取り込むことができる枠組みを検討してゆきたい。

参 考 文 献

- Cortazzi, M. and Jin, L. (2000). Evaluating Evaluation in Narrative. In S. Hunston and G. Thompson (eds.), *Evaluation in Text*. Oxford: Oxford University Press. 102-120.
- Eggins, S. (2004). *An Introduction to Systemic Functional Linguistics* 2nd Edition. New York: Continuum.
- Eggins, S. and Slade, D. (1997). *Analyzing Casual Conversation*. London: Cassel.
- Hommerberg, C. and Don, A. (2015). Appraisal and the Language of Wine Appreciation: A Critical Discussion of the Potential of the Appraisal Framework as a Tool to Analyse Specialised Genres. *Function of Language* 22:2. 161-191. Retrieved from https://www.researchgate.net/publication/265644645_Appraisal_and_the_language_of_wine_appreciation_A_critical_discussion_of_the_potential_of_the_Appraisal_framework_as_a_tool_to_analyse_specialised_genres
- Hunston, S. (1999). Evaluation and the Planes of Discourse: Status and Value in Persuasive Text. In S. Hunston and G. Thompson (eds.), *Evaluation in Text*. New York: Oxford University Press. 176-207.
- Macken-Horarik, M. (2003). Appraisal and the Special Instructiveness of Narrative. *Text* 23 (2), 285-312.
- Martin, J.R. (1999). Beyond Exchange: Appraisal Systems in English. In S. Hunston and G. Thompson (eds.), *Evaluation in Text*. New York: Oxford University Press. 142-175.
- Martin, J. R. and Matruglio, E. (2013) Revisiting Mode: Context In/dependency in Ancient History Classroom Discourse. In 黄国文 (ed.), *Studies in Functional Linguistics and Discourse Analysis* (V). 北京：高等教育出版社. 72-95.
- Martin, J. R. and Rose, D. (2007). *Working with Discourse*. London: Continuum.
- Martin, J. R. and White, P. R. R. (2005). *The Language of Evaluation. Appraisal in English*. New York: Palgrave Macmillan.

- Maton, K. and Doran, Y.J. (2017a). Semantic Density: A Translation Device for Revealing Complexity of Knowledge Practices in Discourse, Part 1—Wording. *ONOMÁZEIN Número especial SFL*. 46-76.
- Maton, K. and Doran, Y.J. (2017b). Condensation: A Translation Device for Revealing Complexity of Knowledge Practices in Discourse, Part 2—Clausing and Sequencing. *ONOMÁZEIN Número especial SFL*. 77-110.
- 三宅英文 (2010). 観光案内の広告に観察される勧誘表現. 『英語英米文学論集』第 19 号. 63-78.
- 三宅英文 (2018). パンフレットに反映される観光施設の違いによる Appraisal 表現の差異. 『英語英米文学論集』第 27 号. 71-88.
- 三宅英文 (2018). 美術館のパンフレットの Coding Orientation—施設と文化の差異—. 国際基督教大学大学院アーツ・サイエンス学科提出博士論文.
- Ngo, T. and Unsworth, L. (2015). Reworking the Appraisal Framework in ESL Research: Refining Attitude Resources. *Functional Linguistics* 2: 1. Retrieved from <https://doi.org/10.1186/s40554-015-0013-x>
- Thompson, G. (2004). *Introducing Functional Grammar* 2nd Edition. London: Arnold.
- Thompson, G. and Hunston S. (2000). Evaluation: An Introduction. In S. Hunston and G. Thompson (eds.), *Evaluation in Text*. Oxford: Oxford University Press. 1-27.

文頭重心の原則と wh 移動

— 焦点度重量の相対化 —

杉 山 正 二

Abstract

In this paper, I would like to reconsider Top-Weight Principle from the viewpoint of new framework of Balance Theory and claim that general grammaticality of wh-questions can be explained and predicted naturally by our framework.

Top-Weight Principle is a mirror image of End-Weight Principle, which is responsible for declarative sentences and gives an important motivation for rightward focus movement such as Heavy NP Shift and extraposition from NP. On the other hand, Top-Weight Principle triggers leftward focus movement such as wh-movement. In order to observe Top-Weight Principle, the wh element is required to have 5 points as the total weight, which consists of both its potential weight and focus weight. In Sugiyama(2020), I proposed that the potential weight is determined by its deep structure position. In this paper, I will suggest that focus weight is determined depending on its structural position, too. Furthermore, I will make a few proposals concerning focus weight of bounding nodes and argue for their empirical advantage.

1. 序 論

杉山 (2019,2020) において、バランス理論の新モデルで提案された文末重心の原則 (end-weight principle) を仮定すると、重名詞句移動 (heavy NP shift=HNPS) と名詞句からの外置化 (extraposition) に代表される右方焦点移動 (rightward focus movement) の主な制約が自然に説明できる可能性が主張された。文末重心の原則は次のように定義される¹⁾。

- (1) 文末重心の原則：英語の平叙文は、右下降傾斜、つまり、焦点が文末にある場合が最もバランスのとれた安定状態である²⁾。

条件：4点 \leq 焦点の総重量（潜在的重量＋焦点度重量） \leq 5点

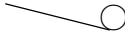
杉山（1999）の初期モデルと異なる重要な提案は、文中の焦点（focus）には潜在的重量（potential weight）と焦点度重量（focus weight）を合算した重量が総重量として付与され、その総重量によって相対的な文の傾斜（sentence inclination）が決定されるという仮定である。潜在的重量とは、表層構造（surface structure）において焦点が付与される前の段階、つまり深層構造（deep structure）において各構成素が内在的に持っている重量を意味し、次のように決定される。

- (2) 階層構造上の位置と潜在的重量の相対的關係：階層構造上、下位に生成される構成素ほどその潜在的重量が増す。

この仮定に従うと、文中の主語（subject）、目的語（object）、付加部（adjunct）の潜在的重量はそれぞれ（3）のように得点化される。

- 1) 以下の（i）は無標の事例で、（ii）はHNPSが適用された有標の事例である。HNPSを受ける要素は有標の焦点として焦点度重量の2点が付与される。

(i) a. John met Mary.

b.  (総重量：潜在的重量3点＋焦点度重量1点＝4点)

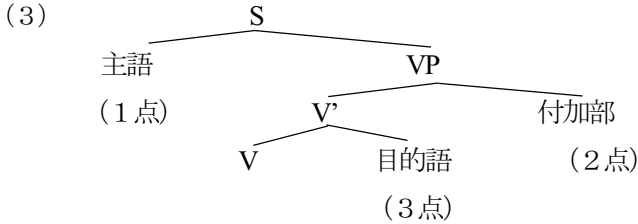
(ii) a. John met t_i yesterday [the student from Japan]_i.

b.  (総重量：潜在的重量3点＋焦点度重量2点＝5点)

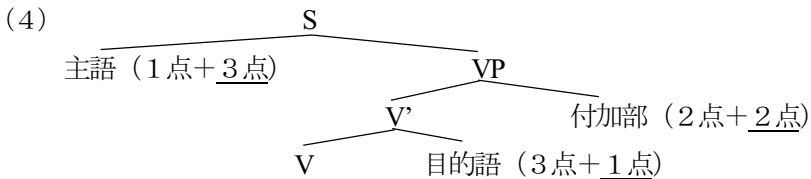
- 2) 文の傾斜は、（i）のように焦点を定義することによって、焦点の置かれる位置から自動的に決定される。

(i) 焦点：文中で最も重要な情報を含む要素であると同時に、最も重たい要素である。

(ii) 文の傾斜：焦点が文のX端に位置すると、その文はX方向に傾斜する（X＝右 or 左）。



要するに、階層構造上の占める位置が主語、付加部、目的語の順に下がっていくことに正比例してそれぞれの潜在的重量が1点、2点、3点と相対的に重たくなるという自然な発想である。一方、焦点化重量とは、実際に焦点として解釈される要素に付与される重量を指す。杉山 (2020) では、無標の焦点を担う動詞の目的語には1点、有標の焦点となる付加部と主語には2点がそれぞれ付与されると仮定し、補部 (complement) と非補部 (non-complement) の二項対立を想定したが、本稿では目的語に1点、付加部に2点、そして主語には3点という具合に異なる焦点度重量が付与されるよう細かく設定する。なぜなら、潜在的重量の軽い要素ほど有標の焦点としての解釈が強まり、付与される焦点度重量が相対的に増すと仮定するのが自然と考えられるからである。この提案を受け入れると、各要素に焦点度重量 (下線を施す) が付与された段階は次のように想定される。



この修正案による重要な帰結は、各要素が焦点として解釈された場合、以下のよう
に各構成素の総重量が等しく4点になることである。

- (5) a. **John** wrote a book last year.
 b. John wrote **a book** last year.
 c. John wrote a book **last year**.

ただし、この中で最も有標度の高い構文は焦点度重量の最も重たい主語が焦点を担う (5a) と判断される。Enkvist (1980) は主語に置かれる焦点を *marked information focus* と呼んでいるが、その指摘とも合致する。なお、(5b) において目的語に有標の対比的焦点 (*contrastive focus*) が付与される場合、焦点度重量として 1 点が加算され、目的語の総重量は 5 点となるので、HNPS と同じ傾斜が得られることになる。それでは次節では、文末重心の原則と対極をなす文頭重心の原則 (*top-weight principle*) を新モデルの視点から提案する。

2. 文 頭 重 心 の 原 則

文頭重心の原則に従う代表的な構文は *wh* 疑問文である。ここで問題になるのは *wh* 句の焦点度重量であるが、*wh* 句は文末に傾斜した平叙文の安定構造を左方向に逆転させるというダイナミックな働きを担うことから、通常の焦点度重量に加えて *wh* 焦点度重量として 1 点が加算されると仮定する。この加算は、*wh* 疑問文が文中の特定要素の情報値を得るために発動される有標構文であることから正当化されることが考えられる。この仮定に従うと、動詞の目的語、主語、付加部を *wh* 句に置き換えて移動が駆動された場合、それぞれ以下のような同じ傾斜構造を形成することが導かれる。

- (1) a. What_i did you eat t_i?

b.



(総重量：潜在的重量 3 点 + 焦点度重量 1 点 + *wh* 焦点度 1 点 = 5 点)

(2) a. Who_i t_i meet John?

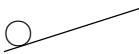
b.



(総重量：潜在的重量 1 点＋焦点度重量 3 点＋wh 焦点度 1 点＝5 点)

(3) a. Where_i did you meet John t_i?

b.



(総重量：潜在的重量 2 点＋焦点度重量 2 点＋wh 焦点度 1 点＝5 点)

wh 句の元の要素が何であれ、総重量はすべて 5 点となり、同じ左下降傾斜が形成される³⁾。そこでこの得点結果を文法性に反映させ、文頭重心の原則を以下のよう
に定義する。

(4) 文頭重心の原則：英語の wh 疑問文は、左下降傾斜、つまり、焦点が文頭に
ある場合が最もバランスのとれた安定状態である。

条件：wh 句焦点の総重量 ＝ 5 点

この原則によって、問い返し疑問文 (echo question) でない限り、(5) のような wh
疑問文は文頭重心の原則に対する違反として直ちに処理される。

(5) a. *Did you eat what?

b. *You ate what?

³⁾ wh 句の総重量が等しいとすると、多重 wh 疑問文の適格性条件である「傾斜平衡の原則」
が概念上、妥当であることが導かれる。

(i) a. Who saw what?

b. *What did who see?

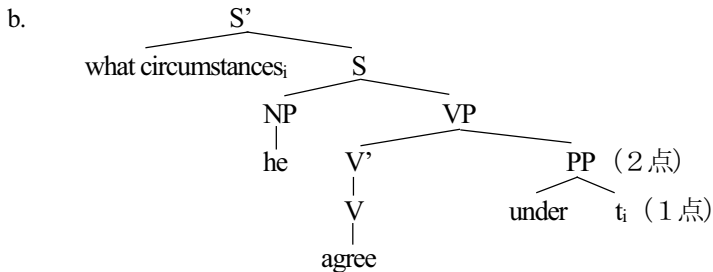
適格な (i a) では、文頭と文末に wh 句が配置され、左右バランスのとれた傾斜構造を形成していることがわかる。詳細は杉山 (1998) を参照。

ここで概念上望ましい帰結として、wh 句の総重量と、注 1 で述べた HNPS の適用を受ける重名詞句の総重量が共に 5 点で一致することが挙げられる。この共通点により、両者がともに有標構造であること、および両方の移動が当該構造を安定させる「最後の手段」であることが説明可能となる。次節では、(4) で設けられた wh 句の重量条件について検証する。

3. 検 証

第一に、付加部条件 (adjunct condition) の違反例が説明可能となる。違反例の内部構造と傾斜構造を見てみよう。

(1) a. *What circumstances_i would he agree under t_i? (Huddleston, 1984:338)



c.

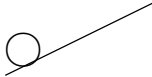


(総重量：潜在的重量 1 点+焦点度重量 1 点+wh 焦点度 1 点= 3 点)

当該 PP は V の付加部なので潜在的重量として 2 点が与えられる。ここで VP 以外の範疇では、最大投射の潜在的重量：補部の潜在的重量の対比は、一般に 1 : 1/2 で構成されると仮定する⁴⁾。それに従うと、PP の潜在的重量は 2 点なので、P の補部となる要素の潜在的重量は 1 点と設定される。焦点度重量に関して言うと、当該 wh 句は付加部内の要素なので付加部の規定焦点度重量が付与されるが、wh 句の潜在的重量が付加部全体の半分なので、付加部の焦点度重量である 2 点の半分が wh 句の焦点度重量として付与されると仮定する。最後に wh 焦点度の 1 点が加算されるため wh 句の総重量は 3 点となる。その結果、到達すべき 5 点に及ばず (1a) のような前置詞残留 (preposition stranding) の構造は破綻する。一方、(2a) のような前置詞の随伴 (pied-piping) の場合は、付加部全体が wh 句に置換されるので当該 wh 句の総重量は 5 点に達する。その結果、文頭重心の原則を遵守するので文法性が保証される。

(2) a. [Under what circumstances]_i would he agree t_i? (Huddleston, 1984:338)

b.

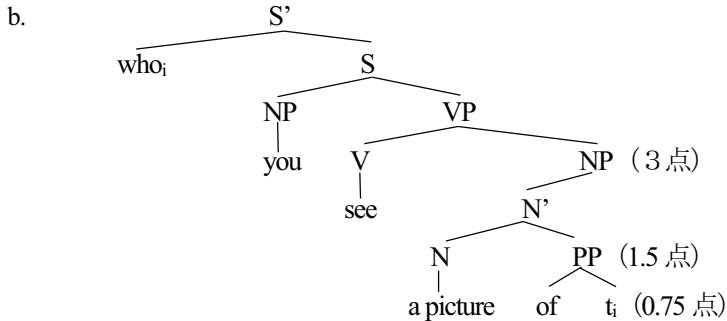


(総重量：潜在的重量 2 点＋焦点度重量 2 点＋wh 焦点度 1 点＝5 点)

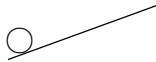
第二に、なぜ英語に主語条件 (subject condition) が課され、目的語条件が課せられないかという事実を説明できる。まず目的語 NP からの取り出しを見てみよう。結論から述べると、以下のような得点配分となることを提案する。

⁴⁾ V と目的語の潜在的重量が一致するという特別扱いとは、他の主要部と異なり、V は目的語に格 (Case) を付与したり、適正統率子 (proper governor) として機能することから正当化される。V 以外の補部の潜在的重量に関する議論は杉山 (2019, 2020) を参照。

(3) a. Who_i did you see [a picture of t_i]? (Oba, 1984:55)



c.



(総重量：潜在的重量 0.75 点＋焦点度重量 3.25 点＋wh 焦点度 1 点
＝ 5 点)

上述したように、VP 以外の範疇では最大投射の潜在的重量：補部の潜在的重量の対比が 1 : 1/2 で構成される。ここでは目的語 NP の潜在的重量が 3 点なので N の補部 PP が 1.5 点となり、P の補部である当該 wh 句の潜在的重量は 0.75 点と半減する。次に決定しなければならないのは wh 句の焦点度重量である。まず目的語 NP からの移動なので、目的語 NP に付与される焦点度重量が付与されるが、wh 句の潜在的重量が目的語 NP の 4 分の 1 なので、焦点度重量も 1 点の 4 分の 1、つまり 0.25 点が wh 句に付与される。ところで、NP は生成文法 (generative grammar) の古典的な下接の条件 (subjacency condition) でも境界範疇 (bounding category) として振舞ったように、基本的には取り出しを阻止する構成素であると考えられる⁵⁾。そこで、NP の内部からの取り出しの場合、付加重量として最大範疇である NP の潜在的重量

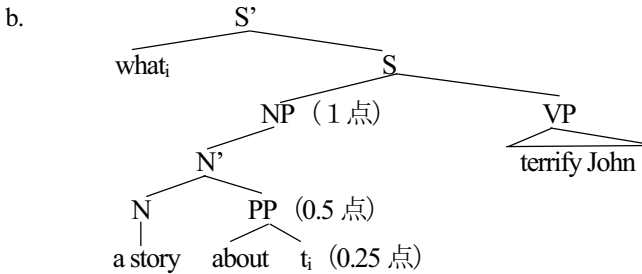
⁵⁾ 下接の条件は以下のように定義される。

(i) 移動操作は NP が S を二つ以上飛び越えてはならない。 (Chomsky, 1973)

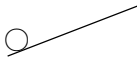
量（3点）が wh 句の焦点度重量に追加されると仮定する。この追加案は NP 内部からの取り出しはそれだけ有標度が増すという事実を反映したものに他ならない。最終的に wh 句には wh 焦点度の 1 点が付与されるので、当該 wh 句の総重量は 5 点（潜在的重量 0.75 点＋焦点度重量 3.25 点＋wh 焦点度 1 点）となり、文頭重心の原則が要求する 5 点に達することが導かれる。

一方、主語 NP からの取り出しは以下のように説明される。

(4) a. *What_i did [a story about t_i] terrify John? (Chomsky, 1973:249)



c.



(総重量：潜在的重量 0.25 点＋焦点度重量 1.75 点＋wh 焦点度 1 点
＝ 3 点)

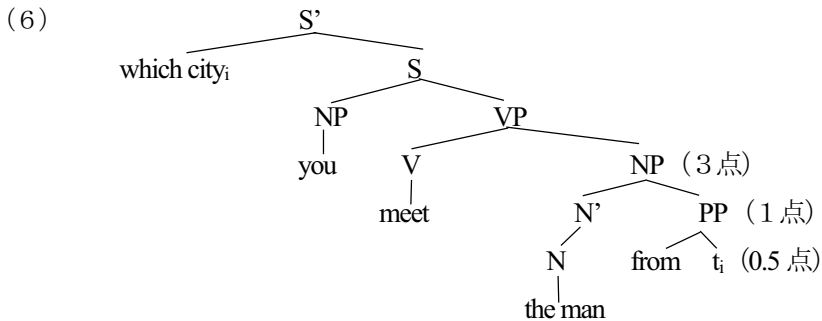
主語 NP の潜在的重量は 1 点と設定されていることから、主要部 N の補部 PP の潜在的重量は 0.5 点、その PP が直接支配する NP の潜在的重量は 0.25 点と半減する。この wh 句は主語 NP からの取り出しであるため、主語に付与される焦点度重量が付与されるが、wh 句の潜在的重量が主語 NP の潜在的重量の 4 分の 1 なので、焦点度重量は主語全体に付与される 3 点の 4 分の 1、つまり 0.75 点が付与される。さらに境界範疇 NP からの取り出しなので、主語 NP の潜在的重量 1 点が wh 句

の焦点度重量に追加される⁶⁾。最後に **wh** 焦点度の 1 点が加算される。その結果、**wh** 句の総重量は 3 点となり、文頭重心の原則が要求する 5 点に及ばず構造は完全に破綻する⁷⁾。

ここでたとえ目的語 **NP** であっても、その内部の付加部からの取り出しと、付加部自体の取り出しが許されないという事実が正しく説明されることを確認しておこう。(5a) の内部構造は (6) のようになる。

(5) a. *Which city_i did you meet [the man from t_i]?

b. *From which city_i did you meet [the man t_i]? (Chomsky, 1986:80)



⁶⁾ 下接の条件では、**NP** は生起する位置、つまり、主語か目的語かを問わず、境界範疇とし固定化されていたが、バランス理論では **NP** が生起する位置によって潜在的重量が相対的に異なり、**NP** 内の要素を **wh** 句として取り出す場合、主語 **NP** のような潜在的重量の軽い要素からの **wh** 移動は相対的に厳しくなると説明される。

⁷⁾ 主語 **NP** から **N** の補部 **PP** 全体を取り出した場合、**wh** 句の総重量は 4 点代と換算されるので、非文法的になると予測される。次例が示すように、その予測は正しいことがわかる。

(i) a. *[Of which car]_i did [the driver t_i] cause a scandal? (Chomsky, 2008:147)

b. ○

(総重量：潜在的重量 0.5 点＋焦点度重量 3 %点＋**wh** 焦点度 1 点 = 4 %点)

既に VP 以外の範疇では、最大投射の潜在的重量：補部の潜在的重量の対比が 1 : 1/2 で構成されることを仮定したが、ここでさらに VP 以外の範疇では、最大投射の潜在的重量：付加部の潜在的重量の対比は 1 : 1/3 で構成されると仮定する。この仮定に従うと、目的語 NP の潜在的重量は 3 点なので N の付加部 PP の潜在的重量は 1 点となり、P の補部である当該 wh 句の潜在的重量はその半分の 0.5 点になる。wh 句の焦点度重量に関しては、まず目的語 NP からの移動なので、目的語 NP に付与される焦点度重量が付与されるが、wh 句の潜在的重量が目的語 NP の 6 分の 1 しかないので、wh 句に付与される焦点度重量は、目的語 NP に付与される焦点度重量 1 点の 6 分の 1 となる。さらに境界範疇 NP からの取り出しであるので、目的語 NP の潜在的重量の 3 点が wh 句の焦点度重量に追加され、最終的に wh 焦点度の 1 点が加算される。その結果、wh 句の総重量は 4 1/2 点となり、文頭重心の原則の求める 5 点に及ばず、(5a) の構造は破綻すると正しく説明される。一方、付加部 PP が移動する (5b) の場合は、wh 句の総重量が 5 1/2 点（潜在的重量 1 点 + 焦点度重量 3 1/2 点 + wh 焦点度 1 点）となり、5 点を超過するためやはり排除される。

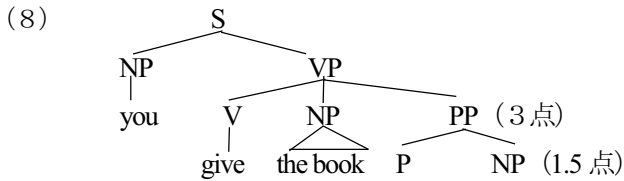
これまでの議論で示したように、PP は生起する位置によって、その潜在的重量が 0.5 点から 2 点まで相対的に変化することを見た。(7) のような与格構文 (dative construction) の場合、PP が V の補部位置を占めるので、PP の潜在的重量は 3 点となり、潜在的重量の幅がさらに広がる。しかしながら、この場合は特別な措置が必要となる。

(7) a. To whom_i did you give the book t_i?

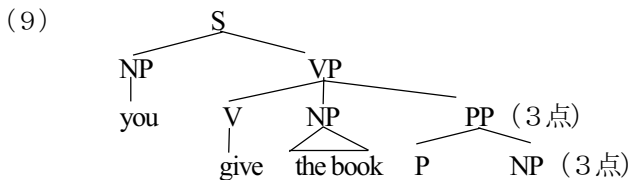
b. Who_i did you give the book to t_i?

(Culicover, 1997:180)

なぜなら、(8) の樹形図が示すように、V の補部 PP の総重量は潜在的重量 3 点 + 焦点度重量 1 点 + wh 焦点度 1 点の合計 5 点と換算されるので、(7a) は文頭重心の原則に従う構造となるが、P の目的語が wh 移動の適用を受ける場合、当該 wh 句の総重量は潜在的重量 1.5 点 + 焦点度重量 0.5 点 + wh 焦点度 1 点の合計 3 点となり、(7b) が誤って非文と判断されてしまうからである。



周知のように、(7b) のような前置詞残留が許されるのは英語に有標な現象であり、その文法性を保障することは従来から難問の一つとされてきた⁸⁾。したがって、バランス理論に対する反例となるのも無理からぬ事態かもしれないが、ここでは V の補部 PP は前置詞が V によって選択制限されることから、当該前置詞には主要部 V の潜在的重量が浸透し、その補部 NP に 3 点が付与されると仮定する。もしその仮定が正しいとすると、(7b) の wh 句 (who) の総重量は (7a) の wh 句 (to whom) の総重量と等しくなるので、(7b) の文法性が保証されることになる⁹⁾。



⁸⁾ 例えば、Hornstein & Weinberg (1981) の再分析 (reanalysis) という英語に個別規則を導入して、前置詞残留の有標性を説明しようと試みた。

⁹⁾ ここで二重目的語構文 (double object construction) における直接目的語からの wh 移動と PP の内部からの wh 移動が問題となる。なぜなら、今までの議論に従うと、文頭重心の原則に遵守した傾斜が得られるからである。

(i) a. ??Who_i did you give [a picture of t_i] to John? (Lasnik and Saito, 1992:91)

b. ?Who_i did you give a book to [a sister of t_i]? (Johnson, 1985:48)

上例の容認可能性が相対的に低い原因がどこに起因するのかは、今後の課題としておく。初期のバランス理論による説明は杉山 (2010) を参照。

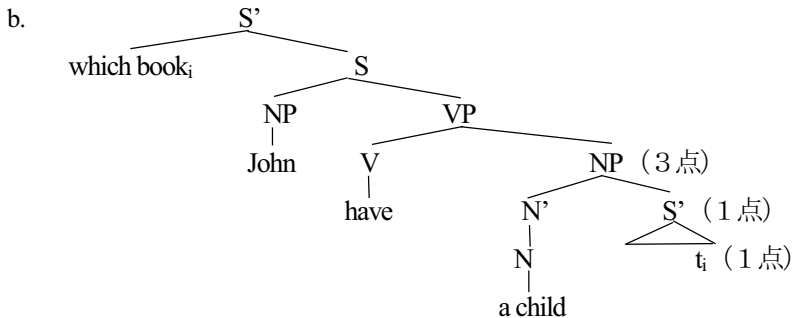
さて、付加部条件と主語条件は、Huang (1982) が提唱した抽出領域条件 (condition on extraction domain = CED) が包括的に扱った重要な制約である¹⁰⁾。また CED 効果は、その後の障壁理論 (barrier theory) へと継承されていく本質的なものである¹¹⁾。バランス理論の枠組みでもこれらの島の制約の効果が説明されるということは、この理論が移動の一般的制約として極めて有効であることの証となると考えられる。

4. 複合名詞句制約

本節では、複合名詞句制約 (complex NP constraint = CNPC) の違反例を再考する。杉山 (2018) で議論したように、CNPC 違反の文法性には段階性 (gradience) があるため、かなり微妙な取り扱いが要求されるのだが、ここでは基本的な事実のみを扱う。まず関係節タイプの違反例から見てみよう。

- (1) a. *Which book_i did John have [_{NP} a child [_{who_i} [_S t_i read t_i]]] ?

(Chomsky, 1986:35)



¹⁰⁾ CED は適正統率 (proper government) という構造条件に基づいて定義される。

(i) A phrase A may be extracted out of a domain B only if B is properly governed.

(Huang, 1982:505)

¹¹⁾ 障壁理論に関しては Chomsky (1986) を参照。

c.



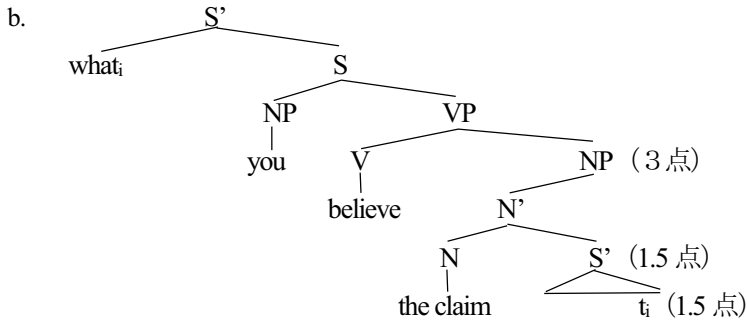
(総重量：潜在的重量 1 点＋焦点度重量 4%点＋wh 焦点度 0.5 点
＝ 5%点)

関係節は主要部 N の付加部の位置を占めている。主節動詞の目的語 NP の潜在的重量が 3 点と設定されているため付加部の関係節の潜在的重量は 1 点となるが、その節内に生起する wh 句は V の目的語であるため、その潜在的重量は V と同じ 1 点を持つことになる。この wh 句は目的語 NP からの取り出しであるため、目的語 NP に付与される焦点度重量が付与されるが、wh 句の潜在的重量が目的語 NP の 3 分の 1 なので、焦点度重量も目的語全体に付与される 1 点の 3 分の 1 が付与される。次に境界範疇 NP からの取り出しなので、目的語 NP の潜在的重量 3 点が wh 句の焦点度重量に追加される。さらに、もう一つの境界節点である S にも支配されているので、この S の潜在的重量も 1 点として加算されと考えられる。そして最後に wh 焦点度が加算されるのだが、ここで新たな仮定を提案する。それは、今までの事例はすべて主文レベルであったので wh 焦点度として 1 点を設定したが、CNPC の場合、wh 句は埋め込み文内の要素であるので、wh 句の焦点度は主文の場合の半分である 0.5 点に設定することである。以上の仮定が正しいとすると、最終的に (1a) の wh 句の総重量は 5%点となり、基準の 5 点を大幅に超過するため構造は破綻する。

次に同格節タイプの CNPC 違反に移ろう。このタイプでは、埋め込み文内の項 (argument) を取り出すことはそれほど悪くないという観察結果がある。

(2) a. ??What_i do you believe [_{NP} the claim [that [_S John bought t_i]]] ?

(Lasnik & Saito, 1992:22)



c.



(総重量：潜在的重量 1.5 点+焦点度重量 3.5 点+wh 焦点度 0.5 点
=5.5 点)

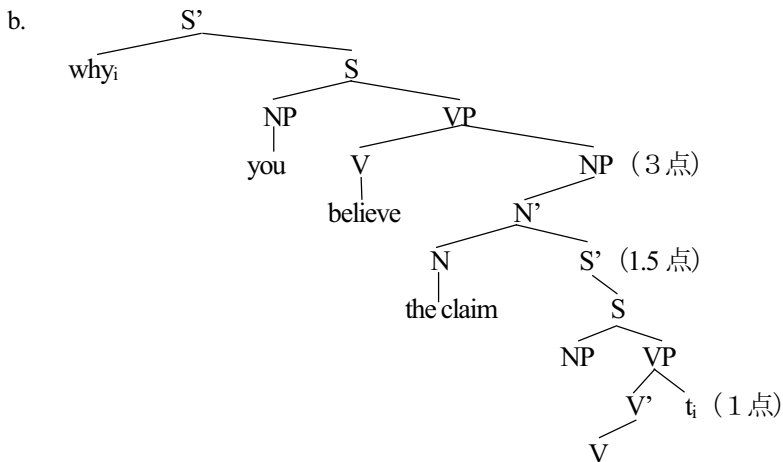
同格節は主要部 N の補部位置を占めるため、この節内の V 補部である wh 句の潜在的重量は浸透の結果、同格節と同じ 1.5 点と設定される。この wh 句は目的語 NP からの取り出しであるため、目的語 NP に付与される焦点度重量が付与されるが、wh 句の潜在的重量が目的語 NP の 2 分の 1 なので、焦点度重量も目的語全体に付与される 1 点の 2 分の 1 が付与されることになる。次に境界範疇 NP からの取り出しなので、目的語 NP の潜在的重量 3 点が wh 句の焦点度重量に付加される。ここで注意すべきことは、wh 句は COMP-to-COMP という連続循環移動 (successive cyclic movement) の適用を受けるため、関係節タイプと異なり、同格節タイプでは一度の移動で NP と S の二つの境界節点を飛び越えるわけではないことである。そのような環境では最終的に飛び越える上位範疇の NP からの取り出しと解釈され、S の重量は計算に入らないと仮定する。そして最後に wh 焦点度が付与されるが、当該 wh 句は埋め込み文内の要素であるため、通常の半分である 0.5 点が加算される。その結果、wh 句の総重量は 5.5 点となり、基準の 5 点を超過するため構造は破綻する。ここでの重要な点は、関係節タイプの CNPC 違反と同格節タイプの CNPC 違反はどちらも非文法的であるが、前者は後者よりも文法性が悪化するという事実である。その点に関して、バランス理論では前者の得点が 5%点であるのに対し、後者の得点

を 5.5 点という具合に区別することができる。ここで、同格節タイプの方が関係節タイプの得点よりも基準の 5 点に近くなることから文法性が若干向上するという見通しが立てば、両者の微妙な文法性の違いが正しく説明される道が開けることになる。

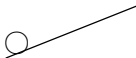
一方、たとえ同格節からでも *why* のような非項 (non-argument) の取り出しは阻止されることが知られている¹²⁾。

(3) a. **Why_i do you believe [NP the claim [that [_S John left t_i]]]* ?

(Lasnik & Saito, 1992:22)



c.



(総重量：潜在的重量 1 点＋焦点度重量 3%点＋*wh* 焦点度 0.5 点
＝4%点)

¹²⁾ Cinque (1990) は項の取り出しが完全には阻止されない領域を「弱い島」 (weak island) , 一方、項と非項の両方の移動を完全に阻止する領域を「強い島」 (strong island) と呼んでいる。CNPC では、同格節タイプが前者に、そして関係節タイプが後者に分類される。

同格節は主要部 N の補部位置を占めるため、この節内の V の付加部である *why* の潜在的重量は比率計算により 1 点と換算される。この *wh* 句は目的語 NP からの取り出しであるため、目的語 NP に付与される焦点度重量が付与されるが、*wh* 句の潜在的重量が目的語 NP の 3 分の 1 なので、焦点度重量も目的語全体に付与される 1 点の 3 分の 1 が付与される。次に境界範疇 NP からの取り出しなので、目的語 NP の潜在的重量 3 点が *wh* 句の焦点度重量に付加される。最後に埋め込み文内の *wh* 焦点度として 0.5 点が加算される。その結果、*wh* 句の総重量は 4%点となり、基準の 5 点に到達しないため構造は破綻する。ここで重要な点は、同格節タイプの CNPC 違反の場合、項の取り出しは 5 点を超過 (5.5 点) するのに対し、非項の取り出しは 5 点未満 (4%点) となるという決定的な違いである。この違いを反映させるために、暫定的ではあるが、超過の場合は合法となる 5 点に近いほど文法性が向上するのに対し、未満の場合は非文として判断されると仮定しておく。なお、未満値の場合でも、データを広く観察していけば 5 点に接近するほど文法性が向上するという可能性も残されている¹³⁾。今後の研究課題としておきたい¹⁴⁾。

¹³⁾ NP 付加部の場合、前置詞残留も前置詞随伴も許されないという判断が下されている。

(i) a. *Which city_i did you meet [the man from t_i]?

b. *From which city_i did you meet [the man t_i]? (Chomsky, 1986:80)

しかし、第 3 節の (5) で述べたように、バランス理論の予測だと、which city の総重量は 4%点であるのに対し、from which city の総重量は 5%点と計算されるので、5 点を超過する (i b) は文法性が若干向上することになる。

¹⁴⁾ 付加部の *wh* 句の中でも前置詞の目的語になれるものとなれないものに分類される。

(i) a. From where did he come?

b. Since when have you been there?

c. *For why did he come?

d. *By how did he come? (Huang, 1982:536)

の差は *wh* 句のあいだに名詞性の強弱が存在することを示唆している。そこで、名詞性を持つ *wh* 句の方が格という特性を持つ分、潜在的に重たくなると仮定すれば、*wh* 句に内在する潜在的重量の差に取り入れる可能性が考えられる。

5. まとめ

バランス理論では、wh 疑問文が従う文頭重心の原則 (1) は、平叙文が従う文末重心の原則 (2) と共に重要な両輪の役割を果たす。

- (1) 文頭重心の原則：英語の wh 疑問文は、左下降傾斜、つまり、焦点が文頭にある場合が最もバランスのとれた安定状態である。


条件：wh 句焦点の総重量 = 5 点

- (2) 文末重心の原則：英語の平叙文は、右下降傾斜、つまり、焦点が文末にある場合が最もバランスのとれた安定状態である。

条件：4 点 \leq 焦点の総重量 \leq 5 点

総重量は移動を受ける構成素の潜在的重量と焦点度重量の和であるが、wh 句の場合はプラス α として wh 焦点度が加算されることを主張した。今回のバランス理論の修正は、文法性の判断に対する得点化、いわゆる「見える化」をさらに推し進める試みと位置付けてもよいだろう。かつて古代ギリシアの数学者・哲学者のピタゴラスは「万物は数である」と提唱したが、相対的な文法性を数字で表せるモデルの時代が訪れるかもしれない。

さて、以下のような焦点の位置変化を見ると、wh 疑問文とその答えとなる文のあいだにはまるでシーソーのような傾斜変化が発生していることがわかる。

- (3) a. What did you eat? \Rightarrow b. I ate apples.
- 

効率の良い談話 (discourse) とは、このような傾斜変化を起こしながら波のように展開されていくパターンであるとイメージされる。つまり、美しい波が作れないとうまく情報が伝達されず、破綻してしまうのである。次回は wh 疑問文の中でも異彩を放つ (4) のような寄生空所構文 (parasitic gap construction) を新モデルの観点から

再考する予定である。

(4) What did you file before you read?

(Chomsky, 1986:64)

参考文献

- Chomsky, N. (1973) “Conditions on transformations,” *A Festschrift for Morris Halle*, ed. by S. Anderson and P. Kiparsky, 232-286. New York : Holt, Rinehart and Winston.
- Chomsky, N. (1986) *Barriers*. Cambridge, MA : MIT Press.
- Chomsky, N. (2008) “On Phases,” *Foundational Issues in Linguistic Theory*. ed. by R. Fredin, C. P. Otero and M. L. Zubizarreta, 133-166. Cambridge, MA : MIT Press.
- Cinque, G. (1990) *Types of A'-Dependencies*. Cambridge, MA : MIT Press.
- Culicover, P. (1997) *Principles and Parameters*. Oxford : Oxford University Press.
- Enkvist, N. E. (1980) “Marked focus: functions and constraints,” *Studies in English Linguistics for R. Quirk*, ed. by S. Greenbaum, G. Leech and J. Svartvik, 134-52. London : Longman.
- Hornstein, N and A. Weinberg (1981) “Case theory and preposition stranding,” *Linguistic Inquiry* 12, 55-91.
- Huang, C.T-J. (1982) *Logical Relations in Chinese and the Theory of Grammar*.
Doctoral dissertation, MIT
- Huddleston, R. (1984) *Introduction to the Grammar of English*. Cambridge : Cambridge University Press.
- Johnson, K. (1985) *A Case for Movement*. Doctoral dissertation, MIT.
- Lasnik, H. and M. Saito (1992) *Move α* . Cambridge, MA : MIT Press.
- Oba, Y. (1984) “On preposition stranding in noun phrases,” *English Linguistics* 1. 45-66.
- 杉山正二 (1998) 「多重 Wh 疑問文の適格性について」『英語英米文学論集』7, 67-75.
- 杉山正二 (1999) 「英語の焦点移動現象—バランス理論からの考察—」学位論文, 安田女子大学
- 杉山正二 (2010) 「二重目的語構文と与格構文」『英語英米文学論集』19, 93-118.
- 杉山正二 (2018) 「複合名詞句制約違反と連続的段階性」『英語英米文学論集』27, 89-109.
- 杉山正二 (2019) 「文末重心の原則と右方移動 (Part 1) —重名詞句移動—」『英語英米文学論集』28, 21-41.
- 杉山正二 (2020) 「文末重心の原則と右方移動 (Part 2) —名詞句からの外置化—」『英語英米文学論集』29, 55-75.

複線径路等至性モデリングを用いた留学についての語りの分析¹⁾

山 川 健 一

Abstract

The present study focuses on narratives of a Japanese learner of English who participated in a five-month study abroad program in the US and, further, explores her learning process. While studying abroad, she was required to regularly write a personal, digital report. After returning to Japan, she was given a semi-structured interview and asked to reflect on her experiences based on her own report. The verbatim record was analyzed with the Trajectory Equifinality Modeling (TEM) (Sato, 2009; Yasuda, Nameda, Fukuda, & Sato, 2015a; Yasuda & Sato, 2012). TEM is based on a methodological, theoretical and epistemological construct, which was invented by some cultural psychologists in 2004 and has been developed gradually since then. TEM makes it possible to describe and understand the process, not the structure, of persons' life courses within irreversible time. The results showed that her learning process was characterized by an intricate interplay of her past life experiences, her character, her perception about her own English proficiency, contingent events that occurred in her everyday life, and the way she interpreted those events in terms of intercultural communication.

1. はじめに

近年のグローバル化に伴い、教育においても「グローバル化」に適応できる人材の育成が急速に唱えられている。「グローバル人材」については、①語学力・コミュニケーション能力、②主体性・積極性、チャレンジ精神、協調性・柔軟性、責任感・使命感、③異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティーの3つの要素

¹⁾ 本論は、2018年3月に SEAMEO Regional Language Centre (シンガポール) で開催された 53rd RELC INTERNATIONAL CONFERENCE (RELC 2018)での口頭発表 (Case Study Research in Study Abroad Narratives Using the Trajectory Equifinality Approach) を加筆・修正したものである。

から成ると定義されており（グローバル人材育成推進会議,2012）、高等教育機関においても、グローバル人材育成を念頭に置いた教育内容の構築は主要な課題の一つとなっている（本名・竹下・三宅・間瀬,2012；西山・平畑,2014；徳永・靱井,2011；横田・小林,2013 など）。

グローバル人材の3つの要素の育成に「留学」が貢献することは容易に推測できる。大学においても、「留学プログラムの拡充」「ダブルディグリー」「英語による専門教育」「全員留学」「多様な留学生の受け入れ」などの取り組みは、カリキュラムの一部を構成する要素になっている。子島・藤原 (2017) は「海外体験学習」の種類として、①長期留学、②語学研修、③インターンシップ・社会起業体験、④海外研修（フィールドスタディ）、⑤サービslラーニングを挙げ、留学形態の多様性を記述・分類している。また、独立行政法人日本学生支援機構の行っている「協定等に基づく日本人学生留学状況調査」では、日本人学生の海外留学状況は2018(平成30)年度で115,146人(対前年度比9,845人増)であると報告されており（日本学生支援機構,2020）、留学者の総数から見ても留学は重要な教育的施策の一つであるといえることができる。日本国内におけるこのような留学への興味・関心の高まりにつれて、留学や国際交流は研究分野としてみなされるようになり、今日まで多くの研究が行われている（例えば、池田,2019；太田,2018；末松・秋庭・米澤,2019；横田・小林,2013；横田・太田・新見,2018 など）。

留学の重要性が国内のみならず世界的に認識されている現象であるということは、この分野の近年の海外の出版物を見てもわかる。留学に関する研究（research in study abroad）は1990年代から本格的に始まり（Sanz & Morales-Front, 2018）, *Frontiers: The Interdisciplinary Journal of Study Abroad*（1995年創刊）や *Study Abroad Research in Second Language Acquisition and International Education*（2016年創刊）などの専門学術雑誌も登場している。加えて、留学をテーマに特化した書籍も、Berg, Paige and Lou (2012), Brewer and Cunningham (2010), Deardorff (2009, 2015), Jackson (2008), Jackson and Oguro (2017), Kinginger (2009, 2013), Lewin (2009), Sanz and Morales-Front (2018), Savicki and Brewer (2015), Taguchi (2015) など、多くの研究が近年出版されている。

上記の国内外で出版されている留学に関する研究内容の分野は多岐にわたる。言

語能力（発音、語彙、文法など）、言語学習動機づけ、語用論的能力、言語学習ストラテジー、自発的にコミュニケーションを図る傾向（willingness to communicate）、パーソナリティ、異文化間能力（intercultural competence）、アイデンティティなどが挙げられる（例えば、Sanz & Morales-Front, 2018 を参照）。これらの研究分野の多くは、学習者の留学前後で測定された研究項目の測定値の変動を対象とする量的研究が多い。例えば、最もポピュラーであるものは、外国語能力（多くの場合、英語力）の向上の検証であろう。これは研究レベルのみならず、教育機関で留学プログラムの評価を行う際に教育の一環として通常行われているものである。この場合、留学前後の学習者の英語能力テスト（例えば TOEIC® など）の得点の変動で留学の効果を見ようとする場合が多い。

それとは別に、留学プログラムを有する教育機関では、留学終了後のアンケート調査等の自由記述等で学習者の留学の経験を評価する場合も多い。実際、留学経験者の多くが留学後の英語能力テストで顕著な伸長を見せることが多いが、英語力が低くても留学先で充実した生活を送っている場合もあるし、その逆の場合もある。しかし、英語力の変化がどうであれ、学習者は留学後に自分の内面の何らかの変化や成長を感じ取っている場合が多い。Benson, Barkhuizen, Bodycott and Brown (2013) が述べているように、留学は「全人的で潜在的に人生を変えるような経験」(p. 173) である。そのような内面的な変容のプロセスは、留学前後の英語能力テストの得点の変化や、留学後に行われるアンケートだけでは十分にとらえられていないのが現状ではないだろうか。上述したように、近年では留学は特に高等教育機関の教育プログラムに組み込まれており、大学や学習者の間で多くの費用や労力に関わるものとなっている。それだけに「留学の効果」について、語学的側面の変容のみならず内面的な変容についてもより深い理解がさらに必要である。よって本論では、留学中の学習者の変容のプロセスを調べるために「複線径路等至性モデリング (TEM)」を用いた質的調査を行い、学習者の留学中の経験と変容のプロセスを明らかにする。

2. 複線径路等至性モデリング (TEM)

次のセクションで調査内容について論じる前に、本研究で用いた調査方法について

て、主にサトウ (2009, 2019), サトウ他 (2006), 安田 (2015a, 2015b), 安田他 (2015a, 2015b), 安田・サトウ (2012, 2017) を参考にして以下概観することとする。

複線径路等至性モデリング (Trajectory and Equifinality Modeling, 以下 TEM と表記) は、人間を開放系と捉え、人間の発達を時間と場所の関係で理解しようとする文化心理学の中の方法論である²⁾。開放系とは、その外部と様々な相互作用をする系 (システム) であり、人間を環境から孤立した閉鎖システムとしてではなく、常に環境と交流・相互作用していると考ええるものである。そして相互作用の最終状態が初期状態から一義的に定まらず、複数の多様な径路を経由しても同じ結果が実現すると考えられている。そしてこの「同じ結果が実現すること」は「等至性 (equifinality)」, 「最終状態の一点」は「等至点 (Equifinality Point: EFP)」とそれぞれ呼ばれる³⁾。等至点は、歴史的、文化的、社会的な意味を持ち、持続する時間⁴⁾の中で実現されてゆく人のライフの顕在形における、ある一つの出来事や経験として焦点化される。

ここで本論のテーマである「留学」のあるケースを一例として、等至点について TEM の諸概念とともに図 1 で紹介する。この図では左から右へ時間が非可逆的時間として矢印で表されており、その中にアルファベットで「経験」や「出来事」が表現されている。時間の矢印は方向性を表しているのではなく、視覚上の工夫として「持

²⁾ この理論は当初 TEM のみで始まったが (例えば, サトウ, 2009; 安田・サトウ, 2012), その後理論的に精緻化が進み、現在は複線径路等至性アプローチ (Trajectory and Equifinality Approach: TEA) となった。TEM はそのアプローチの中で研究の方法論として主要な位置を占めている。詳しくは, サトウ (2019), サトウ他 (2019), 安田他 (2015a, 2015b) を参照のこと。また, TEM (TEA) の質的研究における位置づけについては, サトウ他 (2019) を参照のこと。

³⁾ 等至性の概念は、生物学者のドリーシュに由来し、その後フォン・ベルタランフィによってシステム論に「開放系」として取り入れたものを、発達心理学・文化心理学者のヴァルシナーが取り入れたとされる (サトウ, 2019, p. 84)。

⁴⁾ TEM では、人のライフのプロセスを描く際に、「非可逆的時間 (Irreversible Time)」という考え方を置く。この概念は哲学者のベルクソンに由来する。ベルクソンは時間を空間のような存在として捉えてはならないとし、時間軸上を人間が歩いていくようなモデルではなく、人間が時間と共にあるようなモデルを作る必要があると主張した。そして時間を、物理的時間である「クロックタイム」と「持続時間 (生体のライフと本質的に関連する時間)」の 2 種類に峻別し、後者の時間の考え方を取り入れた (サトウ, 2019, pp. 9-12)。

続」を表している。そして、時計で計測可能な単位化された時間から長さを捨象して、ただ質的に持続し、生きられた時間を表象している（安田他, 2015a, pp. 12-13）。

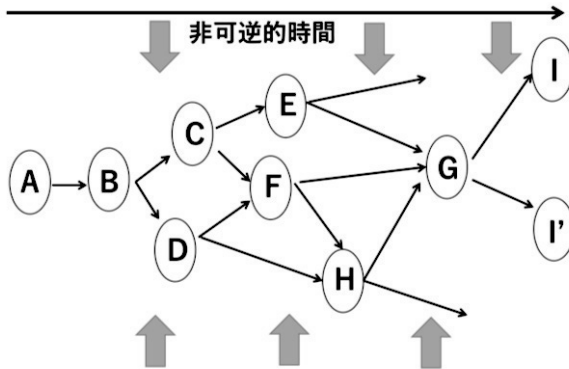


図 1. TEM の基本図

ここで留学を例にとった場合、「学習者は留学に満足感を感じる際、どのようなプロセスを経るのか」を仮に研究テーマとしてみる。この場合、最終の状態である等至点は「留学に対して満足感を得る」となり、図 1 においては I が等至点にあたる。そして、上記 A を仮に「留学の開始」としておこう。留学において満足感を得るプロセスはさまざまであり、その径路が複数あることは経験的にも理論的にも容易に想像できる。図 1 では、留学開始 (A) から等至点 (I) に至るまでのプロセスが様々であることが示されている⁵⁾。図 1 では「両極化した等至点 (Polarized EFP: P-EFP)」が I' として設定されている。両極化された等至点は、最初に設定された等至点の論理的補集合として設定され、この場合「留学に対して満足感を得られない」となる。両極化した等至点を設定する理由は、そこに至る経験にも目配せしながら分析を行いやすくなり、見えにくくなっている径路が捉えやすくなるという効用がある（安

⁵⁾ もちろん実際の経験・出来事は当然もっとたくさんあることが想定できるし、それらの中の径路は、留学する人の数だけあってもよいといえるくらい無数にあると考えられる。

田他, 2015a, p. 34)。

TEM のその他の重要な概念として「分岐点 (Bifurcation Point: BFP)」が挙げられる。これはいくつかの径路の分かれ道であったり、または突然現れる新しい選択肢を意味する。図 1 ではたまたまほとんどの出来事が分岐しているのので B から H が分岐点と言える。分岐点は、すでにそこにある明示的な分かれ道のようなイメージであるとは限らない。人は過去を時に振り返り、「あそこが転換点だった」と気づくことがある。分岐点は、人が歩みを進める中で、何らかの局面においてある転換点が立ち上がりうるという未来志向的な有様を意識させるものである (安田他, 2015a, p. 35)。

また別の重要な概念として、「必須通過点 (Obligatory Passage Point: OPP)」があり、(ほとんどの人が) 必須のこととして経験される出来事や行動選択を意味する。図 1 の留学の場合、例えば、ハロウィン、感謝祭、クリスマスなどの季節の行事が例として相当する。現地で生活するにあたり、留学生者はこれらを文化的行事として様々な関わり方で経験する。これらの行事においてどのようにホストファミリーと関わり合うかによって、最終的な留学の満足度に影響を与える可能性が考えられる。その他、「留学開始 (A)」であるとか「留学終了 (G)」なども当然「必須通過点」とみなすことが可能である。

その他、文化的・社会的な諸力として「社会的助勢 (Social Guidance: SG)」と「社会的方向づけ (Social Direction: SD)」がある。社会的助勢は等至点に向かう歩みを後押しする力であり、図 1 では下から上に向かう矢印で表されている。一方、社会的方向づけは等至点へ向かうのを阻止する力であり、図 1 では上から下に向かう矢印で表されている⁶⁾。留学を例にとった場合、「ホストファミリーが経験豊富」であることは、留学の満足度を上げる社会的助勢であると考えられる。その一

⁶⁾ TEM 図を横書きにして描く場合、通常一番右側に来る等至点は、図の上部に位置することが多い。よって、等至点に向かわせる社会的助勢は下から上に、等至点へ向かうのを阻止する社会的方向づけは上から下に通常描かれる。ただし、本論文の図 2 では、TEM 図は上から下に描かれ、左側に等至点が来る。よって、社会的助勢は右から左向きの矢印となって表現される。

方で、「留学先に日本人学生が多い環境」というのは、留学の満足度を下げる社会的方向づけになる可能性がある。また安田他 (2015a) が述べているように、同様の力であっても、時間経過の中で社会的助勢になることもあれば社会的方向づけになることもある。例えば、本人の「留学生である認識」は、自尊心となって様々なことに前向きに取り組む力になるのであれば社会的助勢になるであろうし、反対に気負ってしまい空回りになって周囲との関係がぎくしゃくするのであれば、社会的方向づけにもなる。

TEM を用いた研究は、サトウ (2009) で最初に体系的にまとめられて以来着実に増えてきており⁷⁾、その分野は看護、福祉、保健、教育⁸⁾など多岐にわたる。TEM を利用した「留学」に関する論文については、日本に滞在する外国人の日本語学習者や労働者や居住者の異文化適応プロセスを記述するものが多い。しかしながら、留学中の日本人英語学習者の変容について TEM を用いた研究は非常に少ない。よって次節では、ある大学生の日本人英語学習者の留学についての語りをデータとして TEM を用いて分析するケース・スタディーについて報告する。

3. 調 査

3.1 調査目的

本調査では、ある大学生の留学時の経験の語りのデータから留学時の変容について TEM を用いてケース・スタディーとして明らかにすることを目的とした。

3.2 調査方法

⁷⁾ 例えば、Google Scholar で 2006 年から 2020 年までの範囲で、論文タイトルに「等至性」が含まれている和論文を検索すると 93 件のヒットがあった (2020 年 12 月 23 日時点)。

⁸⁾ 例えば (英語) 教育に関しては、日本人帰国者の適応と e ラーニングについて研究した Aoyama and Yamamoto (2020) や、英語教師の形成的フィードバックについて研究した Tsuchiya (2018) や、中国人教師の意思決定プロセスとビリーフについて研究した Zhang, Kubota, Kubota, and Li (2020) などが挙げられる。これらは、TEM の提唱者のサトウらによる英語で執筆された著作 (Sato, 2017; Sato, Mori, & Valsiner, 2016) 以外で、英語で書かれた数少ない TEM を用いた研究論文となっている。

調査対象者 (Z) は、筆者が勤務する大学の英語英米文学科の半年留学プログラム (STAYS) に参加した学生である。Z が参加した時点では、STAYS は 30 年近い歴史を持ち、学科所属学生は 2 年次後期に全員が半年間 (実質約 5 か月間)、アメリカの 2 大学 (A 大学と B 大学) に分かれて現地家庭にホームステイをしながら留学をするようになっていた⁹⁾。A 大学と B 大学では環境が異なり、A 大学では日常生活の大部分 (通学や移動) をホストファミリーに依存して過ごす生活パターンとなっている一方、B 大学では比較的自由度が高く、通学はバスや自転車を用いて行い、自由な旅行も一部認められていた。Z が参加した年度は、A 大学に 81 名、B 大学に 34 名の合計 115 名が留学した。

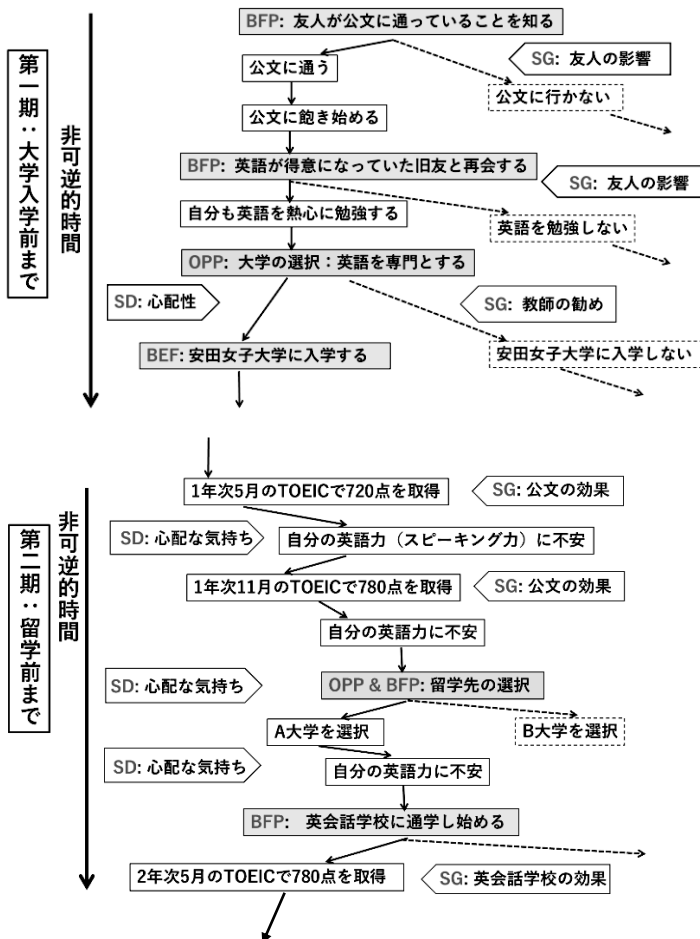
筆者は留学直前にこの 115 名に対して、筆者の研究目的の一環であると明示したうえで、留学中の出来事やそれに対する自分の感想を日記形式で大学のポータルサイトにある e ポートフォリオに毎週記入 (自由参加) するようにメールで依頼していた。5 か月間の留学中に 1 回でもポートフォリオを執筆した学生は、115 名中 56 名 (全体の 49%) であり、内訳は A 大学で 81 名中 37 名、B 大学で 34 名中 19 名であった。56 名中 10 回以上の投稿をした学生は 12 名おり、この 12 名は帰国後のインタビューの対象者となった。インタビューにあたっては、事前に文書で内容を説明したうえで参加の意志を事前に確認した。本論で焦点を当てる Z は、この 12 名のうちの一人であり、A 大学の方に留学した。

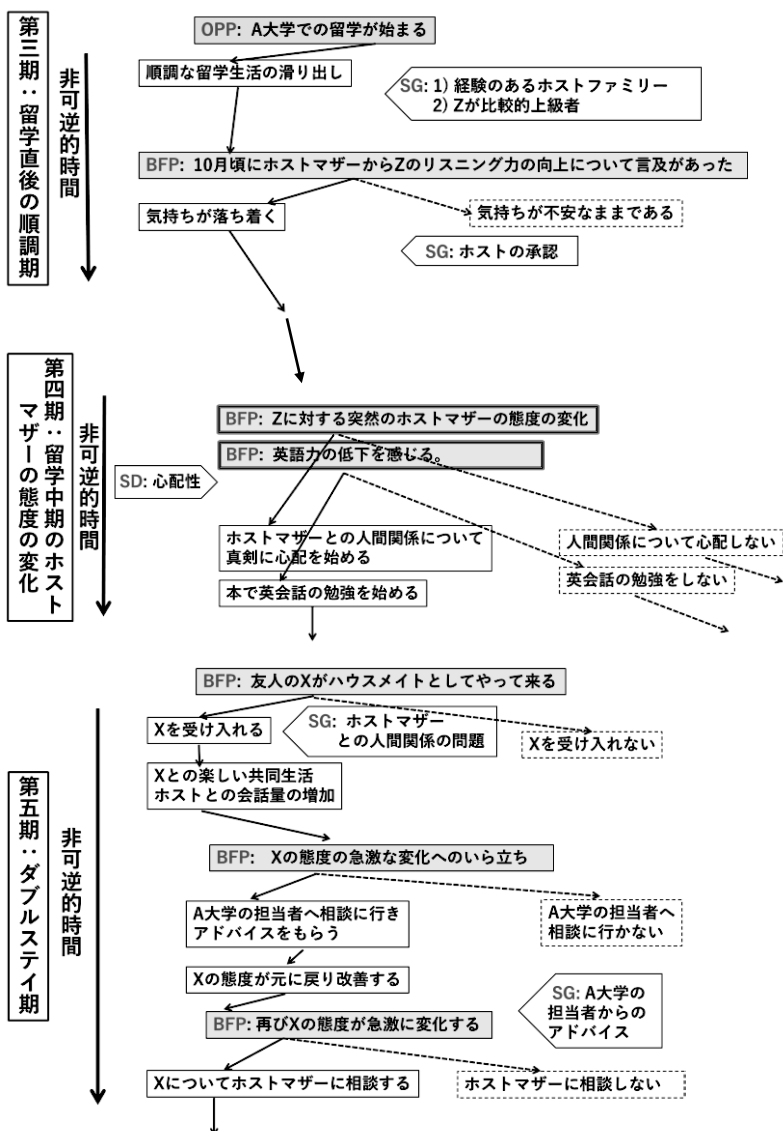
留学後のインタビューは帰国後約 1 年経った時期に行われ、インタビュー時には文書で調査参加者の許可を得た後、半構造化インタビューが行われた。インタビューでは、留学中のことのみならず、英語との最初の出会いやこれまでの中高や大学受験における英語学習の取り組みの歴史、ならびに家族構成や自分の性格分析にまで話が及ぶようにした。インタビューはすべて調査参加者の許可のもと録音された。録音されたデータはすべて書き起こされ、意味のまとまりごとに切片化され TEM 上で表現された。Z とのインタビューは 1 回のみ行われ約 90 分間であった。

⁹⁾ 2020 年度現在では、アメリカの 2 大学 (A 大学は含まれていない) とカナダの 1 大学の計 3 大学に分かれて留学するようになっている。

3.3 調査結果

Zの留学中の変容は以下の図2にTEM図として示された。帰国後のインタビューの対象となった12名は、帰国後のウェブアンケートにおいて留学全般（授業とホームステイ）について肯定的な評価を下していた。したがって、等至点は「留学に対して肯定的な評価をください」に設定した。ZのTEM図は、留学前から留学後にかけて7つの時期に分けることができた。





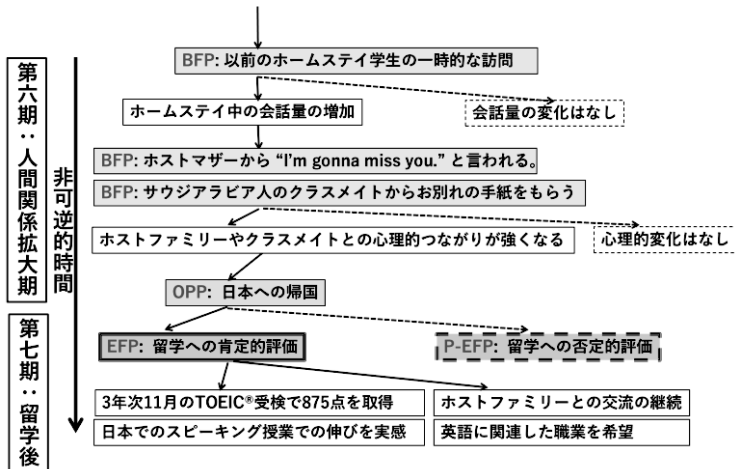


図2. Zの留学前・中・後のTEM図

第一期は「大学入学前まで」である。Zは小学校4年生の時に友人が公文に通っていることを知り、うらやましくなって自分も通い始めた¹⁰⁾。そこで初めて英語と出会う。文法や読解の教材を中心に自学の英語学習を始め、小4から大学1年次まで続けた。中学校の頃から公文の勉強に飽きてきたが、高校2年生の時に久しぶりに会った友人が、それまではZの方が英語ができていたのに英語が良くできるようになっていたのが驚いた。そこからまた英語学習に奮起をするようになった。そして大学入試の受験の際、英語を専門にしようと決め、安田女子大学ともう一つの大学の二択にまで絞った。しかし、心配性の性格から全員留学のある安田女子大学の方に躊躇していたところ、高校の先生の勧めで最終的に安田女子大学を選択した。

第二期は「留学前まで」である。Zは大学入学後に初めて受検したTOEIC®で720点を取得した。本人は公文での英語学習が実を結んだと考えている。しかしそれで

¹⁰⁾ 図1の「第一期」では、「BFP: 友人が公文に通っていることを知る」から実線と点線に枝分かれしている。実線は実際に出来事の中で生じた事態を表し、点線は「分岐点(BEP)」において(理論的に反対の)別の選択にはどのようなものが考えられるかを表している。これは、理論的に実際の選択と逆の想定することにより、等至点(ばかりに目に向くのを避け、また別の径路を想定してみることを容易にする役割がある(安田他, 2015a)。

も、生来の心配性の性格から、自分の英語力（特にスピーキング力）に自信を持てずにいた。それでも1年次の11月に受検したTOEIC®では、前回は上回る780点を取得することができた。それでも自分の英語力への不安は続いていた。1年次後期には、2年次後期留学のための留学先の選択を行わなくてはならない。いろいろ迷った結果、Zは自立心をより要求されるB大学の方ではなく、ホストとの結びつきの強い生活形式のA大学の方を選択した。その後も自分の英語力に不安を抱えるZは、スピーキング能力を伸ばすため大学外の英会話学校に通学し始めた。その後、2年次5月に受検したTOEIC®では780点を再度取得することができた。留学前にTOEIC®で800点前後を取得する学生は本学では非常に優秀であると考えられている。

第三期は、「留学直後の順調期」である。9月上旬からA大学での留学を始めたZは、自身の相対的に高い英語力や、ホストファミリーが比較的経験豊富ということもあり、順調な留学生活を始めることができた。10月くらいには、ホストマザーからZのリスニング力が伸びたというコメントをもらい非常にうれしく感じ気持ちが落ち着いてきたそうである。

しかしながら第四期の「留学中期のホストマザーの態度の変化」になると、状況は一変する。10月の終わりくらいから、ホストマザーの反応が徐々に少なくなって冷たくなっていくのを感じ、ホストとの人間関係を真剣に心配し始めた。また、この人間関係の変化は自分の英語力の低さに起因するのではないかと考え、英会話を向上するために書籍を通して勉強を始めた¹¹⁾。

第五期の「ダブルステイ期」では、別のホスト宅から急に移動となった別の学生Xを、Zのホストが受け入れることとなった。一応ZはXを受け入れてよいかどうかホストからお伺いをたてられたが、その時期ちょうどZとホストとの関係がぎく

¹¹⁾ しかしながらインタビューでのZの述懐では、このころから少し余裕が出始めていろいろと余計なことを考え始めたのかもしれないとのことであった。また、当初良好であったホストとの人間関係も、ただ単にホストマザーが気を利かせてたくさんZに話しかけてくれていただけなのかもしれない、それが単に元に戻っただけで人間関係がおかしくなったわけではないかもしれないとのことであった。

しゃくしていたことから気分転換になるかと思い、Xの受け入れを承諾した。新しい人間が家族に加わったため家族内での会話も増えて、Zにとっては思わず楽しい時間を過ごすこととなった。しかし、しばらくすると急にXの態度が変わり、Xは自室で一人で過ごそうとする時間が多くなっていった。Zやホストとも口を利かず態度が悪い時が増えていった。その後、ZはA大学内のホームステイ担当者に相談に行きアドバイスをもらったりしてXに対応していた。それからいったんXの態度は元に戻ったのであるが、1月頃に再度悪くなっていった。その過程で、ZはXの件でホストに対して気の毒に思うようになり、ホストマザーとも何度もXの件について相談をするようになった。そうするうちにホストマザーとの会話量も増え関係性も良くなっていったと感じるようになった。

第六期は「人間関係拡大期」である。以前そのホスト宅に滞在していた日本人学生が短期でZの帰国前に日本から訪問してきて一緒に一時期を過ごした。その間もホストとの会話量は全体として増えて楽しい時を過ごした。また、Zの帰国が近くなると、ある時ホストマザーから“I'm gonna miss you.”(あなたがいなくなると寂しくなるわ)と言われたことが非常にうれしい経験であったとZは述べている。また、普段それほど仲が良くなかったと思っていたサウジアラビアのクラスメイトからお別れの手紙をもらったことも非常にうれしい体験であった。その後、A大学の学生たちは日本に帰国した。

第七期となる「留学後」のオリエンテーションで行われたウェブ上での留学アンケートでは、Zは上述したように授業とホームステイにおいて肯定的評価を出した。そして帰国して9か月後の3年次11月のTOEIC®では、875点という高得点を取得することができた。帰国後も、ホストファミリーとの交流はSNSを利用して続いており、日本での英語の授業では英語のスピーキングの伸びを実感できるようになったという。将来は英語を活用する仕事に就くことを希望している。

以上見てきたように、Zの留学経験についてTEM上で表現することができ、七つの時期に分けられることが判明した。次のセクションではTEM図からわかったことを議論してみる。

3.4 考察

まず最初に言えることは、留学中の体験はその学習者がもともと有している性格に大いに影響されるということである。本調査の対象者のZは、インタビュー内で自分のことを「心配性でネガティブ」であり、また同時に「謙虚で平均以上の努力をする」人物であると自己分析をしている。比較的高い英語力を留学前からすでに有していたにもかかわらず、留学に対して自分の英語力不足を心配して様々な行為を行っていた。例えば、留学前に英会話学校に通学したり、ホストとの人間関係が不安定になった原因を自分の英語力不足であると考えたり、それを解消するために読書による英会話の学習を試みたりした点である。そのような心配症の性格は、更なる英語力の高みへの自らを導き、留学中のみならず留学前後においても不断の英語学習を行い、結果を出してきた。また、Zの「謙虚さ」は他者の意見を受け入れやすくしたり、時に多大な影響を受けることにもつながる。例えば、留学前において友人に影響されて公文での学習を開始したり、英語が得意になった旧友との再会で英語学習熱が再燃したり、ホストマザーから英語力の向上を褒められて鼓舞されたり、途中から合流したハウスメイトXとの初期のころの生活や、留学終了ごろに訪問してきたホスト宅に滞在経験のある日本人学生との交流などにおいてである。このような性格の場合、自ら積極的に作り出した機会というよりも、偶発的に発生した人との出会いの機会が留学中の行動に積極的な影響を与えることを示唆している。また逆に、思い過ごしかもしれないホストマザーとのすれ違いにおいて見られたように、望ましくない現象の原因を自分の能力不足に還元して、必要以上に日常生活に影響が出てしまうという逆の面も有している。また、そのような性格だからこそ、Xの態度の悪さの問題について大学関係者やホストマザーと自ら話し合いをして問題解決に向かったことで、自己効力感（self-efficacy）が育成され自信につながり、次のステップに踏み出す力を与えてくれることもある。

以上見てきたように、個人の性格に起因したこれらの要因は、留学期間の広範囲にわたって、社会的助勢（SG）として働いたり、社会的方向づけ（SD）として働き、留学中のライフの中の出来事を選択や発生に影響を及ぼすことがわかる。

4. 結 論

本論では、ある大学生の留学時の経験の語りのデータから留学時の変容について TEM を用いたケース・スタディーとして分析を行った。TEM により留学中の体験を七つの時期に分けることができ、それぞれの時期の特徴について記述を行った。また、留学中の体験は、個人の性格に影響される面が強いことも判明した。

今後の課題としては次のことが挙げられる。まず、今回は対象者が 1 名のケース・スタディーであったので、今後はインタビュー対象者となった他の 11 名も含めて TEM で分析することが挙げられる。インタビューの対象者数について、安田・サトウ (2012) では経験則として、1 名では個人の径路の深みを探ることができ、 4 ± 1 名では経験の多様性を描くことができるとし、 9 ± 2 名では径路の類型を把握することができると述べている (p. 7)。今後は複数の対象者の経験を同時に TEM 図に表現する手法 (荒川・安田・サトウ, 2012 など) を用いて留学時における心理的変容についてより一般的な記述をすることが可能になるであろう。

今回のケース・スタディーにおいては、Z に対して 90 分のインタビューを 1 回しか行うことができなかった。TEM を用いた研究の終了点 (飽和点) に到達するためには複数回のインタビュー (トランスビュー) を行うことが推奨されている¹²⁾ (安田他, 2015a)。

また、本論文では TEA のうち TEM の枠組みのみから分析を行ったので、今後は対象者を増やすことによって、TEA の 3 つの主要構成部分の他の 2 つである、「歴史的構造化ご招待 (Historically Structured Inviting: HSI)」と「発生の三層モデル (Three Layers Model of Genesis: TLMG)」も射程に入れた分析手法を用いて、留学における学習者の変容をさらに深く記述できることが期待される。

研究の最終的な目標としては、TEA 等を用いた質的研究と従来の量的研究を組み

¹²⁾ これは「トランスビュー的飽和」と呼ばれ、3 回程度のインタビューが推奨されている (安田他, 2015a, p. 25)。初回の聞き取りは Intra-View と呼ばれ、自由記述を会話で行う程度で、調査者の主観が強く出た聞き取りになる。二回目の聞き取りは Inter-View と呼ばれ、初回の聞き取りを基に対象者の主観を反映させる聞き取りになる。三回目の聞き取りは Trans-View と呼ばれ、相互の主観が融合したかたちの聞き取りになるとされている。

合わせた混合研究によって留学における変容を総合的に記述していくことが挙げられる¹³⁾。また、これらの研究から明らかになった知見を高等教育機関等の留学プログラムの立案・運営や学生の指導に応用したり¹⁴⁾、日本の教育機関と提携している留学先のカリキュラムや授業との関連付けを行う研究を進める必要がある¹⁵⁾。

謝 辞

本研究は、JSPS 科研費 15K12925 (「留学が学習者の英語力と内面的変容に及ぼす効果の統合的メカニズムに関する縦断的研究」と 18K00769 (「留学の効果を最大化する留学事前事後の教育プログラム開発のための基礎的研究」) の助成を受けました。また、本調査に参加してくださった学生の方に感謝申し上げます。

参 考 文 献

- Aoyama, T., & Yamamoto, T. (2020). Equifinality approach to exploring the learning trajectories of language learners and teachers. In R. J. Sampson, & R. S. Pinner (Eds.), *Complexity perspectives on researching language learner and teacher psychology* (pp. 152-173). Bristol: Multilingual Matters.
- 荒川歩・安田裕子・サトウタツヤ (2012). 「複線径路・等至性モデルの TEM 図の描き方の一例」『立命館人間科学研究』 Vol. 25, 95-107.
- Benson, P., Barkhuizen, G., Bodycott, P., & Brown, J. (Eds.). (2013). *Second language identity in narratives of study abroad*. New York: Palgrave Macmillan.
- Berg, M. V., Paige, R. M., & Lou, K. H. (Eds.). (2012). *Student learning abroad: What your students are learning, what they're not, and what you can do about it*. Virginia: Stylus Pub.
- Brewer, E., & Cunningham, K. (Eds.). (2010). *Integrating study abroad into the curriculum: Theory and practice across the disciplines*. Virginia: Stylus Pub.
- Deardorff, T. W. (Ed.). (2009). *The SAGE handbook of intercultural competence*. Thousand

13) この試みの例としては、Yamakawa (2016) や山川 (2020) が挙げられる。

14) この試みの例としては、山川 (2017, 2019) が挙げられる。

15) この試みの例としては、山川ほか (2015) や山川 (2016) が挙げられる。

Oaks, CA: SAGE Publications.

Deardorff, T. W. (2015). *Demystifying outcomes assessment for international educators: A practical approach*. Virginia: Stylus Pub.

グローバル人材育成推進会議 (2012). 「グローバル人材育成戦略 (グローバル人材育成推進会議 審議まとめ)」 <https://www.kantei.go.jp/jp/singi/global/1206011matome.pdf>

本名信行・竹下裕子・三宅ひろ子・間瀬幸夫 (編) (2012). 『企業・大学はグローバル人材をどう育てるか』 東京: アスク出版

池田佳子 (2019). 『大学教育の国際化への対応』 大阪: 関西大学出版部

Jackson, J. (2008). *Language, identity and study abroad: Sociocultural perspectives*. London: Equinox.

Jackson, J., & Oguro, S. (2017). *Intercultural interventions in study abroad*. New York: Routledge.

Kinginger, C. (2009). *Language learning and study abroad: A critical reading of research*. New York: Palgrave Macmillan.

Kinginger, C. (2013). *Social and cultural aspects of language learning in study abroad*. Amsterdam: John Benjamins.

子島進・藤原孝章 (編) (2017). 『大学における海外体験学習への挑戦』 京都: ナカニシヤ出版

Lewin, R. (Ed.). (2009). *The handbook of practice and research in study abroad: Higher education and the quest for global citizenship*. New York: Routledge.

日本学生支援機構 (2020). 「2018 (平成 30) 年度日本人学生留学状況調査結果」 https://www.studyinjapan.go.jp/ja/_mt/2020/08/date2018n.pdf

西山教行・平畑奈美 (編) (2014). 『グローバル人材再考』 東京: くろしお出版

太田浩 (2018). 「日本の海外留学促進政策の変遷」 横田雅弘・太田浩・新見有紀子 (編) 『海外留学がキャリアと人生に与えるインパクト』 (pp. 2-28). 東京: 学文社

Sanz, C., & Morales-Front, A. (Eds.). (2018). *The Routledge handbook of study abroad*

research and practice. New York: Routledge.

サトウタツヤ (編) (2009). 『TEM ではじめる質的研究』 東京: 誠信書房

Sato, T. (2017). *Collected papers on trajectory equifinality approach*. Tokyo: Chitose Press.

サトウタツヤ (2019). 「複線径路等至性アプローチ」 末武康弘・諸富祥彦・得丸智子・村里忠之 (編) 『「主観性を科学化する」 質的研究法入門: TAE を中心に』 (pp. 82-93). 東京: 金子書房

サトウタツヤ・春日秀朗・神崎真実 (編) (2019). 『質的研究法マッピング』 東京: 新曜社

Sato, T., Mori, N., & Valsiner, J. (Eds.). (2016). *Making of the future: The trajectory equifinality approach in cultural psychology*. Charlotte, NC: Information Age Publishing, INC.

サトウタツヤ・安田裕子・木戸彩恵・高田沙織・ヴァルシナー ヤーン (2006). 「複線径路・等至性モデルー人生径路の多様性を描く質的心理学の新しい方法論を目指して」『質的心理学研究』 Vol. 5, No. 5, 255-275.

Savicki, V., & Brewer, E. (Eds.). (2015). *Assessing study abroad: Theory, tools, and practice*. Virginia: Stylus Pub.

末松和子・秋庭裕子・米澤由香子 (編) (2019). 『国際共修ー文化的多様性を生かした授業実践へのアプローチ』 東京: 東信堂

Taguchi, N. (2015). *Developing interactional competence in a Japanese study abroad context*. Bristol: Multilingual Matters.

徳永保・靱井圭子 (2011). 『グローバル人材育成のための大学評価指標』 東京: 協同出版

Tschiya, M. (2018). The effects of a teacher's formative feedback on the self-regulated learning on lower-proficiency Japanese university learners of English: A qualitative data analysis using TEM. *ARELE*, 29, 97-112.

安田裕子 (2015a). 「コミュニティ心理学における TEM/TEA の可能性」『コミュニティ心理学研究』 Vol. 19, No. 1, 62-76.

安田裕子 (2015b). 「複線径路等至性アプローチの臨床適用を巡って」『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 (心理発達科学)』 Vol. 62, 1-13.

- 安田裕子・滑田明暢・福田茉莉・サトウタツヤ (2015a). 『TEA 理論編』 東京：新曜社
- 安田裕子・滑田明暢・福田茉莉・サトウタツヤ (2015b). 『TEA 実践編』 東京：新曜社
- 安田裕子・サトウタツヤ (2012). 『TEM でわかる人生の径路』 東京：誠信書房
- 安田裕子・サトウタツヤ (2017). 『TEM でひろがる社会実装—ライフの充実を支援する』 東京：誠信書房
- Yamakawa, K. (2016). A preliminary study of the impact of a five-month study abroad program: An integration of quantitative and qualitative approaches. Presented at CLaSiC 2016 at Education Resource Centre, U-Town (NUS) Singapore.
- 山川健一 (2016). 「留学支援としての英語による大学の授業—留学前と留学後の役割に焦点を当てて—」『留学交流』 Vol. 68, 1-12.
- 山川健一 (2017). 「学科全員留学プログラムの評価を目指した留学後の学生アンケートの質的・量的分析」『京都大学高等教育研究』 第 23 号, 1-11.
- 山川健一 (2019). 「留学の効果の検証と留学プログラムの評価の動向と今後の課題」第 25 回大学教育研究フォーラム口頭発表資料
- 山川健一 (2020). 「留学での経験を可視化するための量的・質的分析を用いた基礎的研究」『安田女子大学大学院紀要』 第 25 集, 43-54.
- 山川健一・平本哲嗣・松岡博信・三宅英文 (2015). 「留学の事前指導と事後指導の一環としての英語による大学の授業」『安田女子大学紀要』 第 44 号, 181-190.
- 横田雅弘・小林明 (編) (2013). 『大学の国際化と日本人学生の国際志向性』 東京：学文社
- 横田雅弘・太田浩・新見有紀子 (編) (2018). 『海外留学がキャリアと人生に与えるインパクト：大規模調査による留学の効果測定』 東京：学文社
- Zhang, X. H., Kubora, K., Kubota, M., & Li, K. (2020). Designing blended learning environments with thinking tool strategies: Examining a Chinese teacher's decision-making and beliefs. *Interactive Learning Environments*. doi: 10.1080/10494820.2020.1848874

「虚構世界」と「現実世界」：
小説を読む行為と異文化コミュニケーションを学ぶ行為を繋ぐ (14)
—あらたに加えられた物語, *Carved in Bone* の意味すること—

青 木 順 子

要 旨

本稿は、2019 年秋に刊行されたヘンリー・リオス・シリーズの新作, *Carved in Bone* の意味することについて、2016 年の改訂版と既刊のシリーズ 7 作品もあわせて考察している。本作品には、それまでのシリーズの全作品とは異なる特徴、登場人物をめぐる物語の語りのスタイルの変更、がある。一人の同性愛者ビルが、リオスとの関係から独立した形で、心情も含めて丁寧に描かれることである。「1980 年代の同性愛者とエイズ」という「神なき世界」で生きた人々の物語ゆえに、独立したビルの物語とリオスが再構成するビルの物語の二つを必要としたといえよう。描かれている過去の出来事と性描写の明示という点でもロマン・ノワールの作品を逸脱した感はあるが、それも、作者ナーヴァが拘る「80 年代のエイズと同性愛者」を描くためには必要なことだったといえる。

は じ め に

マイケル・ナーヴァによるヘンリー・リオス・ミステリー・シリーズは、1986 年に刊行された *The Little Death* から始まって、2001 年の第 7 巻の *Rag and Bone* で完結とされていたが、2016 年に、*The Little Death* の書き換えとして *Lay Your Sleeping Head* が発行される。著者は 2020 年の論稿、「書き直された物語, *Lay Your Sleeping Head* の意味すること」¹⁾において、以下の点を指摘した：1986 年の時点ではナーヴァができないと考えていた、ロマン・ノワールの虚構世界の語りを遮ることなく具体的な性描写の挿入と民族的出自の強調をすることを試みている、プロットも変更さ

¹⁾ 『虚構世界』と『現実世界』：小説を読む行為と異文化コミュニケーションを学ぶ行為を繋ぐ(13)—語り直された物語, *Lay Your Sleeping Head* の意味すること— 英語英米文学論集 第 29 号 2020, pp.1-23.

れ、作家が過去に影響を受けた作品の影響をより明白に反映したものとなり、写実的な図柄の表紙から物語の中の「本棚の本」の変更にいたるまで、社会にも、読者にも、そして自分自身にも、作者は挑戦的な姿勢で改訂に臨んでいる。改訂版には、本の「虚構の真理性」を生きるために必要とした読者ナーヴァの人生と、その「虚構の真理性」を読者に与える自作品の永遠性に対する作家ナーヴァの覚悟が両方色濃く反映されている。同時に、一般的なロマン・ノワールから外れたように感じられることも指摘し、それについては機会を待って考察をしたいとしてその論稿を終えたのである。

前述の論稿を脱稿してすぐ、2019 年秋、同シリーズの新作として、あらたに *Carved in Bone* が発行される。本稿は、2016 年度の改訂版と既刊のシリーズ 7 作品もあわせ、*Carved in Bone*²⁾ の意味することを考察するものである。

1. 性描写の明示と民族的出自の強調、物語の語りの変更

Carved in Bone も、2016 年刊行の第一巻の改訂版と同じく、非常に珍しい位置付けとなる本といえよう。「ヘンリー・リオス・シリーズ」と副題がつけられたこの本は、第一巻（1986 年度版）と、シリーズの既刊の第二巻の間の年代設定となっており、時系列では、第一巻と既刊の第二巻の間の空白期間でのリオスを描いている物語と解釈される。本稿では、この *Carved in Bone* を「新 2 巻」と呼んで考察をすすめることとする。すでに 15 年前に最終巻の刊行を終えたミステリーシリーズの途中に入る本を出版すること自体が、プロットの変更を伴った第一巻の改訂版と同じく、稀有なことであろう。第一巻での恋人ヒューズの死の痛手からリオスが立ち直れないまま一時はアルコール中毒のリハビリ施設にはいつていたことは既刊のシリーズでも語られているが、その既刊の第二巻は、リオスが施設を出て、すでにロサンジェルスで仕事を開始しているところで始まっている。一方、この新 2 巻は、リハビリ施設から出所した後ロサンジェルスで弁護士の仕事に復帰する前、リオス

²⁾ Nava, Michael *Carved in Bone*, Persigo Press, 2019. 抜き出された原文の後につけてある日本語訳は、すべて筆者自身によるものである。本稿中では、題名、または、「新 2 巻」、で、本書を指すものとする。

が一時的に保険会社の調査員として仕事をするという設定になっている³⁾。

80年代のサンフランシスコを舞台に、リオスは、同性愛者のビル・ライアンという青年の死亡事件の真相について解明していく。2016年度の改訂版で意図的にされた性描写の明示と民族的出自の強調は、新2巻でも続いて見られる。例えば、性行為の描写は、物語が始まってほどなく登場する。また、民族的出自の強調についても、主要な登場人物の民族的出自が語られ、それに関わる形で同時にリオスの出自自体も強調されている。つまり、2016年の第一巻の改訂版、新1巻でナーヴァ自身が意図的に変更したことは、この2019年の新2巻にも同じように実施されているといえる。

新2巻には、2016年の改訂版も含めたシリーズの全作品と異なる、初めて見られる特徴がある。登場人物をめぐる物語の語りスタイルの変更である。物語の最初に、1971年と記されて登場する高校生のビルの物語は、ビルの人生の出来事が彼の内面の心情とともに語られ、リオスから独立した物語の形で始まる。自分のセクシュアリティに悩み、同性愛者であることに戸惑う心情、同性の少年への思慕といったビルの内面が語られ、ほどなくその二人の性行為の描写が続く。その後も、ビルに起こる出来事が彼の心情の記述とともに語られる。

結局、リオスが依頼を受けて調査する事件が30代に入っているビルの死に関するものと読者について分かるまで、つまり物語の始まりからその時点まで、読者はリオスとビルとの関係も分からないままで、ただビルの物語を読み進めることになるわけである。さらに、リオスとの関係が読者に分かった後でも、こうしたビルの物語は、何度も何度も、リオスの登場する場面とは完全に切り離されて、過去と現在を何度となく行き来する形で挿入されている。シリーズの他の作品では、登場人物の人生が内面の心情とともに独立して語られることはなく、彼等はみなリオスか彼の関わる事件との関わりにおいて読者に提示されてきたわけで、ビルの扱いはこれまでのシリーズの作品と大きく異なる点だといえよう。

³⁾ (1) において、2016年の第一巻の改訂版の特徴には、作者が影響を受けた作品へのオマージュのような要素が見られることも指摘したが、その一つ、ブランドステッター・シリーズのブランドステッターが保険会社の調査員であったことをナーヴァが意識していると考えられる。

なぜ作者はこうした形を取ったのだろうか。この問いについては、このシリーズでは例外的なスタイルがどのような効果をもたらしているのか、という観点から考察してみたい。二つの点が明らかな効果として挙げられる。一つ目は、ビルがリオスと同程度に重要な登場人物という感を読者に与えることである。ビルの物語は、ビルを主人公として独立して語られ、彼の心情を読者は直接共有する形をとり、物語全体に占める分量でもリオスの登場場面と同程度になっている。また、リオスだけが登場する場面においても、そのリオスはビルに関わる事件の真相解明に関わっているため、物語全体としてはビルについての話が多いことになる。このために、リオス・シリーズの主人公である「リオスの物語」とリオスの調査する事件に登場する「ビルの物語」が同等の位置づけにあるものと読者に感じられることは確かである。

二つ目は、一つ目として挙げたように、ビルとリオスが同等の扱いを受けている物語であるがゆえに、ビルとリオスの類似と相違を自然に対比的に見る機会を読者に与えることである。ビルの物語は前述したように冒頭から始まる。同性愛者としての葛藤を抱えている高校生は、まさに過去のリオスであってもおかしくない。実際、リオス・シリーズに慣れていた読者の私は、意図的に名前を変えてリオスの高校時代を語っているかもしれないと思って読み始め、しばらくは勘違いしたまま読み続けた。それを引き起こしたのも、リオスとビルでは、共通していることが多いからである。同時代に生まれ、偏見を向けられる少数派である同性愛者で、そのために同じような不安や葛藤もかかえながら、愛されること、愛することを求めて生きる若者である。同時に、そうした共通項以外では、二人の歩んだ人生自体はかなり異なるといえる。ただ、その違いはそれらが正反対というものではなく、ビルがリオスより不運に見える、そういう違いなのである。ビルは同性愛者であることを理由に家から追放され、サンフランシスコで生き、エイズになり、自死を選ぶ。リオスは、家族には打ち明けることなく家を立ち去り、エイズにはならず、正義を希求する弁護士として生きる。類似している点があるがゆえに、こうした異なってしまった人生は対比的に読者にうつる。

二人の相違と類似をさらに見てみよう。相違には、性行為の描写もある。シリー

ズを通してリオスの高校時代での同性への憧れと葛藤は何度となく回想として描かれる。しかしそれは性行為を一度も伴わない、プラトニックなレベルでの想いである。この新2巻では、性行為の経験をビルに与えているのである。

2016年度の改訂版のもう一つの特徴、民族的出自の強調も、新2巻でのリオスとビルの対比に関係している。民族的出自という観点で見ればリオスとビルの相違であり、家族像ということでは類似でもある。ビルの家族は、1970年代から80年代、偏見を向けられることがない米国の大多数を象徴するような家族像の特徴を示す。両親、兄達、そして末っ子ビル、街の教会、馴染みの牧師、コミュニティ活動、少年野球、中西部イリノイ、皆が知り合いのような町、そして白人中流家族である。それが、家族内の同性愛者の出現において、一切の理解を拒絶し追放する迫害集団と化していく。リオスはメキシコ系アメリカ人の専制的で横暴な父親と服従し現実逃避をしている母親、どちらにも自分は理解してもらえないと分かっているため、何の期待もしないまま家を立ち去る。家族がセクシュアリティに無理解であっただろうと思われる点ではリオスもまた同じなのである。

また新2巻では、民族的出自と家族という点で、リオス、ビル、ビルの恋人ニックも対比的に示されている。ニックの家族は、母親、兄弟、姉妹、そして末っ子ニックからなるメキシコ系アメリカ人であり、出自はリオスと同じであるが、ニックの家族の方は、家族内の同性愛者の出現に一度も揺らぐことのない強い家族愛を示し、すでに亡くなっている父親も、家族が回想する形で、ニックのセクシュアリティを理解し受容していたことが描かれている。ニックの家族とビルの家族は、終始、対比的に描かれ、それはビルの死後も続く。ビルが家族からの追放によるトラウマから完全に解き放たれないまま、短い人生を終えた後、ビルの家族は、彼の残した財産だけは受け取ろうとやってくる、一方、ニックの方はおそらくそれ以上に短い人生を家族に優しく見守られて終えたであろうと推測されること—こうした家族像の対比を最後まで民族的出自の強調とともに示しているのである。

家族関係からくる葛藤も相違を見せる。シリーズでは、リオス自身の回想の形で、彼が今なお苦い思いを抱えていると思われる過去の家族関係を示してはいるが、彼はその過去を少なくとも自分の中ではある程度整理して生き得ている感を読者に

与えている。暖かさを欠き、理解する可能性など微塵もない父母に自分のセクシュアリティを分かち合えなかったという孤独感は消え去らないとしても、一方的な家族からの追放はリオスには起こらなかった。しかし、ビルの故郷からの出立はリオスとは異なっている。彼のセクシュアリティを許しがたい恥ずべきことと考える家族からの暴力と追放の一方的宣告を経験し、恐怖と絶望の中一人ぼっちで、行く先のあてもないまま故郷を立ち去る。

二人が示している人間的強さでも異なりがある。シリーズ全作品において、リオスがアルコール中毒で苦しむ時期があったことは、読者は何度となく知らされているが、実際はシリーズを通して精神的にリオスが弱いと感じるような描写を読者が目にすることはない。同性愛者であるためのリオスの葛藤、動揺、苦悩、過去からの家族関係への複雑な思い、そうした要素はあくまでも彼自身がきちんと自覚しているものとして提示されているわけで、吐露される心情に見える苦悩も、リオスが自分の状態を把握できているという点では、弱さとまでは読者には見なされない。結局のところ、関係が希薄だった家族の記憶に未だ痛みは感じていても、彼はその痛みが影響を与えないかのように生きるのに十分な力は得ている。彼は普通の人よりずっと強い人間、文字どおりヒーローなのである。

一方、ビルの方は、リオスが示したことがないような脆弱さを示している。サンフランシスコに辿り着いたビルを支えてくれる「同性愛者のコミュニティ」は、断ち切られた家族を補ってはくれるが、家族関係の突然の断絶はビルには強いトラウマとなっており、サンフランシスコで成功した後でも、自ら築きたいはずの愛情関係を阻害してしまう原因となっている。最後は、エイズ患者となり、恋人とのニックとの心中を選ぼうとするビルは、最後までリオスにはなかった弱さを見せるのである。

ここまで考察をしてみて明らかになるのは、今までのシリーズ作品になかった形でビルの物語を並行して描くことで、「同性愛者が生きる人生」としてリオスでは描けなかった人物をビルによって示しているということである。リオスとは違う人生を生きる同性愛者というだけであれば、リオス・シリーズに毎回のように出てくるが、彼らは、犯罪者や容疑者、事件の関係者、友人等、リオスに関わって描かれ

る登場人物の人生として提示され、自分達の内面を読者に直接示し共有するわけではなく、リオスと同じレベルで読者の共感を得る可能性もなかった。一方、ビルはリオスと同等の立場として登場する独立した物語を持つ。リオスとビルは内面を自らの言葉で読者と心情を共有する機会を持ち得ている点で全く同等であり、それゆえ異なる人生を歩むことになった同性愛者としてリオスと鮮明に対比され得るのである。

2. 「1980 年代のサンフランシスコの同性愛者」を描くこと

この節では、2019 年の新 2 巻の *Carved in Bone* の「後書き」⁴⁾で作者ナーヴァが語っていることをみてみたい。2016 年の改訂版の第一巻の 30 頁にわたる「後書き」に比べると、この新 2 巻の「後書き」は 4 頁と短い。最初に、このように書いている。

There is no single story of how the AIDS epidemic swept through the gay community in the 1980s and I make no claim that this novel is anything other than one, fictional version.⁵⁾ (エイズが 1980 年代のゲイコミュニティをどのように襲っていったのかについてのシングルストーリーというのは存在しない。そして、私が主張したいのは、この小説はその虚構の物語の一つであるということだけである。)

さらに、これに続く「後書き」で、ナーヴァは、80 年代のエイズと同性愛者を自分が描く意味について語っている。以下に記すのはその要約である。ナーヴァは同時期を生きてはいたが、80 年代の前半は主にロサンジェルスに居住し、彼の経験はサンフランシスコやニューヨークという場での経験とは違っていたことを挙げ、この小説を書くために、1981 年から 1984 年にかけてのサンフランシスコに同性愛者が生きていることがどのようなものだったかを、資料、手記等を通して物語を構成したという。こうした資料を読む過程は、自分の記憶を呼び起こすと同時に、普通の人々の生活がどのように変化していくのかについて記憶をあらたにするような経験だったと記している。

「後書き」で、ナーヴァが強調しているのは、ナーヴァが執筆の際に強く感じた

⁴⁾ Nava, 2019, pp.366-369.

⁵⁾ Nave, 2019, p.366.

二つのことである。一つは、80年代、エイズが奪っていった同性愛者の生についてである。ナーヴァは、資料として読んだ手記の一つに書かれていた一つのエピソードを耐えられないくらい彼の心を打ったものとして紹介している。日記の書き手はエイズ特有の肺炎の発作で入院したことを記した、その十数頁後に、退院をしてから行ったジムで、チャーミングな青年に惹かれながらも、話しかける勇気さえなかったことを記す。今歴史へと変化していること、統計、年代記や評価としての公の記録になっていることは、多くの者が望むこと、少なくとも、愛し、愛されることを自分自身にも望んでいた若者達の肉体に始まった、その事実をナーヴァに激しい感情とともに思い起させたのである。

もう一つは、社会の大多数の者の偏見である。資料として読んでいる記録に綴られた純真な想いを読みながら、ナーヴァは、彼らや自分、若者が、こうした想いが大多数からは嘲られている国に生きたことを考えてしまったという。1987年の米国の総合社会調査は、国民の78%が、同性愛の関係は「いつも間違っている」としていたことを示しており、この大多数の不承認こそが、エイズ以前から、マイクロおよびマクロの両方で、攻撃という形で社会で表象されていたのである。そして、この物語では、疑念から軽蔑へ、そして公然の憎悪にいたる、当時の同性愛者に向けられていた社会の態度をとらえようとしたのだという。ナーヴァは、こうした態度は、主流メディアでは同性愛者のコミュニティが事実上目に見えないことが、異性愛への弱まることのない称揚と一緒にあって、同性愛者を道徳的にも心理的にも孤立させ、それは当事者には大変なことであったとし、こう説明している。

It's hard for any human being to be hated for something that he or she cannot change and even those who are strong enough to resist the hatred as irrational cannot help but be damaged by it. Those who lack this strength, which is probably most of us, can be driven into the darkness of self-destructive thought and behavior out of which they may never emerge.⁶⁾ (どんな人間にとっても、自分を変えることができないことで憎悪されることは大変なことなのだ。不合理だと憎悪に抵抗するだけの強さを持つ者でさえ、それによって傷つく。そして、この強さを持たない者、おそらく我々のほとんどがそうなのだが、そこからもう浮かび上がっていくことができないような自己破壊的な思いや行為の暗闇の中に追い込まれてしまう。)

⁶⁾ Nava, 2019, p.368.

そして、以下のように続ける。エイズ疫病の始まりは、同性愛者にとっては、大多数の人々と異なっているという重荷を増やしただけでなく、遠い昔から同性愛者について言われていた嘘事に力を与えてしまうことになった点で本当に不幸なこととなった。そこでは、1970年代に同性愛者によるささやかな政治的、社会的な権利の獲得も消滅するばかりとなったと。ただ、これは一時期ではあり、彼らの絶望が怒りによってかわり、その怒りからコミュニティが形成され、ついに反撃に出たのである。そしてその反撃は米国を変えたともいう。まだそうした組織が十分に認められてはおらず、まだ展開が続けているとし、ナーヴァは、この反撃が悪が克服されるテンプレートにしようと呼びかけて「後書き」を終えている。

新2巻の執筆理由については、こうしてナーヴァ自身が「後書き」で明快に答えてくれたことになる—「1980年代のエイズの時代を生きた同性愛者」は特別な意味を持っており、「彼等の物語」を描くことに目的があったのである。1980年代、エイズは同性愛者を襲う逃れられない悲惨な死で終わる病として人々に認識されていた。強い偏見をすでに社会で持たれている性的少数集団が特定の恐ろしい病気と結びつけられた時代を同性愛者はどのように生きたのか、を描こうとしたのである。そのために、多くの同性愛者が居住してコミュニティが形成されていたサンフランシスコを舞台にもし、膨大な資料を読んで新作に取り組んだという作者であるから、2016年の改訂版に不正義への怒りが強まって感じられたことも不思議ではないのである。シリーズ終了からそれぞれ15年、18年の月日を経ての改訂版と新2巻には、ナーヴァの強い拘りがある。そして、どうしても今表明する必要があるとするこの拘りは、彼がシリーズで描いていなかったものに関わるのである。

3. 1980年代の同性愛者とエイズ

この節では、新2巻における「1980年代の同性愛者とエイズ」の描かれ方を見ていきたい。同性愛者とエイズが結び付けられた1980年代以前から、少数派のセクシュアリティは「病」として多くの人々から偏見を向けられてはいた。1971年イリノイの田舎町、高校生のビルは同級生の少年との性行為を父親に見つけられ、激怒した父親にバットで殴られケガをする。そのビルの入院先には家族は誰も現れな

い。退院直前に現れたのは幼い時から知っている牧師である。ビルの家族は彼を家に受け入れる気がなく、彼は町を立ち去ってカルフォルニアに向かい、一人で生きるようにと言われる。ビルは混乱状態に陥る。ビルは、自分は家族を愛していると言い続ける。しかし、その時点では、すでに牧師が彼との会話自体を嫌がっているのが明らかである。なぜなら彼のセクシュアリティは、牧師にとっては、そして彼が代弁している大多数にとっては、「病」なのである。それも伝染する、隔離されなければならない、恐ろしい病。

The kindness was gone from the priest's face, replaced by a mask of coldness that did not conceal the fear in his eyes. Bill realized the priest was afraid of him, as if he were the bearer of a loathsome, contagious disease.⁷⁾ (優しさは牧師の顔から消えて、彼の眼に宿る恐怖を隠し切れぬ冷淡さの仮面に置き換わった。ビルは分かったのである。牧師は彼を恐れている。まるで、彼が、何かぞっとするような、伝染する病にかかっているように。)

A wave of nausea choked him. He wanted to shout, You know me, Father! I'm Billy Ryan, Joe and Margaret's youngest, Tom and Matt's brother. I took first communion from you. I served you at the eight o'clock mass. You coached me in Little League.⁸⁾ (襲い掛かる吐き気で息が詰まりそうだった。叫びたかった。僕を知っているでしょう。神父！ビリー・ライアンですよ。ジョーとマーガレットの末っ子、トムとマットの弟ですよ。あなたから初聖体を拝領しました。8時のミサのお務めもあなたのもとでしました。リトル・リーグでコーチもしてもらったんですよ。)

なすすべもなく街を出て、ビルは辿り着いたサンフランシスコで生き抜いて成功もするが、暴力と追放という家族との体験はトラウマになっており、今を生きることを難しくさせる。そして、彼の人生に容赦なく、真正正銘の病、エイズが襲い掛かる。エイズに罹患する前、サンフランシスコでビルを支えてくれた同性愛者の親友達をエイズで失い始めている。そうしたエイズ患者の死は残酷だ。その友人の死についてビルがどのように受け止めていたかが、リオスにはこう語られる。

"My Waldo died," she said, "Died hard." She fumbled in the pocket of her housecoat for a handkerchief and wiped her eyes. "It was like all the plagues of Egypt were visited on him before the Lord in His mercy took him. It was horrible, just horrible. Bill was

⁷⁾ Nava, 2019, pp.17.

⁸⁾ Nava, 2016, p.17-18.

there for the whole thing and I could see how hard it was for him.”⁹⁾

物語の後半で、再度、今度は、ビルの側の物語として、死の床にあるワルドとの会話が出てくる。苦闘の最後、死を目前に、ワルドはビルに “They...were...right.” と語り始める。

“They were right about what? Waldo closed his eyes and still for such a long time Bill thought he had drifted off but then he grabbed Bill’s wrist with a claw-like hand.” About ... us... Us fags... God... hates... us.” He released Bill’s wrist and turned his head to him. “ Look... at... me... You’re... next... God... hates us.” Twenty-two minutes later, he was dead.¹⁰⁾

「彼らの何が正しかったって？」ワルドは両目を閉じて、長い間静かにしていたので、ビルは彼は眠っているのかと思った。しかし彼はビルの手首をカギ爪のような手でつかんだ。「僕たちのこと。ゲイだよ。神が僕たちを憎んでいるってこと。」ビルの手を放して、頭を彼に向けた。「見て、僕を、見て。そして次は君だ。神は僕たちを憎んでいるんだ。」その22分後、彼は死んだ。

聞き手のリオスがビルの友達から聞くビルの物語と、それとは別に語られるビルだけが知り得る詳細な物語——同じ出来事が二つの違う立場から語られる。そして、後者の物語の二人ともすでにこの世にはいないのだ。それゆえに、「80年代の同性愛者とエイズ」の物語は死者が最もよく知っているという事実を否応なしに読者は認識させられる。「22分後」にこの世を立ち去るワルドのように、そして、それを見届けたビルのように、逝った者達が知っていたのだと。

実際には、1986年に刊行され2001年に全7巻で終わったリオス・シリーズも、80年代から90年代を舞台にし、その時代の同性愛者とエイズを描いているのである。第二巻から登場するリオスの恋人ジョシュのエイズの罹患と闘病、死にいたるまでが、リオスとの関係の変化と感情とともに、第6巻まで描かれる。他にもリオスの友人も含めて他の登場人物のエイズ罹患やエイズによる死という形で、むしろシリーズを通して通奏低音としてエイズは絶えず描かれていたのだ。しかし、あくまで、リオスという魅力的でヒロイックな主人公とジョシュという美しい恋人を襲う悲劇という物語が中心にある。リオスはヒロイックだし、そのリオスの恋人であるジョシュも同じようにヒロイックさを見せるのだ。だから、ナーヴァが「未だ描

⁹⁾ Nava, 2016, p.106.

¹⁰⁾ Nava, 2019, p.339.

いていない」と感じていたのは、一つの「美しい物語」となることを許されなかった物語を示すことなのだろう。ビルの恋人ニックは、ビルの死後に事件の真相も分かった後、リオスを訪れ、自分もビルからエイズに感染しているだろうと告げる。家族の追放からのトラウマを抱え、自分に対しても健やかな愛情を示すことができず、最後はエイズ罹患を知って心中を企てた。そうしたビルの弱さを全て受け止め、ビルへの愛情とビルからの愛情を優しく記憶にとどめて、限られている生を精一杯生きようとするニックは十分ヒロイックではある。リオスは彼に再び会うことはなく、数年後、ワシントンのナショナルパークを歩いていて、エイズで亡くなった人々の名前を記してあるパネルの中の一枚に、緑の刺繍で、「ニック」と記されているのを見る。その名前の下にあるのは、「マニトー弟」。変わらぬ愛情をニックに注いでいたメキシコ系アメリカ人の家族を知っているリオスは、これはニックのことを指していると察する。でもそれも推測に過ぎない。リオスとジョシュの物語が最後まで疑いのない「美しい物語」として読者に語られた一方、ビルとニックの物語は、「美しい物語」に言語化はできなかった、「終わり」も読者に明示されることはできずフェードアウトしていった物語、なのである。その違いを分けたのは不条理の世界での偶然性であり、リオスはビルにもなり得た、のである。

4. 「ロマン・ノワール」からの逸脱

新2巻は、ロマン・ノワールの小説といえるのだろうかという、すでに2016年度の第一巻の改訂版から抱えている問いに、この節では答えてみたい。ロマン・ノワールの決定的な定義があるわけではないが、一般的に了解された共通項は存在する¹¹⁾。ロマン・ノワールにおいては、中心的テーマは、社会の欠陥を暴くことにあ

¹¹⁾ 『ロマン・ノワール』（ジャン＝ポール・シュヴァイアウゼール 平岡 敦（訳）白水社、1991）では、以下のように説明をしている。ロマン・ノワール自体が確立した定義があるわけではないが、一般的には、ある程度の共通の認識は存在している。ロマン・ノワールにある共通の要素は、推理文学、犯罪等の不安定な感覚、作者の生きている社会の持つ不安感、登場人物は犯罪者、被害者、刑事や私立探偵、容疑者、素人探偵（弁護士、新聞記者、被疑者の友人、被疑者自身）、とし、同時に、この共通要素や登場人物だけでは、ロマン・ノワールの定義づけはできない、大事なのは、「語り口」にあるからであり、それこそが「古典的な推理作家」とノワール作家を区別している。

り、現代社会への批判がそこに必要とされ、社会の欠陥は炙りだされて、読者に問いを投げかけるのであり、「人間に向けての、現代の一局面に向けての眼差し」が存在するものである¹²⁾。その点で、2016年の改訂版については、30年前の社会を舞台にしての問いかけ自体がロマン・ノワールとしてはいささか無理があると感じた読者もいたはずだ。すでに「歴史」となっており、眼差しの性質が違うのではないかと。ただ、この改訂版は、「改訂」自体への違和感を別にすれば、「改訂」ゆえに時代を遡る物語になることに読者は理解をある程度示すしかなかった。また、2016年の改訂版の「後書き」でナーヴァ自身は、長い月日を経てどのように性行為の描写をロマン・ノワールの世界に入れ込むのかが分かったと記してはいたけれども、何度も登場する具体的な性行為の描写が読者を異質の次元に運んでしまい、ロマン・ノワールのあるべき読書の性質を勝手に変えられてしまったような、これまた違和感を持った読者は少なからずいるはずである¹³⁾。

今回の新2巻はさらに典型的なロマン・ノワールを逸脱しているといえる。一つには、すでに2節で述べた独立した登場人物の物語が量的に占める割合が多いことがある。主人公が、語られないことを結び付けて全体の物語を再構成するという典型的スタイルからは外れている。また、物語の最初から始まる性行為の具体的な明示も上述した改訂版と同じように違和感を与える。そして、決定的なことは、新2巻は、1980年代の社会のエイズと同性愛者を2019年に描いた時点で、「歴史」としての性質を免れることはできないことである。同時代の読者にあてた「現代の一局面への眼差し」ではなく、2019年から過去に向けた「1980年代への社会への眼差し」である。この物語が2019年の時点でシリーズに加えられたのは、作家の書き残したと感じているものを充足するためであり、「後書き」の最後の現代社会にお

12) シュヴァイアウゼール, p.102.

13) 性行為の具体的な描写と物語の相容れなさについて、以下、『斜めから見る』（スラヴォイ・ジジェク、鈴木昌（訳））からである。「映画の語り（物語の展開）と性行為の直接的提示との調和は構造的に不可能なのである。一方を選べば、他方が失われる。いいかえれば、われわれを『うっとりさせ』、われわれの心を打つようなラブストーリーを作りたければ、（性行為の細部の）『すべてを徹底的に見せ』てはならない。（p.208）」ラカン学者のジジェクが、ラカンのトポロジーを使って説明するならば、「性行為の描写は<現実界>の闖入として機能し、その疑似現実の整合性を崩してしまう（p.210）」ことになる。

ける継続する闘いへのエールは、作品がすでにノワールを逸脱していることを分かっている作者自身のある種の弁解とも取れないわけではないのだ。

結局、この物語がノワールから逸脱することは、必然的なことだったといえないだろうか。なぜなら、「80年代の同性愛者とエイズ」とは、エイズについての全容が分かり「歴史」となってみて初めて理解できるようなことだったからである。そして、「歴史」としてではなく、「物語」として残すことで、感情レベルでそれを伝えることができることが、当然作家であれば分かっているから、典型的ロマン・ノワールを逸脱しようとも、18年前に終了したシリーズに1980年代を舞台に新作を加えたのだと解釈できるからである。以下、その「80年代の同性愛者とエイズ」の意味することについて考えてみたい。

社会の大多数による偏見の対象となる少数派のセクシュアリティを生きることがどんなに困難なことかについては、ナーヴァはシリーズ内で何度も描いている。同性愛者は、自分が何者であるかを見つけようとする時点で、すでに混乱状態になるかもしれない、自分を他者から正しく定義されないという困難にも直面する。隠しながら、同時に自分を受け入れる相手を見つけ、その相手が同じセクシュアリティでないだけでなく、そうした少数派のセクシュアリティを社会の偏見のままに見ている人間でもあり得る、その見えない、見せ得ない部分と、受容されたいが、拒絶ばかりか、激しく否定され、むしろ示された偏見に強く傷つくかもしれない恐怖—こうした複雑な感情がもたらす生き辛さである。

この新2巻でも、そうした感情をビルもリオスも経験する。気になる同性のセクシュアリティについて推測し、当人からの同性愛者に対する偏見の言葉に傷つき、少数派にとどまるしかないセクシュアリティを生きることを孤独感とともに感じる—これはリオスの側の話として入っている。「後書き」でナーヴァが80年代のエイズで亡くなった同性愛者の残したジャーナルで心を最も打ったものとして挙げた唯一のエピソードも同様の想いを示すものであった。このアイデンティティの確立にさえ、またそれを確固としたものにしてくれる他者との出会いさえ、不安の中で求めるしかない、そうした性的少数派の思いを描くことをシリーズでナーヴァは一貫しておこなっているのである。

こうした葛藤を抱える同性愛者と、80年代の、激しい苦痛に続く死を意味していたエイズが同一視されたわけで、彼らには二つの困難が襲い掛かることになる。彼らは言語化できないような死をもたらす病エイズも抱えることになるのだ。第3節であげたように「神は私たちを憎んでいる」とエイズで死んでいくビル友達ワルドが死の間際で言う場面がある。「神はホモ野郎を憎んでいる」と、当時街角の落書きや掲げられたプラカードで示された、文字通り「神の祝福なき存在」である同性愛者への社会の偏見をストレートに示す言葉である。一方、それを口にする同性愛者のワルドにとっては、この「神の祝福なき存在」に、当時信じられていたようなエイズは同性愛者間の性行為によって感染するということが大きく関わってくる。少数派であるゆえに社会では偏見を持たれた同性愛者の、その愛の行為としての性行為が、エイズという病に感染する理由ともなること、愛の行為をまさに苦悶の病と結び付けられたこと—このことが内包する意味に彼等は気付いているからである。この物語自体がまさにそれを意識させるものとなっている。ビルは同性との性行為の場を見つけられて家族から追放されるが、ビルが言葉による告白だけで家族にカミングアウトしていたら、表面上だけでも少しは穏やかな反応だったのかも、と思えるのは、性行為が愛情を確かめる行為ゆえに、偏見を持つ者達に激しい嫌悪を引き起こすという事実を私達がよく分かっているからである。その性行為は、さらに死を意味するエイズをビルに与え、ビルは愛するニックにうつしたであろうことも確信する。すべてが「愛情を確かめる行為である性行為」に帰結すること自体が、後にエイズが同性愛者の間の性行為だけで感染する病でないと理解されるまで、同性愛者を最も苦しめていたはずである。こう考えると、ナーヴァが2016年度版で性描写の明示を意図的にする決意をしたことも、「1980年代の同性者とエイズ」に深く関わっていることが分かるのである。「性行為」は明示される必要があったのである。

「神は私達を憎んでいる」という言葉は同性愛者の生きる世界を意味することになる—すなわち「神なき世界」。神とは、私たちが生きる世界について理解が可能になるように説明の言葉を与えてくれる存在である。しかし、その神は彼らには存在しないのである。エイズという悍ましい病が、すでに理不尽に「病」として人々

から偏見を向けられている同性愛者である自分達の間の性行為にだけおきることについて、言語化して理解することは当時の彼らには不可能だったはずだ。社会の偏見の中で自分のアイデンティティを確立するしかない同性愛者としての生、そして、そうした自分達の愛情の行為を通してうつるエイズによる壮絶な死、この二つの説明不可能性に同時に直面した 80 年代の同性愛者は、まさに「神なき世界」、不条理の世界に置かれていたのである。

リオスは、この「神なき世界」で、幸運にもエイズを免れたから、葛藤を重ねながらも、アルコール中毒になりながらも、どうにか自分の生に説明をつけアイデンティティを確立して生きることができた。彼は生き抜くことができた同性愛者である。一方ビルは違う。ビルは、自分が誰であるかを認めようとする努力の中、家族との体験によるトラウマを抱え、完全には回復することなく、今度はエイズに罹患する。「性行為」に帰結する、この二つの出来事を両方抱えて「神なき世界」を生きたビルを主要な人物として登場させることで、リオスでは描けなかった生を生きて、そして死んでいった同性愛者、言い換えれば、言語化できないままの生と死を持った同性愛者を、はじめて正面からシリーズで描いたといえるのだ。そして、ビルの死後のリオスの事件の真相解明がなければ、言語化されないで残る「ミステリー」を抱えたまま消え去ることになる「ビリーの物語」は、独立したビルについての物語と、リオスの解明したビルの物語の二つのことを併せることで初めて、少なくとも読者に語られ得る物語となり得たのである。

シリーズの中での例外的な語りは、ここでその必然性が明らかになる。ロマン・ノワールでは主人公が見事に再構成された直線的な物語を最後には明示してくれる。リオスもシリーズを通してそうである。でも、本当に起きたことを読者に示すために、初めて今回だけは当事者の側から語られる物語を別に必要としたのであり、その理由は、「80 年代の同性愛者とエイズ」の物語が、究極ともいえる「神なき世界」に起きたことだからなのである。

さらには、物語が始まってすぐにビルの性行為、それを見つけた父親の暴力、家族からの追放という一連の話が語られること自体、意図的なロマン・ノワールの典型を踏襲してみせたとも言い得るのである。ロマン・ノワールでは、殺人のような

衝撃的な事件が冒頭から始まって、主人公がその真相を明らかにしていく形がよくある。ナーヴァは、その形式を意識したのではとも考えられるのだ。「魂の殺人」がビルに対して行われたということである。ビルはそこで一度殺されたことを示唆し、リオスが最終的に明らかにしてみせたのは、ビルの肉体的な死の謎ではなく、物語の冒頭に登場した死なのだと考えられるのである。読者がこの「魂の殺人」が正しく理解できるのであれば、である。社会で少数派が正当な権利を得るために必要な闘いは続いていると、その闘いにエールをおくって「後書き」を終えたナーヴァの、この2019年刊行の1980年代の物語が、「歴史」を記した書としてではなく、現代社会への警鐘を鳴らすロマン・ノワールの作品として評価されるのかについて判断するには、もう少し月日が必要なのだ。「新たな作品とは、書くことの意味と作者自身とを、そのつど問い直すことなのであり、開いたノワール文学が唯一のノワール文学といえる¹⁴⁾」—その点では、ナーヴァの作品はロマン・ノワールを完全に逸脱したわけではないのである。

5. 多数派の視点で描かれる少数派と「拘り」

今回のナーヴァの新2巻と同じく、1980年代にかけての同性愛者とエイズの時代と社会を描いている映画『ボヘミアン・ラブソディ』をここで取り上げてみたい¹⁵⁾。描かれたのは世界的名声を得たクイーンのフレディ・マーキュリーであり、その彼が同性愛者であり、エイズで死去しているがゆえに、同性愛者とエイズを描くことは避けて通れなかった映画でもある。2019年のアカデミー作品賞等にもノミネートされ、世界的なヒットとともに社会現象とまで言われた。実際には、主演男優賞を取ったが、主人公が同性愛者のミュージシャンの伝記という内容からアカデミー作品賞は取らないのではという世間での予測自体はあたったことになる。この映画の公開後の映画批評には厳しいものが多かった。映画の手法やスタイルについては別

14) シュヴァイアウゼール, p.100.

15) 4節は、以下の論稿5節の転載である。一部付加がある。青木順子「異文化コミュニケーション教育(異文化教育)の原点としての『我々』と『彼等』のコミュニケーション問題(22) —『他者のメディア表象』への『拘り』の意義—(安田女子大学紀要 第48号, pp.125-136, 2020年)

にして、内容に関わっての厳しい批評の多くは、性的少数派である同性愛者のマーキュリーを主人公としながら、その同性愛者の人生が異性愛者の視点で描かれている「ストレートウオッシュ（異性愛化）」映画となっているという批判である。批判の中には、それ以上、つまり、この映画は明らかなホモフォビア（同性愛嫌悪）の体を見せているというものもいくつもある。マーキュリーは「同性愛嫌悪の伝記でスラットシェイミングをされた」と書いて、例として、映画での、彼が異性の恋人との関係だけを保ってさえいれば大丈夫だったのに、というニュアンスでの描き方、悪者として描かれているのは彼の同性の恋人という点を指摘しているのは、フォーブズ誌の批評¹⁶⁾である。マーキュリーが同性愛者だとカミングアウトする時には映画は自己嫌悪を抱える人物として彼を描き、彼の周りの異性愛者はそれを強めるような発言をし続ける、また例外はあってもほとんどの同性愛者は悪者で、マーキュリーを「異性愛者のファミリー」から切り離す役割を持っていることを例として挙げている批評もある¹⁷⁾。社会で偏見の対象となる要素を持った人物が扱われる時、期待された公平さを裏切り、さらには、主流となっている側からの視点からの描写が意図的にされていると思われるなら、激しい失望と憤りがその拘りに示されることになる。

強い言葉で批判を記した中に、「映画は無意識の同性愛嫌悪に満ちている」と書いたアイリッシュ・タイムズ紙の批評がある¹⁸⁾。この中で、作家で、ミネソタ大学で現代文学を研究し、『フレディ・マーキュリー』の執筆者でもあるラウアは、史実と映画が違うことはひとまずおいておいても、映画は「隠れた同性愛嫌悪の上演法で補強されたアナクロニズム、パラクロニズム、またはメタクロニズムの連続（“a succession of anachronisms, parachronisms or metachronisms underpinned by a latent homophobic dramaturgy”）」だと酷評する。また、彼によれば、この映画の中では、マーキュリーは「彼のホモセクシュアリティに辱められている」に等しく、まるで自

16) “‘Bohemian Rhapsody’ Review: Freddie Mercury Gets Slut-Shamed In Homophobic Biopic,” *Forbes*, Oct. 24, 2018.

17) “An open letter to the many fans of Bohemian Rhapsody from a concerned queer,” *CBC*, Nov. 8, 2018.

18) “Freddie Mercury: Bohemian Rhapsody is no tribute. It’s full of unconscious homophobia,” *The Irish Times*, Nov. 22, 2018.

分が何者であるかについて赦しを得ようとしている者のように描かれ、男性を求めることで罪をおかし、彼のセクシュアリティは、彼に間違った選択をさせ、彼の魂をダメにして、邪悪な影響をもたらすとされている。こうした映画について、ラウアは言う。

Bohemian Rhapsody, with its unconscious homophobic bias, in no way pays tribute to its principal figure. Instead two former Queen members have taken a neo-colonial knife to the memory of a child of immigrants who became the quintessential British rocker. During his lifetime Freddie Mercury was made feel humiliation because of his homosexuality. In his final months he faced an aggressive reaction to his illness lead by the tabloid media. Today his life is projected through a heteronormative lens that distorts a life of artistic achievement into a barely-concealed, shameful act of posthumous revenge.¹⁹⁾ (『ボヘミアン・ラブソディ』は、その無意識の同性愛への偏見でもって、どんな形でも映画の主人公への賛辞にはなっていないのだ。代わりに、クイーンの前メンバー二人が、典型的なブリティッシュロックーとなった移民の子どもの記憶に新植民地主義のナイフをつきつけているのだ。生きている時は、フレディ・マーキュリーは彼の同性愛のために辱められ、最後の数カ月は彼の病気に対するタブロイドメディアに導かれた攻撃的な反応に直面し、そして今、芸術的な業績の生涯を、恥ずべき死後の復讐という、ほとんど隠されてもいない恥ずべき行為に歪め曲げる、異性愛規範性のレンズを通して、彼の人生は映し出されているのだ。)

この大ヒットとなった映画の伝記映画としての出来についてでもなく、また、獲得した、獲得しなかった賞についてでもなく、映画に浴びせられた多くの「ストレートウオッシュ」という批判を繰り返すのでもなく、この映画に対して、ただ「何を自分は残念だと思うのか」について論じた論稿もある。同性愛の歴史研究者であるワシントン大学の教員であるローリー・マーホファーが、「The Conversation」に掲載したものである²⁰⁾。マーホファーが映画に描かれなくて残念だったのは、映画の主人公であるクイーンのマーキュリーが、1980年代にHIV陽性と診断された多くの人々と同じように、病だけでなく、政府の失策や世間の軽蔑の犠牲者になっていた点である。1980年代の米国や英国のHIVに対する反応は、彼女によれば以下のようなものである。流行が都市で確認され始めた時、医師も感染は特定の人々の

19) “Freddie Mercury: Bohemian Rhapsody is no tribute. It’s full of unconscious homophobia”

20) “The Freddie Mercury story that goes untold in ‘Bohemian Rhapsody’,” *The Conversation*, February 23, 2019. この論稿の最後は以下のようにになっている: “I hope someday, someone makes a better Freddie Mercury biopic, one that accurately depicts the historical moment he lived in and the challenges he dealt with. He deserves it.”

集団でおこると見なしていた。それが病気とは別の理由ですでに偏見対象となっている集団、すなわち男性の同性愛者、麻薬常習者、ハイチ出身者、ハイチ系米国人、である。性的、人種的偏見が、そのまま HIV の偏見と直結すると同時に、その偏見は、自らの危険性行為によって感染したという自分自身の責任であるという認識とも結びつく。彼女は、このように説明をした上で、米国政府の当時の対処は、「HIV 感染者が死に向かうのを黙って放置した」状態に近いという。1981 年に最初の症例が報告された英国でも、感染予防のための情報をきちんと広める努力も遅れていた。その状況が、マーキュリーのような性的マイノリティグループにいる男性をさらに悲惨な状況に追いやることになる。マーキュリー自身は 1987 年にエイズと診断され、抗 HIV 剤併用療法の開発を待つことはできずに亡くなった。

映画には明白な「同性愛嫌悪」は登場せず、それが示されたとしても微妙であるが、そうした状況は実際のマーキュリーの人生とは違っており、マーキュリー自身がカミングアウトをしなかったことについて、マーホファーはその理由もよく分かると理解を示すのである。88 年に英国では、その後 10 年は続くことになる「反同性愛法」が施行されて、同性愛を広めることは禁止され、同性カップルの家族は「偽りの家族 (“pretend families, not real families”）」とされていたのである。この時代、グラムロックやディスコミュージックシーンでは性的少数者のイメージはもてはやされていたが、その前提には、「本当の生活においては誰もが異性愛者である

(“it was all predicated on everyone being straight in real life”）」が存在したとマーホファーは説明する。クイーンのコンサートに集まって “We Are the Champions” を聞いているロックファンのうち、マーキュリーが「ロックの神様」だけでなく、「すばらしい同性愛者の偶像」と知っていた者は少なかったであろうし、実際、80 年代に、マーキュリーがグラムロック的ないでたちをやめ、ゲイの世界で人気のあるスタイルに髭をカット、黒革ジャンを着て登場し始めた時、ファンの受けも悪かったという。映画が、マーキュリーの寿命を縮めたのは彼自身の放蕩のように描かれていることについても本当ではないのである。だからこそ、「もっと実像に迫る伝記映画を」と彼女は言わないではいられない。「いつか、別の監督がもっと出来のいいマーキュリーの伝記映画―彼が生きた歴史的な瞬間を、彼が向き合った困難を正

確に描いた作品—を作ってほしい、彼はそれに値する。」と彼女は論稿をそう結んでいる。

この論稿に対するネット上の読者の反応について、論稿初出の「The Conversation」での英語での読者のコメント、および論稿が再掲されたニューズウィーク日本語版へのネットでの日本語でのコメントを見てみた²¹⁾。英語のコメントには、同性愛嫌悪そのものといえる過激なコメント、それらのコメントを非難するもの、論稿に同感し、映画への失望と少数派の苦難について書いているもの、そして、映画や音楽を評価すればいいというコメント、と実に様々なものが見られる。一方、日本語のコメントでは、ここまで素晴らしい映画にそこまで史実に正確にと迫る意味が分からない、多くの人々が感動した映画にこれ以上何をあらたに付け加えたいのか、映画は映画である、エンターテインメントとして映画を考えないと楽しめないだろうといった、愛され支持された映画が揚げ足を取られて文句を言われていると感じている人々が多いことが一読して分かる。マーホフアーによって示された拘りは、それへの応答において、社会に存在する少数派への差別意識を白日のもとに曝け出させ、同時に、日本語での大多数の論稿へのコメントに見られるように、映画には感動したからこそそこまで言わなくてもいいのではと感じる多くの人々の存在もあらためて示している。

結局、こうした社会での人々の熱心な応答こそが、同性愛者研究者のマーホフアーが論稿を書かずにはいられなかった理由なのである。映画はエンターテインメントとして大成功し、これ程多くの人々に影響を与えているのだ。彼女はだからこそ残念なのであり、拘るしかない。歴史に残るようなこの偉大なミュージシャンは、時代の中ではカミングアウトを出来ないとした性的マイノリティであり、当時、そのマイノリティグループと同一であるかのように扱われた最も偏見を引き起こし忌み嫌われた病であるエイズを自ら生き、そのために最後は亡くなったのである。歴史に残るような音楽を創造しつつ、こうした困難を生きていたマーキュリーだからこそ、マーホフアーは、「彼が生きた歴史的な瞬間」と「彼が向き合った困難」

²¹⁾ 英語のコメントは、(20)の論稿掲載のサイト「The Conversation」で記されている読者のコメント欄から、日本語のコメントは「映画『ボヘミアン・ラプソディ』が語らなかったフレディの悲劇」(「Yahoo!ニュース」2019年3月4日)のコメント欄から、である。

を正確に描いた作品をいつか見たい、と書かずにはいられないのである。「何を自分は残念だと思うのか」と「拘り」を少なくとも彼女は示す必要があると感じるのである。映画で描かれたマーキュリーの人生を愛した人々と同じように、彼の抱えたものの全てを含めての人生を想うから、そして、彼のようにマイノリティグループに属する人生を今生きている者がいる、これからもある、そしてそうしたグループに強い偏見を持つ者は存在し続ける、その事実があるからこそ、どうしても表明したい「拘り」が存在する。

6. おわりに

世紀のシンガーでさえも 80 年代のエイズを生きた姿を 2018 年に多数派のレンズで歪められた物語で描かれる可能性がある。どんな死者にも自ら言語化を是正する機会はない。そうした普遍的な事実がわかっているから、ナーヴァは拘りたいのであろう。そして、この「ナーヴァの拘り」は、既刊のシリーズの第一巻の改訂版と新 2 巻刊行という形で示されているのである。2016 年の改訂版でのシリーズからの大きな変更点であった性描写の明示と民族的出自の強調の二つは、2019 年の新 2 巻での 80 年代のエイズで浮き彫りにされたセクシュアリティや人種に関わる偏見と強く関わってくることであり、すでに新 2 巻の物語を踏まえた上での変更とも考えられるのである。

この新 2 巻の最後、リオス自身もエイズの検査を受け、陰性だったと大学時代からの友人ラリーに告げる。それを聞かラリーは、自分は陽性だったと告げる。予期せぬ返答に愕然とするリオスに、「知らないものを恐怖するよりは、現実を見つめて生きる方がいい」とラリー。聞いたリオスは、自身も驚くことに、サンフランシスコを去ってロサンジェルスに戻ると口にするのである。それは彼が弁護士という仕事に復帰することを意味している。「自身から逃げ出すことはできないよ」とラリーが言うのに、「逃げ出すのではないよ。前に進むのさ」と答えるリオス。リオスは、時に弱る時はあっても最後は立ち直る、「ロマン・ノワール」のシリーズに相応しいヒーローなのだ。

しかし、物語自体はロマン・ノワールを逸脱した。それは作者が選んだことであ

る。言語化されないままの、言語化できないような不条理と偶然性、80年代の同性愛者がこの危うさを生きた歴史を、作者は2019年、「物語」に描いたのであるから。ただ提示された「物語」を前に、私達は問うことはできるのかもしれない。「神なき世界」を自分は今生きる覚悟があるのかどうかと。

また、前述の会話は、時系列では第一巻と第二巻の間に入ると考えられる新2巻という解釈に対する不協和音を最後の最後になって与えることになる。ラリーのエイズ罹患の告白は既刊の第二巻に存在し、そこでは、リオスは痩せて激変した旧友ラリーの姿に驚き、そこではじめて彼のエイズ罹患のことを聞かされる。ナーヴァがこのことを忘れてしまって新2巻の最後にラリーの告白を入れたはずはない。とすれば、既刊の第二巻と矛盾することになる最後の場面が意味することは何なのだろう。2019年刊行の新2巻は、既刊の第二巻の前にはいるものではなく、2016年度版と同じく第二巻の改訂版であり、これ以後も改訂していくという示唆なのだろうか。「ナーヴァの拘り」は続くのかもしれない。「美しい物語」が存在するリオス・シリーズをそれゆえに愛した読者としての私は、そうなることを心配もし、望んでもいない一方、異文化コミュニケーション教育を専門とする者としては「ナーヴァの拘り」を見てみたい、それが今の正直な気持ちではある。心配の方がずっと勝っているかもしれない。いったん新たな物語を読んだ後、その前の物語の世界に戻ることはどんな努力をもってしても読者にはできないからである。

物語とはとてつもない力をもっているのである。そして、まさに、そうした物語の力を確信していることが、ナーヴァが拘りを実践している理由だとは分かるのである。この最後の最後に示された矛盾点はナーヴァの読者への問いかけかもしれない。あなたは改訂版がこれからも続くことを期待していますか、それとも恐れていますかと。「神なき世界」を自ら生きる覚悟を聞く問いと、この問いは呼応しているようにも感じる。

認知意味論と「新しい實在論」

青 木 克 仁

Abstract

哲学は歴史的に見ても、新しい学問領域が胚胎し、その基礎が固まるまでその揺籃期に立ち会い続けてきたという意味合いにおいて、常に基礎的学問であり続けてきた。1950年代、認知科学が台頭し、「計算のメタファー」パラダイムの下、学際的な活動期に入った時も、そうした方向性を「客観主義」と呼び、批判を展開した際も、哲学は基礎的学問であることを以て貢献し続けてきた。認知意味論が批判する「客観主義」の立場から見れば、想像力に認知的機能を認めることは、主観主義に道を譲り「真理」を放棄するに等しい挙措であるということになる。認知意味論は、こうした批判をかわすために、その實在論的基盤を常に主張してきた。この論考において、ガブリエル達が唱道する「新しい實在論」と認知意味論の関係性を論じる。

序 論

マーク・ジョンソンは、「イメージ図式」の創発について語っている。身体的存在である私達が、意識化され得る以前の段階において、まさに身体として、外部の事物と相互作用を行った結果、私達を外部のエネルギーや物理的力と関係させ、その相互作用に不可欠な要素として「イメージ図式」は創発するのだ。こうした要約からも窺い知ることができるように、認知意味論は、その實在論的な理論を背景にして、想像力の構築物たる「イメージ図式」や「基本レベルのカテゴリー」の客観性を確立しようとしてきた。身体を有する存在としての人間は、有機体として環境と互いに能動的に規定し合うように進化してきている。それゆえ、有機体たる人間が、環境と独立した無関係な存在であると考え、こと自体が誤りであろう。身体性に媒介された仕方ではしか経験を理解し得ないという事実に基づいた實在論の主張は、認知意味論から切り離すことができないのである。

ただ、それが身体性に媒介されている以上、直接意識に上ることはない。それゆえ、認知意味論は「認知的無意識」ということを理論の要石として据える。「認知的無意識」とは何なのだろうか。ソクラテスの「無知の知」は「自分が知らないということを知っている」という形で定式化されている。これに倣って「認知的無意識」をソクラテス風に定式化すると、「知っていることを知らない」ということになるだろう。それはあらゆる体験の枠組みとして実際に作動しつつも、それが何であるのかを意識に上らせることは決してできないがゆえに、意識のいかなる反省作用に基づいても意識内容として把握されることは決してない。私達は、身体的存在者として、ただそのようにしているのだが、なぜそのようにしているのかを意識に上らせることができないのである。例えば、脳や神経系を備えた身体的存在として私達が環境と相互作用することによって無意識下で必然的にカテゴリー化が生じてしまう。私達は脳神経システムによる学習プロセスによって、自動的かつ無意識的に獲得してしまう認知のための資源を持つが、私達がそれを持っているということに気付いていないということが十分あり得る。私達はこのプロセスに関して、選択の余地がない。身体的存在である私達が、ただただ環境内を手探りし、歩き回り、知覚し交流をし続けることで獲得されてしまっている。そうしたものを認知資源として活用しつつも、なぜそれがそうしたものとしてあるのかについては知らないのである。少なくとも、純然たる哲学的内省によっては決して知られることはないだけではなく、「知らない」ものが「知る」ということの枠組みとして作動してしまっているということを知らないのである。こうした「認知的無意識」の創発の過程において、人間という身体性を備えた有機体は、環境と相互作用を行い、エネルギーや力といった実在論的な要素と交流するのである。

そこでこの論考では、認知意味論が下敷きにしている「実在論」とはどのようなものなのかという問いを提起し、それに答えを見出そうと考える。そのために、先ず、「新しい実在論」の旗手の一人、マウリツィオ・フェラーリスの「実在論」、それからもう一人の旗手である、マルクス・ガブリエルに影響を与えたマルティン・ハイデガーの思索に依拠し、ガブリエルの思想とも関連させながら、思索を深めていこうと思う。

第一節 マウリツィオ・フェラーリスの「新しい実在論」と認知意味論

「新しい実在論」という名称を、今まさに時代の寵児となったマルクス・ガブリエルとともに考案したとされるマウリツィオ・フェラーリスの論考の中で、彼が擁護している「新しい実在論」は、「認知意味論」が擁護しようとしている、所謂「客観主義」とは違う実在論が素描されているように思われる。それゆえ、先ず、フェラーリスの論考から、彼のいう「実在論」を取り出しつつ、認知意味論が擁護しようとしている実在論と比較検討してみようと思う。そこで、先ず、フェラーリス自身が示している簡略化された図式を導入しておこう。

(一) 思考→現実

↑「形而上学的実在論」の立場：思考と現実とは「鏡像」のような一対一対応の関係を持つ。

(二) 思考←現実

↑「構築主義」の立場：思考は現実に対して構成的な役割を持つ。

(三) 思考←現実

↑フェラーリスの「積極的実在論」の立場：思考は現実から創発してくる弁でである。

フェラーリスによれば、「新しい実在論」は、それ以前にあった「反実在論」のヘゲモニーに対する反動として登場した。ここで言われているヘゲモニー的立場を維持してきた「反実在論」こそが、図式中に登場している「構築主義」である。この立場は、「事実は存在せず解釈だけが存在する」というニーチェの言葉を徹底化し、現実を構成するのは、私達の思考、例えば、概念図式や知覚装置、であって、それをあたかもクッキー生地にも形を与える「鋳型」のように利用して、それ自体は混沌とした無定形なヒューレーである現実を構築するのだ、と主張する。フェラーリスは、シェリングの「積極哲学」から影響を受け、自身の唱える実在論を「積極的実在論」と呼んでいるが、それは、存在は思考が生じる以前に既に与えられている、ということから出発する実在論なのである。

フェラーリスは、認識論と存在論との混同が起きてしまうその理由として「超越論的誤謬」と呼ぶものを提起している。彼は「超越論的誤謬」を定義して、「如何な

る認識も経験とともに始まるとすれば、およそ経験は構造的に不確かである以上、科学を通じて経験を基礎づける中で、経験の不確かさを安定させるアプリオリな構造を見出さなければならぬ」(180-181)としている。私達は、誰でも、デカルトの方法的懐疑の件を読めば、経験が人を欺き、確実性の根拠になり得ないかを理解し得るだろう。それゆえ、経験の偶然性を安定させるべく、アプリオリな認識論に依拠する必要を説くようになっていく。

彼は、互いに混同されてしまう二つの現実の層を区別することを提案し、二つの層にそれぞれ「 ϵ 現実」と「 ω 現実」という名称を使用する。「 ϵ 現実」は、「認識論的現実」で、私達が認識していると考えているものに結びついている。カントの「概念なき直観は盲目である」と述べる時、クワインが「存在するとは、変項の値である」と言う時の現実はこれである。

それに対して「 ω 現実」は、「 ϵ 現実」の基底に存在する「存在論的現実」、つまり、私達が認識するかどうかに関わらず存在するもの、一つの定立、抵抗として現れるものを指している。「認識論的誤謬」によって、哲学の力点は、「 ϵ 現実」に移行してしまったのである。こうした傾向性に抗って、「新しい實在論」とは現実について私達が持つ認識からの当の現実の独立に他ならないとされる。つまり、「認識論」に対する「存在論」の優位が唱えられ、「實在論」が元々持っていたはずの、自然的な対象が、当の対象を認識する私達の認識方法からは独立している、という信念を見直すことがその出発点としてある。例えば、フェラーリスが「修正不可能性」呼ぶ特徴があるが、存在するものそれ自体は、認識によって修正することができないゆえ、存在するものは、認識論に対する優位するということだ。また、概念の圏域の外に位置する経験の圏域にこそ、實在的なものは関わっているので、「非概念的な内容」は、抵抗であり、取り消すことのできないものであると同時にそれは、「経験の自律的な組織化(相互作用)」でもあるといった特徴を備える。フェラーリスは、「實在的なもの」は、まさに「抵抗」という点で、認識の極端な否定であると同時に存在の極端な肯定であるといった具合に認識と関わっているのだという。

フェラーリスは、「われわれは世界を思うままに変えることなどできない」という素朴な確信の中に、世界の「抵抗性(Resistance)」を見出す。そしてまさに、この素

朴実在論の出発点でもある、この「抵抗性」こそが、フェラーリスの「実在論」の出発点でもある。彼は、この「抵抗」という世界の在り方を「消極性」と特徴付け、この「抵抗」が「積極性」を引き出す源泉になっていると述べる。「世界はあらゆる存在からなる総体性を含んだ統制的理念」というカント的な世界理解は、世界が直接経験できないということが含意されているという。まさに、この直接経験し得ないという「抵抗性」自体が、私達の概念図式や認知機構を超えた世界自体の所与性を示しているのである。逆に、もし概念図式や認知機構が世界に対して構成的な関係にあるのなら、そこには世界による「抵抗」が生じるということがないだろう。これが、フェラーリスが仮想敵として挙げている「構築主義的世界観」との決定的違いに当たる。「世界が世界自身を与えている」という命題が「積極性」の一つ目の意味なのだ。

一つ目の意味から直ちに「世界の内に存在しているものがある」という「積極性」の二つ目の意味を導き出すことができるだろう。「世界の内にものがある」ということを、概念図式や認知機構を備えた主体の特徴に還元せずに、客体の特徴として留めておくことが可能だということだ。主体が、何かを構築し得るのも、そこで構築される「形式、意味、使用法」がほぼ既に「世界」の内にあり、人間や動物に呼び出されるのを待っているからだ。

「ものの現実の在り方が、世界に由来しているということが「積極性」の三つ目の意味である。この意味において、思考は、現実から創発してくる与件である、と考えるのである。その典型として、フェラーリスが挙げ、擁護しているのが「アフォーダンス理論」である。環境における様々な対象が有機体との交流を誘い、まさにフェラーリスが言うような対象の現実性から創発してくる様々な与件が存在するに至る。フェラーリスは「アフォーダンス理論」のみを取り上げているが、「認知意味論」の擁護する「イメージ図式」や「基本的カテゴリー」の創発もこの3つ目の「積極性」の証拠として挙げてもいいだろう。

仮想敵たる構築主義は、人間の思考が現実を決定すると考えるだろう。「客観主義」が奉じる「形而上学的実在論」では、リチャード・ローティが批判したように、思考と現実の関係は、十全たる鏡像関係にある。例えば、ローティが「専門的実在論」

と名付けているソール・クリプキの理論によれば、概念によって、未分化な多様な現実を私達の関心によって切り分けるというのではなく、世界は既に、個物の自然種に、さらには、そうした個物や種の本質的特徴とによって分割されているとしている。それゆえ、クリプキの場合、まさに、物理的事実の問題として、概念Xが何を指示しているのかを、それに対応する「自然種」あるいはその「本質的特徴」を対応付ける指示理論を組み立てることによって答えることができるとするのだ。分析哲学の圏域における実在論の問いの立て方は、フェラーリスの言うように、実在論は、真理について私達が持つ認識から当の真理の独立として定義できるというものになる。「真理」は認識論的な機能であり、心を前提するにもかかわらず、分析哲学は、クリプキの例にも見られるように、概念と現実の直接の対応説を構築することで、心による認識論的な機能からの「真理」の領域の独立を確保しようとしてきたのである。

かくて、フェラーリスは、世界の「抵抗性」という世界の在り方から「消極性」と「積極性」を導き出した。彼の実在論的発想において、存在は思考によって構成されたものではなく、存在は思考が現れるより先に与えられている、ということが重要である。彼の主張は、「存在するとは、何らかの環境の中で抵抗するということである」(186)とまとめることができる。これは、身体性を備えた人間存在が、環境の中で、物理的な力やエネルギーといった抵抗と出遭いながらも、「認知的無意識」を創発していくという認知意味論が擁護したい「実在論」的発想にも通じる考え方であろう。重要なことは、認識論的な基盤となっている「概念図式」自体が、身体的存在である人間と環境が相互作用した結果、存在論的に創発した「イメージ図式」や「基本的カテゴリー」のような「認知的無意識」なのだ、ということである。認知意味論は、かくて、フェラーリスの言う「超越論的誤謬」を超克するのである。

思考は現実から創発してくる与件であるという考え方が、フェラーリスの「積極的な実在論」の根幹をなす思想であるのなら、認知意味論の依拠する「創発主義」を支えてくれるような実在論を唱えているという点において、フェラーリスとは共闘し得ると考える。

第二節 マルクス・ガブリエルの「新しい実在論」とハイデガーからの影響

ジジエックとマルクス・ガブリエルの共著、『神話・狂気・哄笑』の第一章「反省という神話的存在」には、ガブリエルの署名があるがゆえに、明らかにガブリエルによって書かれている。その章の冒頭部分において、後に「世界は存在しない」というフレーズによって彼を有名にしたテーゼに相当する考え方が表明されており、そこには大変興味深いことにハイデガーの名前が見られるのだ。ガブリエルは、「世界を一つの対象領域に還元しようとするどんな試みも一つまり、どんな種類の素朴な存在的一元論も一必ず失敗する」(34~35)と述べ、早速その証明に入る。もし存在するということが、或る領域において対象として存在するということを意味するのなら、「世界」と呼ばれる全領域からなるこの領域は存在することができないとガブリエルは述べる。その理由は、「この全領域の領域は、全領域の領域とされたものを含む全領域の高階領域を形成して、或る領域の一対象となってしまう、従って、全領域の領域にはならないだろうからである」(37~38)。全ての領域の領域であるものをガブリエルに倣って「世界」と呼ぶとすると、「世界」はそれ自体如何なる領域にも現れないことで、他の全てが存在し得るというのである。ガブリエルが書いている通り、「究極的領域それ自体が場所ではなく、固有な空虚そのもの」つまり、「無」なのであり、それが「世界」ということになる。これは、まさに、彼を有名にした「世界は存在しない」というテーゼに通じているのだが、その件の後、ガブリエルは、「ハイデガーが述べるように、我々の対象への関係、即ち志向性は、究極的に無に晒されている。しかし無が世界そのものなのだ」(38)、と彼のテーゼとハイデガーの思索との関連を窺い知ることのできる文言を追加しているのだ。

そこにハイデガーが登場していることに暫く拘ってみたいと思う。なぜならば、「無」としか表象し得ない何かになってしまうことで、他の全てを存在させる、という事態は、ハイデガーが「脱去 (Entzug)」と呼んでいる事態だからだ。そこで、この「脱去 (Entzug)」と呼ばれる事態が何故起きるのかを確認しておこう。

ハイデガーは、プラトン以降の所謂「伝統的形而上学」の歴史によって覆い隠され忘却されてきた、存在の生成の次元を、その歴史の始原における哲学者達、即ち、アナクシマン드로ス、ヘラクレイトス、パルメニデス、による思索を追試すること

で、始原における「存在そのもの」を問う哲学に迫ろうとした。それによって、形而上学的思索において、何故、「脱去 (Entzug)」が起きるのかを明らかにしてくれている。それゆえ、私達も、ハイデガーの手引きによって、ギリシアの始原の思索を辿り直してみよう。

ハイデガーの思索を追試していくにあたって、彼が「ὁμολογεῖν (ホモロゲイン)」というギリシア語に与えた解釈は重要である。ホモロゲインとは、「同じことを言うこと」といった意味なのだが、ハイデガーはこの言葉の内にレゲインとロゴスを読み取り、「ロゴスと等しいことを言い表すこと」とする。ハイデガーは、ヘラクレイトスの断片 50 を解釈している。この断片は、「私にではなくロゴスに聴くのなら」という一節で良く知られている有名な断片だ。この断片中に、「ホモロゲイン」というギリシア語が使われているが、それは取り敢えず「ホモ (=同じこと)」を「レゲイン (=言う)」すること、即ち、「同じことを言う」ことという風に解釈できる。ただし、ハイデガーは、「ロゴス」の動詞型である「レゲイン」を「横たえる、拾い集める」のように解釈し、「集約する」と訳している。つまり、「ホモロゲイン」は、「同じことを集約する」ことなのだ。けれども、人間が「ロゴスを聴く」ことは、それが「ホモロゲイン」である限り、ロゴスと全く同じにはならないのだ、と言う。このずれが大変重要なのである。ハイデガーの解釈によると、ヘラクレイトスにとって、彼の思索の鍵となるロゴスは「集約するもの」ゆえ、同じくヘラクレイトスの断片に登場する「一 (=ヘン)」、「一切を合一化する」働きであるような、そんな「一 (=ヘン)」なのである。問題はこの「一切を合一化する」といった存在の「動的な次元」である。人間は「存在のロゴス」と「同じことを集約 (ホモロゲイン)」しようとするが、その際、動的な「一」である現前しているものを、集合論的に「全体」として表象してしまう。つまり、人間的なホモロゲインは、表象作用に陥ってしまいがちなのであり、それは常に存在を再現前化しようと試みるのだが、その際、必ず存在の動的次元を取り逃がしてしまうということになるのだ。この際に、動的な「一 (ヘン)」であるものが、静的な「多 (パンタ)」を取りまとめる全体として解釈されてしまうのだ。ヘラクレイトス有名な「万物が一つ (ヘン・パンタ)」というテーゼは、ハイデガー的に読解するのなら、「一つのものが万物を生成せしめる」

と「存在の動的次元」を強調して読解すべきだろう。再現前させることは、表象することであり、それは記号でもって媒介することだ。純粋に存在の動的次元に近づこうとするのなら、恐らく、存在に固有名を授けること、あるいは、存在の固有名を呼ぶことしかできなくなる。それが「一（ヘン）」である以上、固有名を使用せざるを得ないということになるし、その固有名的な次元を詩作によって開くしかなくなるだろう。しかし、「ヘン（一）」による現前化は、「再・現前化（Re-presentation）＝表象化」、即ち、人間的な「ホモロゲイン」としてしか成立し得ないのである。

しかし、人間は、そうした命名の所作が何なのかという情報を、つまり何に注目して命名したのか、ということに関する情報を供給しようとしてしまう。固有名詞をそのまま放置するわけにいかず、何らかの記述に頼らないわけにはいかないということこそが、言ってみれば人間固有の墮落なのだ。理解するために、表象作用によって再現前化してしまう、ということこそ、人間特有のホモロゲインなのである。ハイデガーは、人間特有のホモロゲインが、何に帰結してしまったのかを実に明瞭に語っている：

‘Ev（ヘン）がそのもの自身からしてΛογος（ロゴス）として聞きとられないで、むしろそれがΠαντα（パンタ）として現象するならば、そのときに、そしてただそのときのみ、現前するものの全ては、最高の現前するものの舵のもとに、この一なるもののもとにある一全体として自らを示すのである。現前するものの全体は、その最高のもののもとで、ゼウスとしてのヘンである。（1983,p.34）

表象作用によるホモロゲインは、「ヘン（一）」をロゴスから思索しようとせず、「パンタ（多）」として表象してしまい、「ヘン（一）」という存在の動的次元を忘却し、存在者の「全体」の内に「パンタ（多）」を取り込んだ上で表象したものを、「神（ゼウス）」に代表されるような「パンタ（多）」を全体として取り纏める集約者としての最高原理（あるいは第一原理）の下に秩序付けてしまう。集合論的に表象された「パンタ（多）」である存在者全体を秩序付ける最高の存在者（ゼウス）といった第一原理を探究することが、存在（ロゴス）の思索にとってかわってしまう時に、形而上学が始まるのだ。かくて表象作用によるホモロゲインは、「一」を「一」として

集約することはできない。ホモロゲイン（同じことを集約する）は、「同じことを繰り返そうとする」再・現前化の中で、存在の名詞的次元だけを受け取ることによって、「パンタ（多）」を言語で固定してしまうことで、存在の動的な次元を言葉にもたらしことに失敗してしまい、「パンタ（多）」は、集合論的な全体となってしまうのである。まさにそうした失敗の宿命から形而上学が誕生するのだ。「ヘン（一）」という動的な次元から送り付けられてくる「パンタ（多）」が集合論的な「全体」とされることで、動的な次元が忘却されてしまう。

人間的なホモロゲインが忘却してしまう次元に近づくために、別の基本語に耳を傾けてみることにしよう。それはパルメニデスの断片中に現われる'εὖνという語だ。このエオンというギリシア語は分詞であり、分詞として二重の性格を付与されているのである。即ち、「存在する」というその都度生成してくるような動的な意味合いと、「存在するもの」という時間が捨象されて全体化されて一括的に眺められたような静的、名詞的意味合いの二重性に刻印付けられているのである。分詞である'εὖνは、「存在する」ということと、「存在するもの」という二重性において思索されるのだが、ハイデガーはこの二重性を「二襞 (Zweifalt)」と呼んでいる。存在の動的次元である「ヘン（一）」であるとすれば、名詞的次元が「パンタ（多）」なのだ。

人間的なホモロゲインでは何が起きてしまうのだろうか。一言で言えば、存在を動的に送り付けてくる「ヘン（一）」が忘却され、「パンタ（多）」のみが「存在するもの」として集合論的な処理を受けてしまうことに問題がある。表象作用による形而上学的思考においては、「存在する」という「二襞」の内の動的な生成の次元が、全体的な視野からは「存在するもの」の集合体に等しいものであるという外見が生じ、「存在する」という生成の次元は、忘却されてしまう。その代わりに、「存在するもの」の集合の内、「ゼウス（神）」の名で代表される存在者、即ち、「最高度に存在するもの」や「最も普遍的に存在するもの」と記述される存在者が、「存在」の名称の下に思考されるようになってしまうのである。表象作用のもたらし集合論的思考の中では、「二襞」の内に差異としてある動的な生成の次元が忘却されてしまう。西欧形而上学が表象作用による思考法に支配され、「存在するもの」の集合体の内で、「何であるのか」という本質を問う問いを指針として思索を進める限りにおい

て、「存在するもの」へ思索が集中してしまい、「存在する」という動的な次元は捨象され忘却されてしまうだろう。かくて「存在するもの」の「何であるのか」、即ち、「本質」へのみ眼差しを向ける表象作用が、以後、今日に至るまで形而上学を支配するようになる。表象作用によって事象は集合論的に把握され、集合体のメンバーである「存在するもの」は本質を記述されていく。こうして意味論の体系は閉ざされ得るものと考えられるようになってしまう。だが「存在する」というダイナミックな生成の次元は、まさに集合論的意味体系の閉域に還元されるのを拒む力なのだ。人間的なホモロゲインは、表象しようとすることによって「二義」をその名詞的次元に固定化してしまい、動的次元を忘却してしまう。人間存在が存在に関わる限り、このような「二義」の名詞化は不可避なのだ。『ことばについての対話』でハイデガーが明言しているように、「形而上学的な表象のしかたは、ある点で不可避のもの」(1968, p. 56)である。こうして、表象作用が不可避である以上、ロゴス、あるいはエオンをその動的次元に即して「ヘン (一)」として捉えることができずに、「ヘン (一)」は、名詞化を被り「パンタ (多)」として現象し、「パンタ (多)」として表象された「存在するもの」の集合の内、ゼウスであるものが、最高原理として、「存在するもの」全体を統べるようになる。こうして「存在するもの」の集合に留まるだけの形而上学が支配するようになる。

第二の主著と呼ばれた『哲学への寄与』の中で、ハイデガーの言う「出来事 (Ereignis)」は、全ての存在者がその都度存立しているという事実性をいうのだが、Ereignis はそれ自体 Enteignis であり、それは己を引き去ること、退隱なのである。存在の動的な次元が表象化され名詞化を被り忘却されることで、この「脱去 (Entzug)」と呼ばれる「己を引き去ること」が生じる。存在という最も自明な事実に関わり合われているのが「現存在」なのであり、この「事実性」の外部に視座を持つことができない以上、この「関わり合い」を「接合」という形でその都度受容するしかないのだ。

この現象する「パンタ (多)」の全体を「ゼウス (神)」あるいは、ガブリエル風に言えば「世界」といった最高原理によって統括しようとする途端、パラドクスに陥ってしまうことになる。ここで、人間の行う「ホモロゲイン」が如何なるものな

のかを、ガブリエルの用語を使って説明してみようと思う。

存在するものは、今見てきたように名詞化を被る。即ち、私達がそれに述語を付与することで、私達にとって概念把握し得るもの、として規定されるのである。述語は、一つの集合を形成し、その述語に属するものの集合とそうでないものの集合に分けてしまうだろう。述語はこうして、その述語によって纏め上げられる集合である「対象領域」を生み出す。言い換えれば、存在する諸事物は「対象領域」の中に現れることによって概念把握されるのである。「対象領域」は世界の内に現れることによって把握される。定義上、最高原理たる世界は、あらゆる「対象領域」の領域であるべきものである。ここで、もし世界が存在するのなら、定義上、それは概念把握されるために、或る「対象領域」の中に現れねばならないということになるだろう。しかし、世界は定義上、「あらゆる対象領域の領域」でなければならないゆえ、世界は如何なる領域の中にも、現われることはできないということになるのだ。こうした論法によってガブリエルは、「よって世界は存在しない」という結論を導き出す。

言い換えれば、世界は世界の内に現れないのである。世界は私達のアクセスから逃れ去る、つまり、概念的把握の試みである、人間的な「ホモロゲイン」から世界は常に「脱却」することになる。「ヘン (一)」という存在の動的な次元が、「パンタ (多)」を可能にしながらも、それ自体は己を「脱却」することで、決して「あらゆる対象領域の領域」にはなり得なかったにもかかわらず、「パンタ (多)」を全体としての「世界」概念によって説明し尽すための「第一原理」への探求に人間を誘い続け、その結果、私達は形而上学の歴史を語ることができるのである。しかし、ガブリエルが論証して見せたように、「世界」の形而上学は、パラドクスを内包する試みだったのである。

結語 そして認知意味論

マーク・ジョンソンは、『心の中の身体』第8章、「成果はあがった、實在論も」において、ジョン・サールの実在論に関する見解を紹介している。ジョンソンは、サールの『志向性』から引用しているのだが、その引用箇所において、サールは、

実在論を巡る論争を無効にしてしまう、止めの一撃として、実在論は理論の名を冠するような代物ではないということを語り始める。そこで先ず、ジョンソンが『心の中の身体』において引用している『志向性』よりの一節を引用しよう。

私が「実在論」に荷担していることは、私が現にしている通りの仕方で行っているという事実によって示される。すなわち、私は車を運転し、ビールを飲み、論文を書き、講義をし、山でスキーをする。さて、以上は一つひとつが私の「志向性」の発現であるが、これらの活動すべてに加えて、さらに現実世界が存在するという「仮説」があるわけではない (384)。

この一節にジョンソンがコメントして語っているように、普通の人々は、世界に関する何らかの記述、あるいは記述の集合に荷担している。しかし、あらゆる記述は何らかの理論を暗黙裡の内に前提にしている。ゆえに、実在論に関する荷担は、理論的な荷担になるだろう。それゆえ、ジョンソンが言うように、サールが実在論に理論としての地位を認めないという点で、彼は間違っている。

けれども、注目に値するのは、サールのこの引用箇所結論部分、即ち、「これらの活動すべてに加えて、さらに現実世界が存在するという「仮説」があるわけではない」という件である。ガブリエルが、ハイデガーを援用して、以下のように述べていたことを思い出して欲しい。「ハイデガーが述べるように、我々の対象への関係、即ち志向性は、究極的に無に晒されている。しかし無が世界そのもののものだ」(38)と。つまり、「あらゆる領域の領域」である「世界」に向けられる志向性はガブリエル風に言えば、「無」に晒されるということになるのだ。従って、サールは、この点に限って、実在論を拒絶するということは可能なのだ。

それでは、何故私達は、サールが言うような余計な「仮説」を持ち出してしまうのだろうか。それは、ジョンソンが指摘しているように、世界の内に位置付けられているという感覚を、「神の眼」から物事を記述することができるという主張に変えてしまう時に、「形而上学的実在論」という誤りに陥る第一歩を踏み出すことになるということに気づかずにいるからだ。即ち、「あらゆる領域の領域」である「世界」が記述可能であるという錯覚を抱いてしまうのだ。

サールが挙げている日常生活に見られるような個々の事例は、ガブリエルの言う個々の「領域（後の「意味の場」）」に当たるわけだが、サールからの引用箇所結論部分、即ち「これらの活動すべてに加えて、さらに現実世界が存在するという「仮説」があるわけではない」を、こうした「領域」全てに加えて、「世界」と呼ばれる「全ての領域の領域」を仮説として置く必要はない、というように解釈するのならサールは正しい。「世界はあらゆる存在からなる総体性を含んだ統制的理念」というカント的な世界理解は、世界が直接経験できないということが含意されているわけで、サールの「世界」に関する「仮説」を追加してしまうことの奇妙さを論じた議論やガブリエルの「世界は存在しない」という発想もこの延長線上にあると言えるだろう。「認知意味論」の主張は、私達はその身体性を通して、実在に部分的に触れ、その効果として「認知的無意識」を創発していたということなのである。そしてジョンソンが言うように、「その触れ方は、唯一正しい仕方では、なく、自然を記述し得る一つあるいはそれ以上の可能な仕方」（396）なのである。

引用および参考文献（引用頁は本論中に記す）

- ガブリエル、ジジエク、『神話・狂気・哄笑』、大河内泰樹他監訳、堀之内出版、2015。
- ガブリエル、マルクス、『なぜ世界は存在しないのか』、清水一浩訳、講談社、2018。
- ジョンソン、M.、『心のなかの身体』、菅野盾樹訳、紀伊国屋書店、1991。
- ハイデガー、『世界像の時代』、桑木務訳、理想社、1962。
- ハイデガー、『乏しき時代の詩人』、手塚富雄訳、理想社、1958。
- ハイデガー、『カントと形而上学の問題』、木場深定訳、理想社、1967。
- ハイデガー、『存在と時間』、桑木務訳、岩波文庫、1960。
- ハイデガー、『ロゴス、モイラ、アレーテイア』、宇都宮芳明訳、理想社、1983。
- フェラーリス、『新しい実在論』pp.177~199、『現代思想 マルクス・ガブリエル』、青土社、2018。

執筆者紹介

高 口 圭 轉	(英語学)	安田女子大学教授
三 宅 英 文	(英語学)	安田女子大学教授
杉 山 正 二	(英語学)	岡山理科大学教授
山 川 健 一	(英語教育学)	安田女子大学准教授
青 木 順 子	(異文化コミュニケーション)	安田女子大学教授
青 木 克 仁	(認知意味論)	安田女子大学教授

学会活動報告

1 2020 年度研究発表会

12 月 16 日（水）

1 『蠅の王』のラカン派精神分析的読解

安田女子大学大学院 博士後期課程 井上 彩
(司会 島 克也)

2 Working Experience in USA

安田女子大学 准教授 門田 恭子
(司会 松岡 博信)

投 稿 規 定

- 1 会員による英語学、英米文学、英語教育学、異文化理解などに関する未発表の論文であること。
- 2 本論集は安田女子大学 文学部 英語英米文学科のホームページ上で公開し、著者には印刷物を2部寄贈する。
- 3 投稿書式設定と提出ファイル形式は以下の通りとする。
 - ・Microsoft Word 互換のソフトウェア(docx ファイルのみ)として保存し、PDF ファイルと共に編集長宛てに email で投稿する。
 - ・用紙サイズは A5 とし、余白は上左右各 15 ミリ、下 10 ミリ、文字数と行数を、文字数 35 文字、行数を 29 行に設定する。
 - ・本文を日本語で書く場合のフォントは MS 明朝 (10 ポイント)、英語で書く場合は Times New Roman (10.5 ポイント) の文字サイズを用いることとし、シングルスペースの行間とする。
 - ・題目 (12 ポイント・ボールド) は、2 行目から書き出し、センタリングする。サブタイトル (12 ポイント) は、題目の 1 行下に入れ、センタリングする。
 - ・著者名 (12 ポイント・ボールド) は、題目の後に 1 行スペースを空けて記入し、センタリングする。
 - ・Abstract (10 ポイント) は、著者名の後に 1 行スペースを空けて書き始める。
 - ・Abstract は、日本語であれば 400 字以内、英語であれば 200 語以内とする。なお、abstract のタイトル部分のみ太字 (ボールド) とする。
 - ・本文は、abstract の後に 1 行スペースを空け、セクションの題目 (10.5 ポイント・ボールド・センタリング) を挿入した後から書き始める。なお、セクションの数字は 1 から始めることとする。1.1. のようなセクションの下位項目の題目 (日本語 10 ポイント・ボールド、英語 10.5 ポイント・ボールド) は、左詰めにする。
 - ・論文の長さは、注、図表、参考文献などを含めて 10 から 20 頁とする。
 - ・引用、参考文献などの書式は、それぞれの分野に応じたものを用いる。
 - ・注 (9 ポイント) は脚注とする。
 - ・投稿時には完成した原稿を提出し、校正は確認用の PDF ファイルを一度送ることで最終とする。

附 則

この改正規定は、平成 5 年 6 月 17 日から施行する。
この改正規定は、平成 9 年 6 月 19 日から施行する。
この改正規定は、平成 14 年 6 月 20 日から施行する。
この改正規定は、平成 22 年 5 月 13 日から施行する。
この改正規定は、平成 25 年 6 月 17 日から施行する。
この改正規定は、平成 30 年 7 月 12 日から施行する。

安田女子大学英語英米文学会会則

第1条 本会は安田女子大学英語英米文学会と称する。

第2条 本会は英語学・英米文学・英語教育学を中心とする学術的研究とその啓発を目的とする。

第3条 本会は前条の目的を達成するために次の事業を行う。

- 1 研究会・研究発表会・講演会等の開催
- 2 機関誌の発行
- 3 その他必要と認められる事業

第4条 本会は次の会員および準会員で組織する。
会員

- 1 本学英語英米文学科専任教員
- 2 本学大学院英語学英米文学専攻の在学生
- 3 その他、本会の主旨に賛同し、入会を希望して評議員会の承認を受けた者
- 4 会員は本会主催の行事に参加すると共に、研究発表会における研究発表及び機関誌への投稿を行うことができる。

準会員

- 1 本学文学部英語英米文学科の在学生
- 2 準会員は本会主催の行事に参加することはできるが、研究発表会における研究発表及び機関誌への投稿を行うことはできない。

第5条 本会に名誉会員を置くことができる。名誉会員は本会の発展に貢献が認められた本学退職教員の中から役員会の推薦を受け、評議員会の承認をもって決定される。

第6条 本会に次の役員を置き、役員会を組織し、事業の運営にあたる。

- 1 会 長
本学文学部英語英米文学科長を充てる。
- 2 運営委員
教 員 若干名、互選により選出する。
- 3 会計監査
(ア) 教 員 2名、互選により選出する。
(イ) 大学院生 1名、互選により選出する。

第7条 本会に次の評議委員会を置き、評議員会を組織し、事業計画の審議、会則の改正、監査報告の承認等を行う。評議員会は会長が召集する。評議員会は年1回以上開催する。

- 1 本学英語英米文学科専任教員
- 2 大学院生1名、互選により選出する。

第8条 評議員会は、構成員の過半数の出席をもって成立する。委任状はこれを認める。会則の改正には3分の2以上の賛成を要する。

第9条 役員は年度初めに選出し、評議員会において審議のうえ、承認する。役員の任期は1年とし、再任を妨げない。

第10条 本会の会員の会費は年額3,000円とし、毎年度初めに納入する。ただし、大学院生会員の会費は年額1,500円とする。2年以上連続して会費未納の者は、自動的に会員の資格を失うものとする。また、準会員の会費は無料とする。

第11条 本会は事務局を本学文学部英語英米文学科事務室内に置く。

第12条 本会の会則の施行に関する必要な事項は別に定める。

第13条 本会は平成3年4月1日に発足する。

施行細則

1 運営委員（教員）は幹事、書記、編集とする。

2 教員の委員は5名とする。

(ア) 幹事2名、書記1名、編集2名とする。ただし、幹事のうち1名は運営委員長を務める。

(イ) 会計は本会事務局（英語英米文学科事務室）の担当とする。

3 会費の納入は、以下のいずれかによるものとする。

(ア) 会計へ直接納入

(イ) 現金書留での郵送

(ウ) 学会口座への振込

附 則

この改正規定は、平成 6 年 5 月 1 9 日から施行する。

この改正規定は、平成 8 年 6 月 1 3 日から施行する。

この改正規定は、平成 1 3 年 7 月 5 日から施行する。

この改正規定は、平成 1 5 年 5 月 1 5 日から施行する。

この改正規定は、平成 2 2 年 5 月 1 3 日から施行する。

この改正規定は、平成 3 0 年 4 月 1 日から施行する。

編集委員 三宅 英文
島 克也

英語英米文学論集 第三十号
2021 年 2 月 18 日発行

発行者 安田女子大学英語英米文学会
代表者 松岡 博 信
広島市安佐南区安東 6-13-1

印刷所 株式会社 山菊